言峰士郎の聖杯戦争

くま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言峰士郎の聖杯戦争

【Ｎコード】
Ｎ２８５５Ｓ

【作者名】
くま

【あらすじ】
もしも、養父が衛宮切嗣ではなく、言峰綺礼だったら。というＩＦストーリー。衛宮士郎ではなく、言峰士郎です。

第一話　始まりと悪夢（前書き）

初投稿となります。拙い文章ですが、読んでもらえれば幸いです。

第一話　始まりと悪夢

その空は、まるで血をぶちまかしたように赤く濁っていて。
その太陽は、今までに見たどの黒色よりも黒く見えた。

歩くのが辛い。動くのが辛い。呼吸が辛い。
それでも、どれか一つでも怠れば、自分が自分でなくなるのは分かった。
だから、歩く。だから、動く。だから、呼吸する。
たとえ、一歩進むごとに激痛が体を襲おうとも。
たとえ、動かした体の部位が嫌な音を立てようとも。
たとえ、吸った息が喉を焼きつかせるようなものでも。
それは少しでも生きることに繋がるのだから。
もとより選択肢なんてないのだから。

だが、何事にも限度はある。
何とかここまで進んできたけど、それももう限界。酷使し続けた足は、意志に反してその動きを止めてしまった。支えのなくなった体は、地面へと突っ伏してしまう。
空は曇天に変わっていたが、周囲の状況が良くなったとは言えない。
蓄積した疲労と痛みは限界を超えている。このままでいたら数分もかけずに永遠に眠れるだろう。
俺は、ここで死ぬ。

俺の中の冷静な部分が、避けようのない未来を暗示する。
いや、それは暗示なんかではない。抗えない確約された未来だ。
奇跡でも起きなければ、避けることのできない未来だ。
奇跡というのは起きないから奇跡。
ともすれば、目の前に迫る死を受け入れるのも道理。

「ほう、まだ生者がいたか」

そんな死に体の自分に声をかける者がいるとは思わず、反応が遅れた。
わずかばかり残っていた力を総動員させて、声の方を向く。

「問おう、童。貴様は・・・生を求めるか？」

そんな俺を見て、男が問いかける。

その顔には、こんな現状に似つかわしくない、愉悦に満ちた歪な笑みが張り付いていた。

■

「で、これは何ですか？」
「・・・カップラーメンです」
「・・・・・・・・・はぁ・・・」

テーブルの上には、日本人なら誰もが目にしたことがあるだろう物品が、山になって置いてある。
その名も○清カップヌードル。
食料庫から引きずり出してきたものだ。

「・・・一応、訊きましょう。今は何時ですか？」

ため息交じりにギルが訊いてくる。
もちろん、その質問の意味が分からない俺ではない。

「七時だな。正確には七時十五分前」

ほら、ちゃんと答えてやったぞ。だからその憐れむような眼を即刻止めろ。

「・・・アレですか、また見たんですか？」
「・・・その通り」

カップラーメンを食べる手を止める。そもそも、朝からこんな不健康促進物品を好き好んで食べたいと思っちゃいない。一口で十分だ、こんなの。

「まったく。士郎も素直じゃないんだから」

いや、待て、どういう意味だ、それ？と、訊く前に、ギルは自分の分のカップラーメンにお湯を注ぎに行った。問いかけるより早く、その姿は台所へと消えてしまう。どうにも調子が狂っているみたいだ。胸糞悪い。というかそもそも、あんな夢を見るのがいけないのだ。

十年前の冬木の大災害。そこで、助かる夢。

悪夢だ、悪夢。助かった当時は頻繁に見ていた悪夢。もうとうの間に廃れたと思っていた悪夢。どういうわけかここ最近また見るようになった悪夢。

理由はなんとなくだが思い当たる。今は亡き養父に、事の顛末は教えられていたからな。色々と。

「で、どこまで見たんですか？」

昨日の余りを手に戻って来るギル。どうもカップラーメンだけでは不服らしい。

「我が愛する親父殿の満面なる笑みがラストシーン」

「うへぇ」

いや、おい、仮にも元育ての主に対しての態度じゃないだろ、それ。気持ちはよく理解できるが。

「よりにもよってそこで目覚めるとは・・・災難ですね」

人事のように締めくくるな、お前も半分当事者みたいなものだろうが。

「いえいえ、あれは僕じゃないですよ。我の方です」

「・・・心の中で呟いたつもりなんだが」

「顔に出ていますよ」

そう言って、昨日の残り物を口に運ぶギル。

と、会話してて忘れてた。そろそろ出かけないと拙い。

「悪い、もう行く。後片付け頼んだ」

ここから学校までは、そんな距離があるわけじゃない。授業に間に合うためだけなら、もっとゆっくりできる。具体的にはプラス三十分以上。

だが残念。俺は授業よりも優先する事項があるのだ。遅れたら、しばらくは機嫌をなだめるのに労力を費やすことになる。いつもなら、それもいいかなんて思ってしまうが、如何せん今日はそんな余裕はないのだ。

「行ってきます！」

出かける挨拶は忘れずに。

さ、急げ言峰士郎。

我が幼馴染がご立腹になる前に。

第一話　始まりと悪夢（後書き）

以上、第一話でした。

なるべく早く更新していきたいと思います。

応援していただけたら幸いです。

第二話　監督役と参加者

腐れ縁。
俺と凛の関係を表すのに、これほど適した言葉は無いだろう。幼馴染なんて高尚な言葉よりも、こっちのほうがしっくりくる。
お互い出会ったのは、十年前の教会。怪我が治って、今思えば不幸中の不幸で、綺礼の養子となってすぐのことだった。
ある日、教会に連れて来られたその少女は、遠目にも圧倒的な存在感を放っていた。

「初めまして。遠坂凛です。よろしく」

見惚れたさ。その姿に。その振る舞いに。その存在に。
たかが挨拶一つすら、俺にはまぶしかった。
たぶん、言峰士郎になって、一番の衝撃を感じた瞬間だったと思う。
天使というのが存在するのなら、目の前の少女こそがそうではないか。なんて思ってしまったほどだ。

もっとも、そんな感慨は出会って一週間で破壊されたのだが・・・

■

凛との会話は、すぐに終わった。
内容は簡単。今夜『喚ぶ』とのことだけ。
別段、呼びだしてまで発言することではないが、これもあいつなりのけじめということか。

「そっか・・・成功するよう祈る」
「ふん、私を誰だと思っているのよ」

腕を組んで仁王立ち。
体から、その圧倒的な威圧感を噴出させ、俺の心配を一蹴する。

「遠坂家現当主、遠坂凛よ。みてなさい、絶対にセイバーを召喚してやるんだから！」

ビシッと指を突きつけ宣言。おまけに、クラス名まで指定しやがった。
名は体を表すと言うが、これほどまでに如実に表れている人物はそうはいないだろう。心配するだけ失礼だったか。頼もしい限りだ、まったく。

「はっはっは、やられたら教会に逃げて来い。身の安全と三食＋おやつまで保障してやる」
「へぇ、ずいぶんな好条件じゃない、それ」
「気が向いたら泰山にも連れて行こう」
「げっ、それ余計」

ミス穂群原の名にあるまじき表情に変わる。そんなに嫌か、泰山。

あそこ、麻婆豆腐以外はマトモだぞ。麻婆豆腐以外は。

■

二三軽口をたたき合って、俺たちは別れた。
凛は教室へ。俺はまだ屋上に。

「ふぅ・・・」

誰もいないことを確認して、左手の甲に巻いていた包帯を外す。
そこには、起きた時にはなかった、紋様のような痣があった。

「・・・はっ」

ツイテいない。まったくもってツイテいない。
先ほど、学校へ向かう最中に現れた兆し。痛みとともに現れた兆し。
それが意味すること。それすなわち、

「監督役でありながら参加者ってか、おい」

いくら聖杯の意志で参加者が決定されるとはいえ、監督役が参加するってどうさ。

「ふん・・・・・・・・・まぁ、これも道理、か」

思い当たる節はある。なにせ、当時のことは包み隠さず教えてくれた。

まったく。立つ鳥跡を濁さずとは言うが、我が養父殿はずいぶんと大きな汚れを残してくれたものだ。

「洒落にならないぜ・・・・・・・・・ちくしょうが」

今頃、養父殿はあの世で笑っているだろう。あの歪な笑顔で。

――――喜べ士郎。貴様の願いは叶う。

突風と共に、聞き覚えのある声で、そんな言葉が聞こえた気がした。

第二話　監督役と参加者（後書き）

二話目です。

士郎君の設定は追々書いていきます。根っこはお人好しの方向で進めたいと思います。

一部修正、改変しました。

第三話　幼女と狂戦士

聖杯戦争。
それは、七人のマスターが、七体のサーヴァントを使役して争うバトルロワイアル。
剣兵のサーヴァント、セイバー。
弓兵のサーヴァント、アーチャー。
槍兵のサーヴァント、ランサー。
騎兵のサーヴァント、ライダー。
魔術師のサーヴァント、キャスター。
暗殺者のサーヴァント、アサシン。
狂戦士のサーヴァント、バーサーカー。
以上七体。選ばれるは、人の枠組みから外れた、英霊と呼ばれる存在。
アインツベルン、マキリ、遠坂の三家によって開催されたこの殺し合いは、此度でついに五度目を迎える。

此度の聖杯戦争は、どのような物語を紡ぐのか。
今宵、その幕が上がる。

■

完全なものなど、この世にない。
どんなものにだって、欠陥や綻びは存在する。それが人の造ったものならなおさらのこと。たとえ過去に異常が見られなかったとはいえ、今回もその先も異常がないとは言い切れない。
だから、今回のはその異常というやつに該当するんだろう。
監督役が参加者として選ばれただけ、と聞けば大したことのないように聞こえるが、監督役とはイコール中立でもある。名が示す通り、円滑に聖杯戦争が進むようにしなければいけない。それに、同時に被害などを最小限にとどめるようにする、戦いに敗れたマスターを保護するなど、やることは多い。
いうなれば、裏方。決して表には出ない、縁の下の力持ち。
それがどうして参加資格を有してしまうのか・・・
可能性としては、低確率ながらありえなくはない。が、出来れば、自分の代に起きてほしくなかった、イレギュラー。まぁ、起きてしまったことはしょうがない。あるがままを受け入れるまでだ。

しかし、なぁ・・・

せっかく聖杯が選んでくれたはいいが、俺は特に叶えたい願いがあるわけではない。
今の生活にそれなりに満足しているし、将来に関しても特に不満は無い。というかそもそも、こんな組織に籍を置いている時点で、俺の将来は頼まなくとも勝手に決まっている。不況などどこ吹く風だ。
決められたレールの上？大いに結構。
まぁ、強いてあげるとするなら、今後の俺の人生が安泰でありますように・・・とか？
御三家みたく壮大な宿願を持っているわけじゃないし、家柄に執着

する考えもない。
早い話が、参加資格は有しているけども、俺は参加する気などさらさないのだ。

じゃ、ま、どうしますかね、これ・・・

■

「ところでギルはどうするんだ？」
夕食後、デザートにギルの買ってきてくれた大判焼きを食べながら、何とはなしに訊いてみる。もちろん、聖杯戦争についてだ。
「さぁ、どうでしょうね？少なくとも、僕は関与するつもりはないですよ」
僕は、ですか。はいそうですか。
分かっているんだろうけど、そういうことを訊きたかったわけじゃないんですよ、俺は。

「士郎は大変ですよね。なんたって監督役なんですから」

ちくしょう、他人事だと思いやがって。

「そう思うなら手伝ってくれ。たかだか高校生には荷が重すぎる副業だぜ、これ」

「いえいえ。謹んで辞退させていただきますよ、僕は」

にっこり笑って断るギル。商店街のみなさんを虜にするあの天使スマイル。論議するだけ不毛っていうことですか、そうですか。

いや、ま、実際は引き受けられても困るのだが。特にこちらの精神衛生上。

なんたって、ギルは前回の聖杯戦争から現界を続けている、受肉したサーヴァント。今のその外見こそ年端のいかぬ子どもだが、その身は古代の英霊。その手の研究をする魔術師にとっては、文字通り、のどから手が出るほどほしい生きたサンプルだ。

もっとも、そんな不埒な輩など、ギルにとっては路傍の小石ほどの存在もないのだろうけど。

「む、何か失礼なこと考えませんでしたか？」

「いや、そんなことはない。頼むから暴れてくれるなよ、と思っただけだ」

「ひどいなぁ、僕は暴れませんよ、僕は」

ああ、そうとも。お前は暴れないだろうさ、お前は。

「ホント・・・永遠の不思議だよ・・・」

「ははは、僕だって理解不能ですよ・・・」

自分のことなのに。

そう付け加えて、俺たちはそろってため息をついた。

■

「んじゃ、ま、ちょっと出かけるわ」

身に纏うはいつもの戦闘服。全身黒ずくめの、早い話が神父の恰好だ。

だが、侮ることなかれ。このカソック、防熱、防寒、防弾に優れ、あまつさえ様々な道具をしまうスペースもある。

もともと、代行者として戦闘を行うことを前提に造られた服。戦闘用の服としては、十分すぎるスペックを誇る。

ま、それ以上に、高校生としてよりも、神父としてのほうが色々と動きやすい、というのがあるのだが。

早い話が、巡回と後処理の確認。なるべく円滑に物事は進んでほしいけど、そうもいかないのが世の常と言うべきか。なにせすでに先日、フライングで暴れた馬鹿どもの後始末を片づけたばかり。今もまた、そんなめんどくさいことが起こっている可能性は無きにしも非ず。否、むしろ高確率。霊器盤が正確に作動しているのなら、すでに冬木市には五体のサーヴァントが現界している。血の気の早いやつらは、もうすでに動いているだろう。ったく、少しは後処理に走るこっちの身にもなれってんだ、かったりぃ。

「んっん〜、おっけーかなーっと」

そんなわけで、現在港。後処理の確認のためだ。
つっても、後処理というよりは、認知障害の結界が働いているかどうかを確認。今はあれなので、時期をみて適当なところで上手いとこ修復するつもりだ。まったく、神秘の秘匿も楽じゃない。

「んじゃ、ま、帰りますかね」

特に問題なし。
そう思って立ち上がった時だった。

「ねぇ、貴方、何？」

そんな、背筋がうすら寒くなるような声が聞こえた。
ゆっくりと、擬音をつけるならギギギ、と。錆びれたノズルを回すがごとく背後を振り返る。

そこには、否定しようのない『死』があった。

おいおい、と。冗談じゃないぜこんちくしょう。
何かやたらでっかい化け物と、対象的にちっちゃな幼女。
うん。拙い。何かよくわからないけど、本能が訴えている。拙い、と。

「あら、ごめんなさい。人の名前を訊くときは、まず自分からだったわよね。

初めまして。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです」
そう言って、どこぞの令嬢よろしく優雅に挨拶する目の前の幼女。
その動き一つ一つは、さすがはアインツベルン家というべきものであって・・・

「って、アインツベルンってあのアインツベルンか！？」

驚く俺を見て、くすりと、アインツベルンは微笑む。

「そう。そのアインツベルンよ。
それで、貴方はいったい何？」

二コリ、と。その笑みに背筋が冷える。
にこやかに笑いかけているつもりなのだろうが、言いようのない威圧感がある。それが目の前の幼女なのか、はたまた背後に控えているデカブツのものなのか。いずれにせよ今日こんな深夜に外に出たのは間違いだったか。

「・・・・・何って。見ての通りですよ、アインツベルン殿。此度の聖杯戦争の監督役を任されました、言峰士郎です」
「そう」

自分から訊いてきたくせに、ずいぶんと冷めた返答をしてくる。

「それで、貴方はこんなところで一体何をしているのかしら」
「後始末を。結界がちゃんと作動しているかを確認するだけですが」
「ふーん、まぁいいわ。・・・・・とりあえず、そのうすら寒い口調止めて。不快よ」
「それはありがたい」

いや、敬語苦手なんだよね、俺。

「で、アインツベルンがこんな場所まで何用で？」
「あら、こんな辺鄙な土地まで来て、他にやることがあるとでも？」
「オーケー、質問を変えよう。この港に来た理由は？」
「あら、こんな辺鄙な港まで来て、他にやることがあるとでも？」

アインツベルンの目が、妖しく光る。
拙い。どうしようもなく拙い。

「あー、オーケーオーケー。それでは、良い夜を・・・・・・」

てことで、三十六計逃げるにしかず。
身を翻して逃げようとして、

「逃がさないわ。やっちゃえ、バーサーカー！」
「■■■■■――――――！！！！」

背後から、死刑宣告と呼応する雄叫びが聞こえてきた。・・・なんでさ？

「いや、ちょっと待て！俺は監督役だ！」
「ん～？ちょっと遊んでもらうだけだよ？」
「それのどこがだ、糞ガキ！」

後ろから雄叫びとともに迫って来るバーサーカー。
遊んでもらう、だ？その斧剣がかすっただけでお陀仏だ、こんちくしょう！

「なっ！・・・いいわ、バーサーカー。そこの礼儀知らずを叩きのめして！」

「■■■■■――――――！！！」

唸りをあげて斧剣がせまる。大きなモーションでの一撃。

「う、おおおおおおおおおおおお！！！」

が、サーヴァントならともかく、俺は生身の人間だ。避けることなど不可能。

黒鍵を盾にして、後ろに跳ぶのが精いっぱい。

「がっ！」

想像以上の衝撃。耐えることはおろか、受け流すこともできず、勢いに従って吹き飛ばされる。

「がはっ、げほっ、・・・・・・っぁあ」

骨格が歪む。筋肉が悲鳴を上げる。あまりの衝撃に息が出来ない。

ちくしょう、流石は英霊。代行者として経験を積んできたってのに、そんなもんほとんど役にたたねぇ。いや、一撃くらって生きていただけよしとすべきか？

「解析（トレース）、開始（オン）」

いつもの呪文を口にして、体の調子を確かめる。

右腕が折れている。が、それだけ。瞬時に強化をかけたおかげで、他に目立った外傷はない。衝撃で、中の血管がいくつか破けたようだが、主要なものは無事。打ち所が悪く、少し目眩がする。それく

らいか。良かった、良かった・・・・・・・

「ふーん、バーサーカーの一撃を受けて生きているなんて。意外とやるじゃない」

訂正。目の前に脅威があります。現状は最悪です。

「はっ、満身創痍もいいところだがな」

「あら、誇ってもいいのよ。そんじょそこらのサーヴァントじゃなく、私のサーヴァントの一撃をくらっても生きているのだから」

「じゃ、賞賛ついでに助けてくれると嬉しいんですけどね・・・・・・」

「え～、ど～しようかな～♪」

認めたくはないが、今の俺の生存権はあちらが握っている。

生かすも殺すも目の前の凸凹コンビしだい。

「ふんふふ～ん♪・・・・・・よーし、決めた！殺っちゃえ、バーサーカー！」

いや、ま、分かっていたことですけどね？

「あー、アインツベルンせんせー。質問です」

「あら、なにかな？生徒一号？」

「せんせーは、なんで僕を殺すことにしたのですか？」

「えー、だって別に監督役がいる必要ないし。私一人でも聖杯の下ろし方とか知っているもーん」

「ほうほう」

「そしてなにより！」

「なにより？」

「せんせーは生徒一号の事が嫌いです！以上！」

わー、身も蓋もなーい。
というわけで、斧を構えてこちらに踏み出すバーサーカー。
なるほど、生前は確かにさぞ名のある英雄だったのだろう。かかってくるプレッシャーで体が笑う。代行者として仕事をしていたときも、これほどのものをもった相手はいなかった。

俺は、死ぬ。

目の前には、明確な死が迫ってきている。
これほどまでにしっかりと死を認識したことは・・・そうだな、綺礼に拾われたあの大火災以来だ。
だけど、

「誰がおとなしく殺されてやるかっての」

これほどまでじゃなくても、死にそうな目には何度もあってきた。
自分より強いやつらと戦ったことだって、一度や二度じゃない。負ければ死ぬ闘いで、俺は何度も生き延びてきた。
あきらめる？
否、そんなことはありえない。

「へー、立てるんだ。すごいじゃない」
「丈夫なのが取り柄なんでね」

軽口を叩いて立ち上がる。
チャンスは一度。失敗は許されない。

「何をしようとしているのか知らないけれど無駄よ。私のバーサー

カーは最強だもの」
「そりゃ怖い」
撃鉄を起こす。二十七本全ての魔術回路に魔力を流す。黒鍵を強化。言峰の刻印を起動。
「ふーん・・・もういいや。バーサーカー、殺っちゃえ」
慈悲の一遍もない冷酷な宣告。それに応じて、構えていた斧が振るわれる。
狙いは胴体。黒鍵を盾にしやすいところを狙ったのは、一撃で終わらさずにいたぶるつもりか。
「っ！」
振るわれた一撃に耐えることなく、またも吹き飛ぶ。前もってしっかりと体を強化していたにもかかわらず、体は悲鳴をあげる。けれど、同時にこれはチャンス。吹き飛ばされ転がりながらも、無理矢理体勢を直す。
「強化（トレース）、開始（オン）」
あのバカ力で二回も吹き飛ばされた。ガードした右腕は折れてしまった。肋骨も、良くて二、三本は折れている。次に同じような攻撃をくらったら、多分死ぬ。死ななくとも動けなくなる。
だから、逃げる。強化したのは両足。ボロボロの上半身とは違い、まだ余裕のある下半身。
飛ばされた勢いも含め、ロケットダッシュでその場を離脱。本気を出せば、百メートル五秒で走り抜けられる。敵わぬのなら逃げる。
敗走？どうとでも言え、俺とて命は惜しい。てか、そもそもこれは

勝負にすらなっていない。

「■■■■■――――――！！！」

背後からあの狂戦士の雄叫びが聞こえてきたが、そんなものに構っている余裕はない。振り向く労力すら惜しい。全力で脱出、全力で逃走。追いつかれる前に、少しでも遠くへ。無駄？まだ分からない。早々に諦められるほど、俺は人間できちゃいやしない。見苦しくとも、最後まで足掻く。まだ死んでたまるか。

ああ、クソ。もっと早く走れないのか。体が重い、悲鳴をあげていやがる。それに応じて足も変だ。拙い、このままだと追いつかれる。人払いの結界がどこまで作用しているか分からないけど、少なくとも周囲一キロくらいは張っているだろう。全力で走って・・・あー・・・単純計算約一分かかる。体の調子？地形？それを考えたら倍はかかるか。ちくしょうめ、だからどうした。そんなことより走れ、走れ、走れ。

結局、教会に着くまで終ぞ襲撃はなかった。

白い幼女も、鉛色のデカブツも、後を追ってはこなかった。

第三話　幼女と狂戦士（後書き）

三話目でした。

イリヤ登場です。でも、言峰士郎なので特に接点はありません。

本当なら、士郎君がサーヴァントを喚び出すところまで進めたかったのですが、一旦区切ることに。小説を書くって難しい・・・・・・

読んでくださった方々、ありがとうございます。

それでは。

一部分修正しました。

第四話　空きと召喚

「ふーん・・・・・・なかなかやるじゃない、あれ」

場所は港。銀色の少女がつぶやく。

「まだ逃げようなんて考えられたなんて」

くすくすくす。さもおかしそうに笑うと、くるりと己の従者へ向き直る。

「足りないよね、バーサーカー」

あの監督役は死んでいない。二回もバーサーカーの攻撃を受けときながら、まだ死んではいない。

だけどそれは些細なコト。視界に映ったから殺そうとしただけで、あの監督役が死のうが生きようが少女には何の関心もない。

「出てきなさい。いるのは分かっているんだから」

同時に、彼女の従者が斧剣をふるう。

だが、その一撃に手ごたえは無い。ひらひらと布切れが舞い、すぐに消滅した。

「のぞき見なんて、悪趣味ね」

不快感を隠そうともせずに悪態をつく。

「キャスターのサーヴァントかしら・・・・・・いいわ、次はソレ

にしましょう」
無粋な輩に鉄槌を。
少女の顔が、妖しく微笑んだ。

■

「はぁ、はぁ・・・」
クソみたいに重い扉を開け、なんとか教会に入る。
「あぁ・・・ちくしょうめ・・・」
ボロボロだ。詳しく解析するまでもない。
サーヴァントの攻撃を二回も受けた。全力でふるったわけではないだろうが、如何せん体の造りが違う。強化で耐久力を上げようと、経験と直感で負担を減らそうと、焼け石に水もいいところだ。いや、こうやって生きている分、まったくの無駄ではなかったが。
それでも、傷ついた体に鞭打っての魔術の強行は、決して最善の手ではなかった。いくら逃げるためとはいえ、もう少し別の方法もなくは無かったのかもしれない。

「げほっ、っあぁ・・・」

分かっている。俺は逃がされた。どういう料簡かは知らないが、俺はあのコンビに逃がされた。決して逃げおおせたんじゃない。あいつらは、それこそ俺なんか一撃で屠れた。あの巨人が本気で斧を振るったのなら、ガードする間もなく俺は殺された。それこそ、逃げるなんてもってのほか。たとえ万全の状態でも、あの巨人から逃げる術は無かった。

「はぁ・・・はぁ・・・ははっ・・・」

痛む体を引きずって、地下へ向かう。あそこなら、霊脈の上ということで魔方陣が設置してあるし、この体の治癒効果も存分に望める。酷い状態だとは思う。一番損傷が激しいのは右腕。二度も規格外の衝撃に耐えた右腕は、すでに見るもおぞましい状態だ。支えてないと、多分千切れる。ぶちっと。

肋骨は・・・・・・まぁ、いいや。右腕ほどひどい状態じゃない。幸い、砕けた破片は主要な臓器を傷つけてはいないようだし。右肩も、まぁ、右腕ほどは酷くない。

無茶な状態での強化のせいで、両足もダメージを負っている。けど、一眠りすれば日常生活を送る分には問題なくなるだろう。師事した二人のおかげで、頑丈さと回復力は無駄に高いのだ、俺。

「よい・・・しょ・・・・・・」

ダメージを負いすぎたせいか、体に力が入らない。ドア一つ開けるのすら大変だ。

だが、これでラスト。開けた扉の先には、見慣れた工房がある。

「あー・・・死ぬー・・・」

辿りつくやいなや、そのまま突っ伏してしまう。なるべく右腕に負担をかけないよう、転がるようにして魔方陣の中心へ。それで終わり。全力を使い果たした、もう動けない。
あー、待て待て。力尽きる前にもう一度。しっかり回っているかを確認しないと。

「同調（トレース）、開始（オン）」

■

通常、サーヴァントを呼ぶには、何かしら英霊に縁のあるものを用意する必要がある。というのも、その品を触媒に英霊を召喚するのが、一番確実だからだ。
が、触媒がなくとも、召喚はできることにはできる。ただし、その場合は自分と気質が似通っているのや、縁のある存在がサーヴァントとして召喚される。
前者は、狙った英霊が狙ったクラスで召喚しやすく、後者は、自分と似通った英霊が召喚されやすい。
どちらが有利かと問われれば、それは確実に前者の方だろう。何せ、サーヴァントは、所詮は聖杯戦争中限定の道具。参加するマスターたちは、偶然にも聖杯に選ばれもしない限りは、サーヴァントと言

う存在も、聖杯戦争という殺し合いも、しっかりと理解したうえで闘いに臨む。
マスターに願いがあるように、サーヴァントにも願いはある。ゆえに、両者は結託して聖杯戦争を勝ち抜こうとする。ならば、少しでも知名度の恩恵を得られる、世界的に有名な英霊を召喚したいのは、誰もが思う必然のこと。なかよしこよしで勝ち抜くことが出来るほど、聖杯戦争は甘くない。

だがそれでも、物事には必ずイレギュラーというものが存在する。偶然選ばれてしまったマスターが、偶然サーヴァントを召喚してしまい、聖杯戦争に巻き込まれてしまう。それは、決してあり得ないことではない。
また、せっかく触媒を手に入れたのに、召喚されたサーヴァントが狙った英霊とは違う英霊だった、ということも、決してあり得ないことではない。
ほんのちょっとの手違いから、予想外のモノをサーヴァントとして召喚してしまった、ということも、決してあり得ないことではない。

「同調（トレース）、開始（オン）」

少年が、いつもの呪文を唱えた。
それは、ボロボロになった体に、霊脈からの魔力がいきわたっているかを確認するための作業。
深い意味は無い。少年にとっては、この場所で治療なり魔術の特訓をするために、いつものように魔術を行使した。それだけだった。
ただ、少しだけ現状を顧みるなら。

少年の陣取っている部屋は、魔術師の工房でもあって。
霊脈の恩恵を受ける、理想的な場所であって。
怪我のせいで扱い方が荒くて。
そして何より、今は聖杯戦争中であって。

バチッ

魔力が渦巻き、爆ぜる。
同時に、足元の魔方陣が光り輝き、目も開けていられないような強風が渦巻く。

「なっ・・・」

少年は、自分の体から、もうだいぶ少なくなっている魔力が、さらにしぼりとられていくのを感じた。

「なん、で」

傷つき、気絶一歩手前まで酷使された体。急激な魔力の吸引に耐えられるはずもなく、疑問を疑問として認識するより早く、少年の意識は薄れていく。
しかし、魔力の本流は止まらない。魔力が、風が、雷光が渦巻く。
そして・・・

「問おう、貴方が私のマスターか」

絶望のごとき闇に染まった、黒色の騎士が現れた。

第四話　空きと召喚（後書き）

四話目です。士郎君、ようやくサーヴァントを召喚するの巻。

組み合わせをどうするか考えましたが、とりあえずは原作に沿った形で進めることに。読んでいただければ分かる通り、青ではありませんが。

最初はアサシンやギルガメッシュと組ませようと思っていたのですが、それだとややこしくなるかな、と。自分が。

ではでは。また次話で。

第五話　見習い神父と黒い騎士

「・・・・・・・・・・これは？」

黒ずんだ物体。飛び出る突起物。

「・・・・・・・・・・卵焼きです」

・・・・・・・は？

「お、お腹が空きまして・・・・・・」

「・・・・・・お腹が空いてダークマターを作るのか、お前は」

「い、いえ、本当ならこんなはずではなくてですね」

あたふたと言い訳を始めるダメット。戦闘時のクールビューティーはどこへ。貴女の残念さに涙が出そうです、僕。

「あらあら。だから兄さまに任せればいいものを」

「む、貴女は黙っていてください、カレン」

うん。たのむから黙っててくれ、カレン。お前が絡むと余計に大変になる。

「ふふ、さすがは人間凶器。貴女自身だけではなく、作ったモノすら凶器に変えてしまうのね」

「ほう、安い挑発ですね」

そう言いながら、手袋をはめ直すな。戦闘モードに移行するな。ルーンを起動させるな。

「くすくす。結局最後は暴力に訴えるのね、クラッシャー」
「口が過ぎますよ、どSシスター」

ふふふふふふ。
ヤバイです。あの二人の周りが歪んで見えます。特殊な磁場が発生しております。
・・・・・・・・てか、あの、カレンさん？何故に僕の足にマグダラの聖骸布が巻きついているのでしょうか？
「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）――――フィッシュ」
「ぬおっ！？」

あっという間に全身を覆われ、二人の間に割り込まされる。
・・・・・・・・・あれ、この絵面って・・・・・・・

「頑張って耐えてくださいね、兄さま」
「いやいやいや、待て待て待て！」

盾にする気か、てめぇ！

「ほう、見上げた兄妹愛ですね。・・・・・・ならば、打ち砕くのみ」

ちょっ、ま・・・・・・・

「覚悟はいいですね、歯を食いしばりなさい。痛いのは一瞬だけでしょうから」

あの、あの・・・・・・

「死ねぇ！！！」

■

「・・・・・・・・・うわぁ・・・・・・・」

変な夢を見た。ものすごい変な夢。てか悪夢。
あの二人。会ったことは無いはずだけど、多分会わせちゃだめだ。
相性は良くない気がする。決して今見た夢のせいとかではなくて。
目だけ動かして確認するが、どうやら俺は地下の工房にいるらしい。
しかも倒れ伏す形で。鍛錬が終わった後、そのまま眠ってしまったようだ。

「ぐっ・・・」

起き上がろうとするが、体が異常に痛む。特に右半身が痛い。
寝違えたのか？いや、それくらいでここまで酷いことにはならないはず。
まぁでもこの程度なら、日常の行動に支障が出るほどじゃない。戦闘は無理だが、坊主や幼馴染をからかう余力くらいはある。
それだけあれば十分。そう思い、起き上がろうとして、

「あ、ぐっ・・・」

体が引き裂かれるかと思った。
それと同時に、断片的な映像が頭に流れ込んできた。
港。白い幼女。鉛色の巨人。アインツベルン。バーサーカー。衝撃。
千切れかけた右腕。強化。逃走。満身創痍。魔方陣。治癒。魔力の
暴走。そして・・・

「目が覚めたか」

部屋の隅から、綺麗な、それでいて無機質な声が聞こえた。

「・・・・・お前は?」

声の方へ眼を向ける。
そこには、この暗い部屋の中でも視認できるほど、黒い甲冑に身を
つつんだ騎士がいた。

「問おう」

騎士が、目の前に立つ。

「貴方が私のマスターか」

マスター。
その言葉を認識するやいなや、左手に痛みが走る。

「ぐっ・・・・・・なるほど・・・・・・参加しろと」

聖杯は、どうあっても俺をこの争いに参加させたいらしい。
たったあれだけの魔術行使でサーヴァントが召喚されたのがその証拠か。

「ああ、どうやらそうらしい。よろしく頼む」

こうなったら仕方がないだろう。参加するほかあるまい。
そう思い立ち上がろうとして、

「・・・っ」

身が、竦んだ。

「・・・・・・・・・」

殺気だ。それは分かる。
発しているのは目の前のサーヴァント。バイザーごしに射られる。

「・・・・・・・・・」

緩めることなく発し続けられる。
喉元に剣を突きたてられているような。そんな幻想すらしてしまうほど。
間違いない。こいつは、俺を殺す気で発していやがる。

「・・・・・・・・・」

サーヴァントは、依り代がなければ現界することはできない。
もちろん、その依り代というのはマスターのこと。ゆえに、マスターの死は、サーヴァントの死にも繋がる。

この程度のことはサーヴァントにも知識として与えられているはずだ。

「・・・・・・・・・・」

酷使した体が悲鳴を上げるが、押さえこんで無理矢理に立ちあがらせる。

目の前にいるのは英霊。どうあがこうと勝てる存在ではない。

敵意をぶつけられるいわれは無いが、どこぞの傲岸不遜王のように、人のもとにつくのをよしとしない輩もいる。目の前のサーヴァントも同じものか。それとも品定めか。

だが、ここで弱みを見せてはいけない。頭のどこかが警告を発する。

「・・・・・・・・・・」

耐えること数秒。

そして、

「・・・・・・・・・・ふん」

嘘のように、殺気が霧散した。

「・・・・・・・・・・どういうつもりだ」

「この程度の気当たりにすら耐えられないのをマスターとして認めるとでも？」

「なるほど。・・・・で？」

「ふむ。まぁ、及第点か」

「言ってくれる」

ニヤリと。底意地の悪い笑顔を見せるサーヴァント。

ずいぶんと厄介なのを引いてしまったらしい。

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある」

騎士の誓いを彷彿させるような、厳粛な詞。

って・・・

「俺が、セイバーか・・・」

ふと、昨日幼馴染が宣言していたことを思い出す。

『みてなさい、絶対にセイバーを召喚してやるんだから！』

返せ。ちょっぴり感じたあの感動を。

「ふむ。マスターは私がサーヴァントであることが不快なのか」

ちょっぴりどころか、おもいっきり不機嫌さを露わにするセイバー。濃密な魔力を放出させ、完全装備で剣まで抜いている。

「まぁよい。全て切り伏せ、打ち砕くのみだ。その考え、しかと後悔するがいい」

「・・・・・・はっ、せいぜい後悔させてみろ」

「ほう、言うか」

フッ、と。皮肉気にセイバーは笑う。妙にその仕草が似合う。

「ついてこい。色々と確認したいことがある」

とりあえずは現状把握だろう。
今日は学校、サボりだな。

■

「・・・・・・ずいぶんと有象無象がはこびるようになったのだな。統治体制の程度が知れる」
「自由とは自立だ。責任の所存のなすりつけ合いなど赤子のすることだ」
「犠牲をなくして進むことができるか。平等など、世迷い言にすらならん」
「在るモノを当たり前のモノとするか。救いようのない有象無象どもだな」

テレビ番組を見ながら、文句タラタラなセイバー。どうもこの国の政治体制に大いに不満があるよう。

「ふむ。かくなる上はエクスカリバーで・・・・・」
「やめれ」

ズビシッ。軽くチョップ。
何を物騒なことを口にするか、この阿呆は。

「む・・・・・・誰に手を挙げたと思っているか、シロウ」
「お前の発言に対してだ」
そんな簡単に宝具を乱発されてたまるか。
「ふん、冗談に決まっているだろう。我が剣は有象無象に気安く見せるものではない」
だといいがな。こっちには天上天下唯我独尊を地で行く、傍迷惑な前例がいるんだよ。
「・・・・・・まぁいい。ほら」
「これは？」
「魔力殺しのアミュレットだ。応急処置程度に隠すことはできる」
セイバーは霊体化ができない。原因は分からないが、まぁ、出来ないものは仕方がない。
そんなわけで、セイバーには現代の服を着てもらっている。ゴシック調の、全面黒一色のワンピースだ。流石に甲冑姿は拙い。
「ほう、なかなか洒落た物ではないか」
洒落たとはいっても、十字架をあしらってあるだけだ。教会だし。見習いとはいえ神父だし。
「ああ、一介の魔術師程度なら簡単に欺けるな。流石にサーヴァントはそういかないだろうが」
先ほどまであふれていた魔力が感知できなくなる。高かっただけあ

って、効能は抜群か。

「ふむ、悪くない」

気に入ったのか、飾りの十字架をもてあそぶ。
その姿は、年相応の少女にしか見えない。
間違っても、かの有名なアーサー王とは見えない。

『我が名はアルトリア・ペンドラゴン。俗に言う、アーサー王とは私のことだ』

一瞬、頭の可哀想な英霊なのですね、なんて思ってしまったのは秘密だ。
いや、だって、一見するとあきらかに自分より年下の少女を、かのアーサー王として見ることが難しいだろ。

ぷるるるるる、ぷるるるるる・・・・・・

む、電話か。
ディスプレイに表示されているのは・・・・・・遠坂家？

「どうし「サーヴァント、喚び出したわ。じゃ」あ、ちょっ・・・・・・ちっ、切りやがった」

なんだ、あいつ。ずいぶんと余裕がないようだったが・・・・・・

「どうした、シロウ」
「・・・・・・いや、ちょっとな」

いつものあいつらしくない、余裕のない言動。

考えられるのは、いつものうっかり発動か。喚び出すことには成功したようだが、何かしらの不都合が生じたと考えるのが妥当。電話越しでは判断材料が乏しいが、何か引っかかる。端的にいえば心配だ。

「ふむ」

時刻は夕刻。季節がら日が落ちるのは早いが、急げば遅くなることもあるまい。この時間帯なら、まだバスも出ている。ついでに夕食も買ってくるか。

「ちょっと出かけてくる。何か食べたいものはあるか」
「ふむ、食べたいものか・・・・・・では、この『はんばーがー』とやらを所望する」

そう言って、テレビを指さす。
そこには、某有名ファストフード店のコマーシャルが放映されていた。

「分かった。じゃあ留守番頼む。
誰が来ても対応しなくていいからな」

コートを羽織って外へ。
さて、腐れ馴染みの安否を確認しに行きますか。

第五話　見習い神父と黒い騎士（後書き）

五話目です。現状把握と説明だけで終わってしまいました・・・・・・

カレンとバゼットが登場。夢の中ですが。
もちろん、ちゃんと二人とも本編に出します。

次話も、内容的にはほとんど進まない予定です。
二十話くらいで終わるかな、なんて思っていましたが、このペースだと絶対に収まりきらない。楽観視しすぎだ・・・・・・

のろのろと続きますが、最後まで付き合っていただけたら幸いです。
では。また次話で。

誤字修正しました。

第六話　見舞いと出迎え

「どうし「サーヴァント、喚び出したわ。じゃ」あ、ちょっ」

まだ何か言っていたのは聞こえていたけど、構わずに切る。取り決めに乗っ取り、報告はした。もうそれでいいでしょ。

「アーチャー。気分悪い。寝る。じゃ」

必要なことだけ伝えて、再び寝室へ。何かふらふらする。視界が揺れる。

「ふむ、少々無理がたたったようだな。しっかりと療養するがいい。後で消化にいいものを作ってこよう」

言うが早いが、抱きかかえられる。

ああ、何だろ。妙にそれが心地いい。

「・・・・・・ごめん。迷惑掛けて」

「ク、何を言うか。余計なことは考えず、回復に努めたまえ」

いつもの皮肉気な口調も、妙に優しく聞こえる。体調が悪くなるって不思議だ。

というか、こうやって目に見えて調子が悪くなるって何年振りだろう。小学生の頃に風邪をひいたのが最後じゃないかしら。

『凛ちゃん。見舞いにきた。これ』

そうそう、あの頃の士郎は私のことを「ちゃん」付けしてたっけ。

懐かしい。今ではもう呼び捨てだが。
ふと想像してみる。今になっても大真面目に「凛ちゃん」なんて呼んでくる腐れ馴染みのことを。

「いや、無いわ・・・・・・」

うん、無い。
てか何だろ。正直きもい。大真面目って辺りがどうしようもない。
ＩＦも何もない。この年にもなってそんな呼び方を許す私は、どの並行世界にもいないだろう。

「・・・・・・大丈夫かね。先ほどから顔色が七変化しているが」
「へ？」
「自覚がないとは・・・・・・・・・ええい、待っていろ、マスター！一晩で快復させてみせよう！」

なにやら熱くなっているアーチャー。
召喚時から思っていたのだが、こんなにも家事に精通している面倒見のいいサーヴァントってなんなのだろうか。いや、頼りにならないわけではないけど。

「・・・・・・アーチャーってより、バトラーよね。あれ」

去った後姿を思い返しながらつぶやく。
我ながら言い得て妙なり。

■

坂の上のお屋敷には魔女が住んでいる。

そんな噂が流布されるに相応しいほど、坂の上のお屋敷――――遠坂邸は、不気味な空気に包まれている。
時刻が時刻なだけに、薄気味悪さは倍増か。下手なお化け屋敷なんかより雰囲気はある。

「もっと開けっぴろげにしろ・・・・・・とは言わないがな。別に」

目の前にそびえる洋館からは、威圧感と拒絶感しか感じない。
魔術師として正しくはあるが・・・・・・まぁ、愚痴をこぼしたところで何も変わらないか。

「さて、我が腐れ馴染みは無事ですかなっと」

呼び鈴を押す。どの家でも耳にするような、おなじみの音が響く。

「・・・・・・・・・」

が、誰も出ない。
もう一度押す。

「・・・・・・・・・」

やはり出ない。

「・・・・・・・・・」

ドアノブを回す。が、当然扉は開かない。

「・・・・・・しっかたねーな・・・」

結界の解除呪文を唱える。扉を開けて中へ。

プライバシー？俺とあいつの仲にそんな言葉は存在しない。

「おーい！凛！無事かー！生きてるかー！」

■

「おーい！凛！無事かー！生きてるかー！」

アーチャーに言われた通り大人しく寝ていたら、聞き覚えのある声が聞こえた。

「・・・・・・はぁ？」

ウソ、なんであいつがここに？
そう思い耳をすますが、あいつの声なんか聞こえない。時計の秒針だけがチクタクと音を鳴らす。
幻聴？マジで？そこまで私の体調は悪いの？
てか、いくら幻聴でもあいつの声は無いでしょ。

「うおっ、何だテメェ！」

・・・・・・今度はちゃんと聞こえた。気のせいか？気のせいなのか？
いや、現実逃避は止めよう。私が聞き間違えるはずがない。あれは幻聴のはずがない。
紛れもなく、あの腐れ馴染みの声だ。

「・・・・・・何しに来たのよ、あいつ」

見舞い？いや、体調のことは言ってない。でもあいつ、変なところで鋭いし。もしかして電話で気づかれた？いやいや、まさかまさか・・・・・・
てか、あれ？刃物がぶつかりあう音が聞こえるのは何故？あいつ、一人で何やってんの？もしかして遠坂家特製トラップに引っかかったとか？だとしたらグレードを上げた甲斐がある。あいつの慌てふためく顔が見たくてやったようなものだし。

「て、それじゃあ寝てられないじゃない！」

せっかくあのバカが慌てふためく姿を見れるのだ。体調が悪いからと言って、こんなところで寝ていてはもったいない。

「！　おっとっと・・・・・・」

バランスを崩し倒れそうになる。当然のことながら、まだ回復にはほど遠いよう。
だがそれがどうした。私にはやらなければならないことがある。体調の悪さにかこつけて休んでいていいわけがない。
一応カーディガンを羽織って、急いで廊下へ。音の出どころはリビングから・・・・・・・・リビング？

「・・・・・・なんでさ」

思わず、あの腐れ馴染みの口癖が出てしまった。
だって扉を開けたら、何故か赤いのと黒いのが戦っていたんだから。

■

手に持った黒鍵で、目の前の赤い男の攻撃をいなす。まともに受けては昨日の傷に響く。が、避けることはできない
一閃、二閃。赤いのの剣が寸分の違いもなく同じところを打つ。それだけで黒鍵は砕けた。

「ちっ！」

後ろに跳びながら、二本投げる。狙いは眉間と胴体。命中だけを重視しての投擲。
だがどちらも避けられ、あまつさえ距離を詰められてしまう。

「っくしょうが！」

振るわれた剣を、黒鍵で防ぐ。が、まともに受けてしまった。負傷中の体が衝撃に耐えられるはずがなく、勢いを殺すことができずに体勢を崩してしまう。

「っが！」

そんな俺の無防備な脇腹に蹴りが入る。勢いに従って飛ばされたさきには、折れた黒鍵が切っ先をこちらに向けていた。

「っ！」

体を捻り、軌道修正。刀身に手刀を当てて、切っ先をそらす。

「ふむ。身のこなしは中々。が、安心する前に右に避けたまえ」

慌てて視線を向けると、何かを投擲してきた。
視認する前に、体が言われたとおりに右に避ける。

「王手（チェックメイト）だ」

が、その先にはすでに赤いのがいた。手に持つ剣は俺の首筋に当てられている。

「無駄な抵抗は止めることだな。大人しく斃れ「何をやっているか

あんたらはあああああああああああああ！！！」な！」

突然の咆哮。同時に、ところかまわず黒い弾丸が発射される。

いつもならともかく、体勢を崩した俺がそれを避けられるはずがなく。

赤いのが全力で離脱したために、そのほとんどが俺に向かって飛んできた。

・・・・・・なんでさ？

■

「で、何か弁明はあるかしら？」

腕を組んで仁王立ち。にっこりと笑みを浮かべるあかいあくま。額に青筋が立っているのは気のせいか。魔術刻印が光っているのも気のせいか。

「なに、この侵入者のおもてなしをしただけだ」

にっこりと。凛に負けないくらい清々しい笑みを浮かべて返答する赤いの。

「俺はこの不審者におもてなしを受けただけだ」

にっこりと。赤いのや凛にも負けないくらい清々しい笑みを俺も浮かべているだろう。

「ふーん、そう・・・・・・・・って、納得できるかあああああああああ！！！」

一番最初に表情を崩したのは、やっぱりというかなんというか凛だった。

「おもてなしで何で壁に穴が空くのよ！何で剣が刺さるのよ！何で血が飛び散るのよ！」

おいおい、『常に優雅たれ』の家訓はどうした。今は亡き親父さんが泣くぞ。少しは落ち着け、冷静になれ。あと、穴が空いているのはお前のせいだ。

「仕方なかろう。マスターを守るのはサーヴァントの役目。確証が得られるまで、侵入者の存在など容認できん」

「言っていることは間違っちゃいないな。争いで解決しようなど、愚かなことこの上ないが」

「ふん。素姓も得体もしれぬ輩が我が物顔で闊歩することを許せるか」

「客だと伝えたのだがな。・・・・・・ああそうそう、凛、土産なら無事だぞ。快復した時にでも食べてくれ」

「え、あ、ありがとう・・・・・・じゃなくて！」

慌てたように声を張り上げる。うがー。

「一から！最初から！全部！説明しなさい！！！」

説明って・・・・・・

「見舞いに来た」
「おかゆを作っていた」
「結界を解呪して入った」
「何物かが侵入した」
「不審者がいた」
「侵入者がいた」
「挨拶した」
「とりあえず切りつけてみた」
「応戦した」
「はいはいはいはいストップストップストーーーップ！！！」

ぜぇぜぇ。肩で息する腐れ馴染み。

「何でそこで切りつけるのよ！馬鹿なの？ねぇ、馬鹿なの？記憶が無い上に馬鹿なの！？人斬りなの！？何で『とりあえず』で人を斬ろうとするの！？」

がっくんがっくん。赤いのの首が揺れる。すげぇな、今の一息で言い切ったぞ。

「・・・・・・て、記憶が無いってどういうことだ？」

その言葉に、凛の動きが止まる。

それを見て、赤いのがいやらしい笑みを浮かべ、
「何、簡単なことだ。召喚の際に問題があったようでな。遥か上空ごふっ！」
凛の宝石ボディーブローが突き刺さった。
世界を狙えるぞ、今の一撃。
「召喚時にちょっとした手違いが起きて、記憶が混乱しているのよ」
にっこり。今までにないくらい清々しい笑みを浮かべる遠坂様。
これ以上訊くなと。無言の圧力。
「・・・・・・・・・Ａｍｅｎ」
なら祈ろう。せめて祈ろう。
目の前で悶絶している彼に。これからの彼の道に神の御加護がありますように。
「ちょっと、人のサーヴァントに何しているのよ」
「祈っているのだ。せめてもの救いと神の御加護がありますようにとな」
見るからに幸薄そうだし。
「神の愛は無限だ。たとえ何者であろうと、神の愛が届かぬ云われはない」
「・・・・・・流石ね。さっきまで殺し合いをしていた相手のために祈るなんて、普通は出来るものじゃないわ」
「迷える子羊を導くのが俺の役目だ。神の前に、敵や味方などとい

う概念は不要だ」

まぁ、あくまには分からないのかもしれないが。

「あんたねぇ・・・・・・・・はぁ・・・・・・」

「お疲れのようだな。早く寝たほうがいい」

「分かってるわよ、そんなこと」

口調に覇気は無く、顔色も悪い。

赤いのの折檻に全力を費やしたためか。この分だと、明日の学校は休みだな。

「じゃ、遅くならないうちに帰る」

「ええ、せいぜい夜道に気をつけなさい」

「あいよ」

ひらひらと掌をふり、背を向ける。

と、言い忘れたことがあった。

「凛」

「・・・・・・何よ」

端正な顔立ちをひどく歪めたミス穂群原。子どもが見たら確実に泣く。赤ん坊はひきつけをおこすだろう。

・・・・・・こんな調子で大丈夫なのか？

「・・・・・・・・勝てよ」

パチクリ。不機嫌そうな顔から一転、驚いた顔へ。

が、すぐに不敵な笑みへと変わる。

「あらあら。言峰君は私が負けるとでも？」

先ほどまでの、幽鬼のような佇まいはどこへ。

軽く髪をかきあげ、腕を組んで仁王立ち。いつもと変わらぬ様子で俺を指さす。

「あんたの目の前にいるのは遠坂家六代目にて現当主、遠坂凛よ。くだらない心配なんかしていないで、あんたは祝杯の準備をしていればいいのよ」

ためらいもなく言い切る。まるでそれが当たり前のように。

ただそれが、

「・・・・・・凛。ねこ柄のパジャマでは決まるものも決まらないぞ」

「っ！」

みるみる赤くなる腐れ馴染み。経験から見定めて、猶予はあと幾ばくか。

「じゃ、あとはまかせたぞ。赤いの」

軽く手をあげ、急いで離脱。直後、背後から爆発音がしたが、巻き込まれる前に家の外へ。大丈夫。あの赤いのがなんとかしてくれるさ。はっはっは。

「うがーーーー！！！」

おまけ

「ただいまー・・・・・・って、ど、どうしたセイバー！？」
「・・・・・・ふむ。とりあえずは、『おかえり』とだけ言っておこうか」
「あ、え、ええと・・・・・・」
「まずは、そこに直れ」
「あー・・・・・・とりあえず剣を下ろしてくれないか？」
「・・・・・・・・・それは、これからのシロウの返答しだいだ」

帰りが遅くて怒られる、コトシロさんの図。
折檻は夜遅くまで続いたとか。

第六話　見舞いと出迎え（後書き）

六話目です。

ぶっちゃけるまでもなく、コトシロとアーチャーを会わせたくて書いた話です。その割には、途中からずれてしまったような気も・・・・・・おかしいなぁ、シリアスのつもりだったんだが・・・・・・

もうすぐ春休みが終わるので、更新は遅くなると思います。

ではでは。また次話で。

４／１９　誤字修正、一部改定しました。

第七話　日常と浸食

「ふ、楽しみを控えて朽ち果てるか。衰えたな・・・・・・私も」
「よく言う。医者の見立てよりも一年以上は生きている化け物が」
「聖杯が機能している。あと一年、生き永らえればよかったのだが・・・・・・」
「・・・・・・・・・ずいぶんとまぁ聖杯戦争にご執心なようで」
「アレはな、私の全てだ」
「・・・・・・・・・」
「私の追い求めた『答え』がある」
「・・・・・・・・・」
「九年前、その一端を見られたのだがな・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・アンリ・マユか」
「・・・知っていたか」
「ああ、いくらか調べた」
「ほう・・・・・・手が早いな」
「アンタが死んだら自動的に俺が監督役だろうしな。・・・・・・・・・それに、個人的に興味がある」
「く、はははははははははは！『興味』！お前がか！」
「・・・・・・・・・」
「はははははは、いいぞ、士郎！まさかお前の口からそんな言葉が聞けるとはな！」
「・・・・・・・・・何が可笑しい」

聖杯戦争が始まる一年前。
冬木市のとある病院の一室。
神父とその息子は、最後の家族の時間を過ごす。

会話の内容とは反比例し、二人の雰囲気は団欒そのもの。
たとえ血の繋がりがなくとも、二人は確かに家族であった。

「娘のことは頼んだぞ、士郎。つまらぬ死に方だけはさせてくれるな」
「いいからさっさと死ね」

■

「・・・・・・・・・・ちっ」

外見的には何の変哲もないのに、一歩踏み出せばそこは異界。
濃密なたちの悪い魔力にからめられ、中にいる人間は皆人形のように見える。

「・・・・・・分かってやっているのか、それとも馬鹿か」

甘ったるい匂いに連れられて基点を確認。解析してみるに、そこいらの魔術師では対処のしようがない高度なもの。
おそらくはサーヴァント。人間風情がどうこうできるレベルじゃな

い。

「最悪ね」

振り向くと凛が仁王立ち。
不機嫌さを隠そうともせず、苦虫を噛み潰したかのように基点を見る。

「仕掛けられたばかりだな」
「・・・・・・そう」

ぼそぼそと、何かしらつぶやく。
霊体化しているだろうあの赤いのに相談しているのか。表情が改善されてないところをみるに、返ってきた答えは芳しくないようだが。

「・・・・・・とりあえず魔力を流すわ。何もしないよりはマシよ」

魔術刻印が光り、基点に魔力が流されていく。
期限は、ひき伸ばせてあと一週間ってとこか。
纏わりつく不快感が少しは薄れた気がした。

「・・・・・・ずいぶんとナメらたものね」
「こうも目に見えてケンカを売っているようじゃな」
「心当たりは？」
「いんや。残念ながら、ない」

発動すれば、中にいる生物を溶解し吸収する結界。

平和の象徴であった学園は、いつの間にかに悪趣味な時限爆弾をつけられていた。

■

吐いた煙が空中に霧散する。
別に愛煙家のつもりはないが、気を落ち着けたいときはよく吸っている。
もちろん市販品ではなく、ちょっとした魔具みたいなもの。たびたびお世話になっています。

「ふぁ・・・・・・」

状況は悪い。
一応、あの後凛と見て回りいくつか応急処置はした。
だが凛の不調も相まって、しょせんはわずかな時間稼ぎ程度にしかならない。
発動すれば、阿鼻叫喚な地獄絵図を描かれることになる。
変わらないはずの日常は、すでに非日常へ変貌していた。

「・・・・・・く」

だというのに、後始末が大変そうだと考えてしまうのは如何なるものか。

集団昏睡、多発する通り魔、増える行方不明者。

露呈することを考えてない馬鹿どものせいで、監督役の仕事は日増しに増えていく。

ある程度は下請けが指示通りに済ましてくれるが、大きなものとなると俺が動かないといけない。セイバーの折檻で、今日は疲労困憊で倒れそうなんだ。学校でくらいゆっくりさせてほしかった。

「・・・・・私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない」

言葉を紡ぐ。

「打ち砕かれよ。敗れたもの、老いた者を私が招く。私にゆだね、私に学び、私に従え。

休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、我を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる。

装うことなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光りあるものには闇を、生あるものには暗い死を」

洗礼詠唱。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は死の中でこそ与えられる。

———許しはここに。受肉した私が誓う」

面倒事を起こそうとする大バカ者に。

「――――この魂に憐れみを」

なんの変哲もない、ただ紡いだだけの言霊。
それでも、体にたまったモノを吐きだせたみたいで少しはすっきりした。
罰あたりなどと言う言葉は聞こえない。

「・・・・・・とりあえず、慎二なりクソ坊主なりをからかうかな」

それはなんだか素晴らしいアイディアに思えた。

「馬鹿言うな。僕を巻き込むな」

速攻で却下された。
声の方を向くと、いやに機嫌のよさそうな顔があった。

「・・・・・・なんだ、慎二か。どうした」

その心底うれしそうな顔に嫌気が差し、いくぶんか棘のある声になってしまう。
だが慎二はそんなことを気にするそぶりもみせずに、上機嫌のまま俺の隣に座った。

「どうした、は言峰の方だろ？学校に来ているのに授業に出ないなんてさ」

学生の本分だろ、なんて言ってくる。ニヤニヤと笑いながら。

「よこせよ」

黙って一本、市販品の方を渡してやる。ついでにマッチ箱も。ライターよりもマッチの方が俺は好きだ。

「・・・・・・・・・」

そのまま、何も言わずに煙草をふかす。
いい天気だ、結界さえなければ。纏わりつく不快感が全てを台無しにする。
晴れた青空も。降り注ぐ陽光も。吹く風も。
その全てが死んでいる。

溶解

結界内に入ったモノは、抵抗を許されずに溶かされていく。
まるで食虫植物の中だ。

「・・・・・・慎二」

煙が、のぼる。
灰が、落ちる。

「あまり、面倒事を起こすなよ」

その言葉に、ますます慎二は嬉しそうに顔を歪める。
それで十分だった。

「じゃあな」

話すことは無い。

携帯灰皿に吸殻を入れ、立ち上がる。今日はもう帰ろう。

「・・・・・・はっ、頑張れよ。監督役殿」

去り際。楽しくて仕方ないとでも言いたげな言葉。

その言葉に返すことなく、俺は扉を閉めた。

第七話　日常と浸食（後書き）

七話目です。

本来なら一成や美綴や藤ねぇなどのキャラクターを出す予定でしたが、収拾つかなくなってきたので削除。むやみやたらに増やしても混乱するだけでした。自分が。

ちなみに、彼らの前はバゼットさんが登場する予定だったり。

ではでは。また次話で。

４／２２　誤字脱字修正しました。

第八話　憤慨と優雅（前書き）

改訂する部分が多かったため、八話目は全部書きなおすことにしました。
八話目・改訂版です。

第八話　憤慨と優雅

遠坂凛は憤慨していた。
もちろん表には出さない。どんなときでも猫をかぶる。常に優雅たれ、遠坂凛。
だが、内心はそうはいかない。今にも叫びだしたくなるのを、仕掛け人の制裁方法を事細かに想像することで、なんとか抑えている。
すでに想像内で実行した数は三ケタに。お相手はもちろん、法衣姿の腐れ馴染み。あと、時々生臭坊主。
しかし、それも限界。勝手されたことに対しての怒りは収まらず、むしろ時間が経つにつれて加速度的に増加していく。想像する相手が相手だからではない。多分。おそらく。

（・・・・・・・・・殴っ血ＫＩＬＬ）

まだ見ぬ不届き者に、思いつく限りの地獄を。
その身から噴き出る圧倒的なオーラに、クラスが圧迫されているなどとは、凛は露ほども気がつかない。すぐ前に座っている生徒など、そのオーラを背中一身に受けてしまい気絶している。
長らく続く世にも恐ろしい授業。武芸百般に秀でた姐御も、妙に冷静沈着な眼鏡美人も、野生のパワー全開の黒豹も、感じたことのない異様さに自我を保つので精いっぱい。
本能で彼女たちは感じていた。余計なことをしてはいけない、と。

「で、ではこれでお終いにします！号令はいりません！」

チャイムが鳴ると同時に、半ば金切り声で宣言、いや、懇願する女性教諭。
それを受けて、凛は外へ。洗練され、優雅な立ち振る舞い。が、目

にもとまらぬ速さ。美しく、何の邪気も見られない清々しい笑顔を張りつけてC組へ。目的は当然、あの口減らずな腐れ馴染み。

「・・・・・・・・・言峰君は？」

ぐるりと中を見渡し、目当ての人物がいないことに気がついた凛は、すぐ近くにいた生徒に声をかける。

声をかけられた生徒は、無意識に姿勢を正す。傍からみれば、美少女に声をかけられ緊張している男子生徒。が、真実は違う。本能が最大警報を鳴らす。下手な受け答えをしてはいけない、と。

「こ、言峰殿ならいいいないでござる！ききょ、今日は見てないのでござる！」

どもりながらも、なんとか最後まで言い切る男子生徒。くどいようだが、浮かれているからではない。断じて。

一瞬驚いた表情を見せる凛だったが、すぐに合点がいったのか、再び笑みを浮かべる。ただし、先ほどまでの猫かぶりの笑みではない。ひぃっ！クラスのどこかで小さな悲鳴が上がる。が、無視。いや、聞こえない、気づいていない。凛の頭の中は、ただ一つのことだけで占められていた。

（ふふふ・・・・・・・・・士郎、殴っ血ＫＩＬＬ）

今この時、冬木のどこかで悪寒に襲われている神父見習いがいたとか。

■

「アーチャー。士郎のところにかけて」
「凛、何度も言うようだが私は」
「か・け・て」

有無を言わさぬ迫力。弓兵の背中を冷たい何かが撫ぜる。
沈黙は金、雄弁は銀。何よりその身はサーヴァント、ご命令とあればなんなりと。
慣れた手つきで携帯電話を操作し、目当ての人物アドレスを確認する。

言峰、士郎

間違いは無い。そっと、凛に気づかれぬよう、心の中でため息をつく。

「ふむ。あとは出るのを待ちたまえ」

電話を渡して一歩下がる。受け取った凛は、恐る恐ると言った仕草で耳に当てる。機械に弱いのは相変わらずか。この分だと、一人で通話ができるようになるまでどれくらいかかることやら。

『あー、もしもし？』

コール音七回目にして、ようやく言峰士郎が出る。

すかさず、

「何をサボっとるかアンタはあああああああああ！！！」

赤いあくまが、吼えた。

「今！どこで！何をしているか！百文字以内で説明しなさい！！！」

よほど腹に据えかねていたのだろう。があーと吼えるその姿には、優雅さなど欠片も見られない。

『安心しろ、俺は生きているぞ』

「殺したって死なない奴が何を言っているのよ！」

が、そこは士郎。一癖二癖どころか三癖も四癖もする人外たちに育てられてきただけあって、凛が吼える程度ではまったく堪えない。最初の応対すら、吼えることを予想して耳から離している。

『おいおい、辺り構わず怒鳴り散らしているようだが、結界はちゃんと張っているのか？お前のうっかりは、基本悪い方向に転がっていくからな』

「張ったに決まっているでしょ！そこまで抜けていないわよ！」

張らなくとも来そうにないがな。声には出さずに赤い弓兵は笑う。

『うっかりのない凛なんて凛じゃない。・・・・・・お前、誰だ？』

「ねじ切るわよ、言峰君」

電話越しにも伝わる迫力。どのようにしてねじ切るのか興味はあるが、わざわざ実演されたいほど士郎はマゾヒズムに目覚めているわけではない。

『ま、冗談はさておき、だ。何の用だ？』

「あんたねぇ・・・・・・はぁ・・・」

まじめに相手をするだけ無駄か。暖簾に腕押し、糠に釘、馬の耳に念仏、士郎に説教。

『言っておくが、学校の結界については俺はノータッチだぞ』

「え！？」

『俺にゃ解呪は無理だ。少なくとも、教会の概念武装では太刀打ち不可だな』

士郎は小さくため息をついた。彼の記憶の限りでは、あれほどの術式を解呪する手だては冬木教会にはない。

『そういうわけで、俺に出来ることは何もない。裏で走りまわることくらいだな』

ある程度は凛も予想していたこと。教会の概念武装も、当たればラッキー程度にしか彼女は考えていない。

これで、作戦はふりだしか。

『とまぁ、ちょっと用事があるんで切るぞ。あとでまたかけ直す』

「え、ああ、うん」

電話越しの声が切れ、無機質な機械音が響く。

おそらくは切ったのだろう。機械に疎い凛とて、それくらいは分かる。

「・・・・・・アーチャー、行くわよ」

調べようと思えば、たとえ御三家の一つでも基本的なところは可能。ゆえに、彼女が通う学校に結界を仕掛けたのは、例え無知からの行動でも、これ以上とない宣戦布告。

冬木市のセカンドオーナーとして、また純粋に魔術師として。

無粋な部外者に相応の報いを。

■

「とまぁ、ちょっと用事があるんで切るぞ。あとでまたかけ直す」

電話を切って、軽く深呼吸。現実を直視したくなくて頭が痛む。今日の俺の運勢はきっと最低なんだろう、いつもの占いを見てから学校に行けばよかった。後になって悔いるから後悔。未来が分かったらと思う今日この頃。

「あー、今日はいい天気だなっと」

俺の心情なぞお構いなしに晴れ渡る青い空。冬木の冬は暖かいので、昼間は制服姿でも十分なのだ。

「さて」

うん、もう現実逃避は止めよう。これ以上は実に危険だ。意味がない。

「それで、こんな天気のいい日にどうしたのですか。アインツベルン殿」

第八話　憤慨と優雅（後書き）

八話目です。
見直してみたところ、話の辻褄があわないように感じたので全部削除して書き直しました。もう少し文才があれば・・・

再びバゼットさんがフェードアウト。一体、いつになったら出せるのか。いや、嫌いなわけではないですよ。むしろ好きなキャラクターなんですが・・・
ぐぅ、次話は無理だが、その次くらいには出せる・・・か？

バゼット好きの方々、申し訳ありません。でも近いうちに必ず出します！

ではでは、また次話で。

４／２７　誤字修正、一部改訂しました。

第九話　食事と約束

衣擦れの音がやけにうるさかった。
呼吸音がやけにうるさかった。
心臓の脈動がやけにうるさかった。

抑えようにも抑えられない。恐怖が体を覆って離れてくれない。
濃密な死の気配は辺りに充満し、逃げ場を与えてはくれない。風の音が、木々の擦れる音が、自分の耳が拾う全ての音が邪魔だ。
取捨選択。一番必要なものを選ばなければいけない。逃げのびるために。
あの死神から逃げのびるために。

「はっ、はっ」

全力全開でダッシュ。
幸いここは森の中。隠れる場所にはことかかない。
通りにさえ出ればこちらのもの。そのまま逃げ切れるはず。

「あれぇ？もう見つけちゃった」

声が、聞こえた。
振り返るまでもない。
俺は・・・・・・・

「あ・・・・・・はぁっ・・・・・・・」
「あらあら、口をぱくぱく動かすだけじゃ何も分からないよぉ？」
くすくすくす。如何にも楽しげに笑う死神。

「うあぁぁぁ・・・・・・」

ずるずる、ぺたり。踏ん張りが利かない。体が言うことを聞いてくれない。
情けない声が口から出る。手を、足を、いくら動かしても、まったく動かない。動いてくれない。

「・・・・・・なーんだ、つまんないの。もう終わりかぁ」

先ほどの楽しそうな顔から一変、能面のような無表情になる。
その双眸はもはや俺を映していない。俺の存在を除外している。

「もういいわ、さっさと終わらせて。・・・・・・ホント、つまらないわ」

一片の慈悲もない宣告。命を聞いた従者が、俺に向かって武器を振り上げる。

「は、はは、ははははっはっはっはあはっはっはっはあああ！！！」

「一撃でお願いね」

「■■■■■――――！！！」

ぐしゃっ！

■

「でねでね、結局何もしないまま終わっちゃったの。つまんなかった～」

「いやいや、食事時にする会話じゃないと思うぞ、アインツベルン」

リアルに想像しちまったじゃねーか、ばかやろー。

「あら、それもそうね。ごめんなさい、配慮が足りなかったわ」

そう言って、頭を下げるちびっ子。配慮以外にも色々と足りないモノがある気がするが、ここは突っ込まない方が吉か。

ちなみに、今俺たちがいるのは凛おすすめのちょっと値が張る喫茶店。結界を張っているので、会話の内容を聞かれる心配は無い。

「まぁいい。それよりもアインツベルン。聞きたいこととは？」

時間は有限。こうしている間にも、一刻一刻と刻まれていく。

「もう、せっかちね。人生に余裕がない証拠よ。会話を楽しめないなんて、紳士（ジェントルマン）として失格よ」

「そりゃ失礼」

そもそも、殺そうとしてきた相手と会話を楽しめるほど、精神が破綻しているわけじゃないんでね。・・・・・・親父ならできただろ

うが。

「まぁいいわ。早く帰らないとセラがうるさいし」

はむ。サンドイッチを一口。どう見ても、見た目小学生の子供の食べ方ではない。

一千年もの時を外界から閉ざして生きていたとはいえ、流石は名家・アインツベルンか。一つ一つが洗練された作法。貴族の名は伊達ではない。

「前回の聖杯戦争の勝利者について教えてほしいの」

前回の勝利者、というと・・・・・・

「衛宮切嗣のことか」

衛宮切嗣。前回の聖杯戦争で、親父と争い、勝利した相手。

確か、優秀な魔術師殺しで、前回はアインツベルンの・・・・・・

「なるほど」

なんとなく、事情は理解した。

「もしかしたら、教会に資料が残っているかもしれない。今日明日と調べておこう」

「！　いいの！？」

「ああ。情報を知ったとしても、アドバンテージとはなりそうにないからな」

「あ、あの・・・・・・ありがとう」

「礼を言うには早い。あくまでも調べてみるだけだ。十分な情報を

得られない可能性の方が高い。期待しない方がいいぞ」
「え、あ・・・うん・・・」
二日もあれば教会内の資料だけでなく、本部への問い合わせもできるだろう。大概の事はわかるはずだ。
「明々後日の・・・そうだな、この時間帯にこの店の前で待っていてくれ」
「うん・・・・・・ありがとう」
「何度も言うが、期待はするな。時間の無駄になる可能性の方が高い」
前回の勝利者。以後の足跡を辿るのは、正直厳しいものがある。
いや、あの親父なら、見て見ぬふりをしていた可能性も否定できないが・・・・・・

■

「今日はありがとうございます。実りのあるひと時を過ごせました」
スカートの端を持ち上げて、優雅に一礼。
止めてくれ、道行く人がこっちを見てくる。

「それでは、明々後日。またお会いしましょう。コトミネシロウ様」
「ああ、またな。アインツベルン殿」
「イリヤでいいわ」
「へ？」
「イリヤでいいわ。私も、シロウって呼ぶから」

・・・・・・何とおっしゃいましたか、このちびっ子は。

「じゃあね、シロウ！死んじゃダメだよ！」

大きく手を振って走り去るイリヤ。
その後ろ姿は、年相応の少女にしか見えない・・・・・・いや、去り際のセリフはどうかと思うが。

「衛宮切嗣、か」

道すがら、思考にふける。
前回の勝利者にして、冬木の大災害を引き起こした張本人。
なにぶん親父の言うことだから、虚偽が混じっている可能性がなくもないが、大方は合っているのだろう。何せ、俺に全てをぶちまけた時のあいつの顔は、これ以上もないほど愉悦に歪んでいたのだから。

「聖杯の、破壊・・・・・・」

もし、アインツベルンが衛宮切嗣を捜しているというなら、怨み十割というところだろう。何せ、前回はその妄執に届く間際だったのだから。必勝を願って外部の協力を取り付けて最後の最後で破壊されては、怨まずにはいられないだろう。

だが、それはアインツベルンという枠組みでの話。
では、イリヤフィールは？イリヤスフィール個人ではどうなる？
あの目は、少なくとも怨みとは違う気がした。
どこかで、どこかで俺はあの目を見た覚えがある。あんな目をしたヤツと、どこかで俺は会ったことがある。
どこで？誰と？

「・・・・・・分からねぇ」

まぁ、わざわざ思いだすことも、考える必要もないだろう。
アインツベルンがどうしようと、イリヤスフィールがどうしようと。
それは、そちらの問題だ。俺が負うことではない。

「・・・・・・ああ、そうだ。電話しないと」

凛の件を思い出す。もう手遅れな気はするが、かけ直さないわけにはいかないだろう。
携帯電話を開き、着信履歴の一番上をプッシュ。

『もしもし』

・・・・・・ん？

「あー、どちらさまで？」
『ふぅ、すぐに代わる』

電話越しに、あわわ、とか、のわー、と珍妙な声が聞こえる。

・・・・・・ああ、そういうことですか。

第九話　食事と約束（後書き）

九話目です。イリヤ、再登場。

プロットの段階ではカレンと言い争いをさせる予定だったのですが、どうにも上手く書けなかったので内容変更。士郎とイリヤだけの会話となりました。

カレンの毒舌でイリヤ半泣き・・・・・・みたいな構図が脳内で浮かんではいたのですが・・・・・・

なお、冒頭でバーサーカーに潰されたのはただのモブキャラ。原作にも、本当にちょっとだけ出ています。名無しですが。すぐに死んでいますが。

分かる人がいたらすごいです（笑）。

ではでは、また次話で。

第十話　切望と願望

言峰士郎が、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと食事をしていた頃。
ギルガメッシュは、まさしく人生の危機というものに直面していた。

こつこつこつ

不機嫌そうにテーブルを叩くセイバー。全身から、殺意混じりの黒いオーラがこれでもかと噴き出ているのは何の冗談か。
運悪くその場に居合わせてしまったギルガメッシュは、彼女の視線から逃れるようにしてソファーに寝転がっている。なるべく注意を向けられないように、遊んでいたゲームの電源はすでに切ったあと。
全身全霊をもって、己の存在を希薄化している最中だ。具体的には、現在気配遮断ランクD。生まれ持った存在感というやつが、このときばかりは憎い。

（何を、何をしているんですか士郎はっ！！！）

こんな状況になる原因なんて、士郎以外にはありえない。
おそらくは、またセイバーさんに黙って外出してしまったから。ほぼ徹夜で説教という名の折檻を受けたにも関わらず、再び無断で外出。セイバーさんでなくとも、士郎の身を案じているのなら誰でも怒る。本当に、本当に何をしているんですか、士郎！

そんなギルガメッシュの予想は、一部の狂いもなく当たっている。
セイバーは、殺さないように手加減はした上で、朝日が昇るまで折檻を続けた。しっかりと士郎の肉体に己の愚行を刻み込んだ、刻み込んだはずだった。

だが、蓋を開けてみればどうか。起きて居間に行けばすでに士郎はいない。テーブルには書き置き。

『学校に行ってくる。朝食、昼食は冷蔵庫の中に入っている物を適当につまんでくれ。棚にはカップラーメンもある』

ぐしゃりと。書き置きを握りつぶしたセイバー。その心中では、どす黒い物が渦巻いている。

（ふふふ・・・・・・流石だな、マスター）

帰ったら再び折檻だな。今度はどんな方法を試してみようか。ああ、別に腕の一本や二本が逝ってしまっても問題は無かろう。現状の正しい認識が最優先。動けなくなったところで私が守ればそれで済む話。そもそも、サーヴァントとマスターの関係とはそういうものだ。現状認識の欠けているマスターなど、厄介以外の何物でもない。脳内で、士郎の折檻と言う名の調教が展開される。あまりの苦悶に許しを乞う士郎。だが止めない、緩めない。腕を、足を、動くところを打ちすえる。ふふふ、まだまだこんなものではすましませんよ、士郎。自分の行った愚行をしかと理解しなさい、刻みつけなさい。貴方には何もかもが欠けています。その最たるものが現状認識ですよ。肩書はどうあれ、貴方はマスターなのです。参加者なのです。狩る者であり、狩られる者なのです。今日という今日は、徹底的に貴方を矯正させてあげましょう、ふふふふふふ・・・・・・

（うう・・・・・・早く、早く帰ってきてください士郎！）

部屋に充満する、形容しがたい威圧感。

その濃密さに、未来の英雄王の気配遮断のランクが上がったとかなんとか。

■

ところ変わって、遠坂邸。

「ほら、いいから服脱げ」
「くっ・・・・・す、少しは遠慮しなさいよ」
「いまさら何を」
「ぐぅ・・・・・天国のお父様とお母様、ごめんなさい。私の貞操は、こんな野蛮な男に奪われてしまいます」
「悪いが、俺の好みは包容力のある女性だ」
撃鉄を落とす。言峰の刻印を起動。淡く、俺の両腕が光る。
「へぇ、包容力のある女性？具体的には？」
「そうだな・・・・・・・・・うーん・・・・・・・・・・・・・・
・」
「長いわね」
「あー・・・・・・・・・そうそう、三枝さんみたいな」

凛の左腕。びっしりと刻まれている、遠坂の魔術刻印に触れる。

「三枝さん？あー、なんとなく分かるなー、それ」

「だろ。・・・・・・まぁ、なんとなく物足りなさがあるが」

「物足りなさ？」

心霊医術。魔力の滞り、刻印の反応、その他異常を探り、治す。

「ああ。なんて言ったらいいか分からんが、三枝さんだけだと足りない」

「それじゃあ・・・・・・綾子も加えてみるとか」

「・・・・・・やめてくれ、トンデモ物体が出来ちまう」

言峰の刻印が一つ消える。消耗品だから仕方がないか。まぁ、大事にするつもりは無い。

「じゃあ・・・・・・薪寺さんと合わせてみたら？」

「・・・・・・凛。自分で想像してみてくれ」

「・・・・・・ごめんなさい」

澱みを解消。歪はこれで全部か。

「氷室さんは」

「いや、だから・・・・・・いや？うーん・・・・・・おしい？」

「あれ？意外とイケる？」

「・・・・・・いや、相殺しあってプラマイゼロだな」

力を抜く。応じて、刻印の輝きもゆっくりと消えていく。

「・・・・・・っと、よし。これでどうだ？」

「ん？ん～、ありがとう。だいぶ楽になったわ」
「そりゃなにより」
刻印を使用した代償か、少し頭が痛む。
「じゃあ、シャワー浴びてくるわ。適当にくつろいでいなさい」
「あいよ」
ギチギチと、何か、嫌な音が鳴る。

■

「ええと・・・・・・あったあった」
棚から俺専用のマグカップを取り出し、牛乳を入れる。電子レンジなんて便利なものはこの家にないので、冷えたまま口にする。わざわざ自分の分を沸かすのは面倒だ。
「あー、疲れたー・・・・・・」
凛が苦しみだしたのは、ちょうど電話をかけ直したところだった。
原因は魔術刻印。周期的にキツイのが来るのだが、今回はそれが尋

常ではなかったらしい。電話越しにもその異常さが伝わるほど。実際、慌てて診に行った時のあいつの状態は、息も絶え絶えというところだった。
奔流する魔力を抑えつけ、凛の容態が落ち着くまでに約二時間。で、それから治療。
すでに窓の外は暗闇に覆われている。

「こりゃあ、今日もかな・・・・・・」

夜通し行われた折檻を思いだして気が滅入る。てか、折檻ですめばいいほうじゃないだろうか。最低で、腕の一本や二本が使えなくなりそうな気がする・・・・・・

「まぁ、今更なぁ・・・・・・」

正直もう手遅れだ。今更じたばたしたってしょうがない。ありのままを受け入れろ。神よ、私をお守りください。

がちゃ

ドアが開く音。もう出たのかと思い振り返ると、何故か赤いのがいた。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

お互い、無言。というか、何を話せばいいのか分からない。ここは多少無理してでも友好的にいくべきか？

「・・・・・・・・・礼を」

ん？

「甚だ不本意であり認めたくないことだが我がマスターが貴様に救われたのは変えようのない事実だ。・・・・・・・・ゆえに、礼を」

そう言って、言葉通りまったく納得していない表情で礼を言ってくる。

なんというか・・・・・・・・・珍妙だ。

「あー、気にしなくていいぞ。何事にも得手不得手はあるんだし」

「・・・・・・・・・そういう問題ではないのだがな・・・」

苦虫を噛み潰したような表情になる赤いの。よほど自分の手で助けられなかったことを悔いているのか。

「・・・・・・ところで、一つ質問があるのだが」

「ん？何だ？」

「貴様は・・・・・・本当に監督役、か？」

・・・・・・何を今更。

「最初に会ったときに自己紹介しただろうが。・・・・・・此度の聖杯戦争監督役を務めさせていただいております、言峰士郎です。どうぞ、よろしく」

昨日の見舞の際に、俺はしっかり自己紹介したつもりだが・・・

だがそれを聞いて、目に見えてがっくりと肩を落とす赤いの。目を右手で覆い隠し、頭上を仰ぎ見る。

・・・・・・なんでさ？

■

言峰士郎。
コトミネシロウ。
ことみねしろう。
ことみね、しろう

何の冗談だ、これは？
何の間違いだ、これは？
目の前にいるのは、たしかにアレだ。願いでもあるアレだ。
限りなくゼロに近い可能性を手繰り、ようやくオレの願いを叶えられる刻がやってきた。やってきたはずだったんだ。
だが、何なのだ？目の前にいるのは何なのだ？

「何故・・・・・・」

望む時代にやってきた。
望む役割を与えられた。
望む機会がついに来た。

だが、望む相手はいなかった。

いくら記憶が摩耗しようとも、自分のことを忘れたわけではない。
自分が辿ってきた道を忘れたわけではない。すり減り、消え去ろうとも、かつてのことは覚えている。

「どこで齟齬が・・・・・・」

いや、考えるまでもない。分岐点は、あの火災。
こいつを拾ったのは、コトミネという誰か。エミヤに拾われる前に、■■士郎は生を与えられた。それだけだ。

「ク・・・・・・」

なんたる悲劇。なんたる喜劇。なんたる道化。
裏切られ罵倒をされ、世界の奴隷となり、願いを形にすることはできず、望みすら目前で掻っ攫われてしまう。
よもや、ここまできて裏切られるとは・・・・・・

「あー・・・・・・大丈夫か。顔色が面白おかしく七変化しているぞ」

心底心配そうに尋ねてくる、エミヤではない誰か。
そう、エミヤではない。エミヤではないのだ。
とすると・・・・・・

「・・・・・・ひとつ、問いたい。貴様は、何を目指している？」
「目指している？」
「ああ」
「・・・・・・ずいぶんと変わったことを訊くんだな」

「なに、ちょっとした暇つぶしだ」

口に手をあて、悩み始めるコトミネ。

「・・・・・・そうだな、ひとまずは神の使い、ってところだな」

神の使い。
カミノツカイ。
かみのつかい。

ああ、決定的だ。

この世界に、エミヤシロウは存在しない。
この世界に、セイギノミカタは存在しない。
この世界に、カツテノジブンは存在しない。

「・・・・・・」

笑いだしたくなるのをこらえる。
落ち着け、数ある平行世界なんて無限にあるんだ。ともすれば、こんな士郎が存在するのも道理。
そう考えると、目の前にいるのはまったくの別人と思えてくるのだから不思議だ。

「ク・・・・・・」

望みは潰えた。
出来うることならオレの手で済ましたかったが、それは叶わない。
ならば、平行世界のどこか。別のオレに懸けるしかあるまい。

「・・・・・・本当に大丈夫か？」

ああ、大丈夫だとも。まったくもって大丈夫だとも。どうしようもないくらいに大丈夫だとも。

――――だってオレは、あの遠坂凛のサーヴァントなのだから。

第十話　切望と願望（後書き）

十話目です。

魔術刻印についてですが、これは完全に自分の中での曲解です。
ｗｉｋｉ等では、『拒絶反応が出る』と書いてはありましたが、移植が出来ないとは書いてありません。というわけで、血のつながりの無い他人でも移植可能と結論付けてしまいました。・・・・・・
ご都合主義です、はい。

ようやく十話目ですが、現時点で判明しているマスターとサーヴァントがわずか三組。内容的にもそれほど進んでいません。
予想以上にのろのろ長々となりそうですが、最後まで付き合っていただければ幸いです。

では、また次話で。

第十一話　厄日と厄介事

「いい、もう一度確認するわよ。私とアーチャーは校内見回り。士郎はその間、屋上で結界の基点をどうにかして」
「ずいぶんとアバウトだな、おい」
「現状の最も効率的な配役よ。第一、結界を張られた時点で私たちは後手に回っているわ」
「その私たちに、何故に俺が入っているかは突っ込まないほうがいいのか？治療後、赤いのに抱えられて連れて来られたことは突っ込まないほうがいいのか？」
「気にしたらダメよ。ありのままを受け入れなさい」
「・・・・・・あー、はいはい。了解です、マム」
「オーケー、じゃあ手筈通り頼むわよ」
「ちょっと待て。大事なことを忘れているぞ」
「大事なこと？何？」
「ふっ・・・・・・・作戦名だ」
「却下」
「ちょっ、待て！立派な理由があるんだぞ！」
「・・・・・・一応、訊いておきましょうか。理由とは？」
「作戦名の有る無しでは、大きく士気に関わる」
「却下」
「ちょっ、おい！この人でなし！赤いあくま！」
「子供みたいなこと言っているんじゃないわよ・・・・・・」
「作戦名は男のロマンだろぉがあああああ！！！なぁ、赤いの！お前もそう思うだろ？」
「・・・・・・私としては、そんな問答は無駄の一言に尽きるのだがな」
「そうね。心の贅肉よ、そんなの」
「・・・・・・なぁ、凛」

「なによ」
「そんな贅肉贅肉言っているから、つくべき所に肉がつかな・・・・・・・」
ドンドンドンドン！！！

■

「痛ってぇ・・・・・・」
ずきずき。痛む体を引きずりながら屋上へ。一発一発に弾丸並みの威力があるから、本来の効果だけでなく、肉体的なダメージも付属するのだ。手加減なしに連射しやがって。俺じゃなかったら死んでたぞ、まったく。
「というか、なんで治療後数時間であの威力のガントを連射できるかな・・・・・・」
通常、刻印が疼いた後は魔術師としてのレベルは低下する。
魔力の暴走に、消費した体力。そうそうに回復できるものではない。
治療する側はもちろん、される側も大分体力を削られるものなのだ。

「やっぱりそこは天賦の才か」

どんなに努力しても出来ないことはある。どんなに努力しても辿りつけないことはある。
そういう意味では、凛は紛れもない天才だ。あいつなら、ひょっとしたら辿りつけるかもしれない。宿願とやらに。

「・・・・・いや、待て。今頃は無茶したツケで、赤いのに抱えられている。そうと見たっ！」

ムキになって限界突破。最大出力でガント連射。
しばらくは怒りでオーバーヒート。だが、熱が冷めていくにつれて倍返しで全て戻って来る。一時的な高揚で感じなくなっただけだからな。魔力は切れずとも、体力切れでノックダウン。現在、あの赤いのに抱きかかえられて校内巡回中。言い出しっぺの自分の体調不良で作戦を不意にするのは嫌なのだろう。遠坂としてのプライドか。
しかも、妙に偉そうにあの赤いのに指図しているに違いない。
うわぁ、ものすごい事細かに想像できてしまった。

「・・・・・・Ａｍｅｎ」

主よ、かのサーヴァントに御加護を。そして、赤いあくまに鉄槌を。

■

「くしゅんっ！」
「大丈夫かね？冷えるか？」
「んー、大丈夫よ。誰かが噂しているだけでしょ」
「だといいのだがな」
「・・・・・・なによ」
「なに、あの監督役の言うとおり、今日は大人しくしているべきではないかと思っただけだよ」
「・・・・・・そこまで口に出しておいて、思うも何もないでしょ」
「ふっ、人に抱きかかえられているマスターの言う言葉かね、それは」
「ぐ・・・・・・し、仕方ないでしょ！第一士郎のせいよ、これは！」
「あの程度の挑発に乗る凛がごはぁっ！」
「ふふふふふ・・・・・・あの程度？今、あの程度とおっしゃいましたか？」
「ぐ、何をする！君は・・・」
「質問しているのはこっちよ、アーチャー」
「・・・・・・凛、待ちたまえ。このままでは無駄に」
「あの程度？私の悩みをあの程度？」
「む、い、いや・・・・・・」
「牛乳飲んでヨーグルト食べて腕立て伏せして・・・・・・ふふふ、あの程度？」
「ちょっと待ちたまえ。少し冷静になろうか？」
「私ね、前回の測定で負けているのよ。ふふふ、そりゃあ体重では勝ったわよ。でもね、知っている？筋肉って脂肪よりも重いの。それに身長とバストでは負けているからね。プラマイゼロどころかマイナスよ。屈辱の敗北よ。うふふ、小柄でうらやましい？肩こりが

気にならなくてうらやましい？」
「お、落ち着きたまえ、まずは落ち着きたまえ」
「『スレンダーだから余計な肉はつけないのだー』？『遠坂さんは十分綺麗』？『走る際は、意外と邪魔』？」
「り、凛？」
「・・・・・・・・・・・・行きましょう、アーチャー。次は二階よ」
「・・・・・・了解した」

■

「しっかし、どうするかね。これ」
目の前で、淡く光る魔方陣。正直色が不気味だ。
「こんなのとしばらく向きあえと。やっぱり悪魔だな、あいつは」
昼はそれほど気にならなかったのだが、夜は何故かその存在感が増している。甘ったるい魔力の香が強くなっている辺り、思った以上に発動時期は早くなるのかもしれない。
「まいったな、おい」

発動してすぐさま溶解されることは無いと思うが、長時間放っておくことはできない。
出来ることなら、生徒や先生、その他一般人のいない時に発動してもらえれば大助かりなのだが・・・・・・

「そんなヘマはしてくれないよなぁ・・・・・・」

つまるところ、一般人が大勢いる時に発動されたアウト。マスターがどうしようもない馬鹿なら発動後でも対処は可能だが、そんな可能性は万に一つも無いと思った方がいいだろう。

「・・・・・・いっそのこと爆破しちまうとか」

誰もいない頃を見計らって結界ごと学校をドカーンと。発動されるよりは後処理も楽だし、犠牲者はゼロ。その後に関しては、教会の預かるところではない。市の教育委員会に任せれば問題ないだろ、うん。
ふむ、そう考えると中々にナイスアイディアではないか。

「サーヴァント同士のせいにすればどうとでもなるしな」

もともと、この結界はサーヴァントが張ったモノなのだろうから、嘘は言っていない。ちょっと一般人の手が入るだけだ。
とりあえずは、凛に訊いてみることにするか。一応、あいつセカンドオーナーだし。
とすれば、善は急げ。ポケットから、携帯電話を取り出し、

何かが、右腕を貫いた。

「ちっ！」

思考を一転、戦闘時へ。
弾かれた方向からおおよその位置を割り出し、強化した鞄を盾に距離を取る。
鞄の中には、５００ｍｌペットボトルに入った聖水が一本。ポケットには純度の低い宝石が二つ。腕には言峰の刻印。魔術回路は二十七本。待機させている設計図は五つ。あと令呪が三つ。
ため息一つ。どうやら、今日は災難が群れをなして襲いかかって来る日らしい。厄日か。

「今晩は。良い夜ですね」

給水塔の上。長い髪を揺らしたソレは、まるで親しい友人に話しかけるような気軽さで挨拶してくる。
武器は揃っていない。体力はギリギリ。救援は呼べない。
ないないばかりでキリがないな、おい。

「・・・・・・ああ、まったくもって良い夜だよ」

お前みたいなのさえいなけりゃな。

「何の用だ？サーヴァント」

第十一話　厄日と厄介事（後書き）

十一話目です。今回は少し短め。

当初の予定では、士郎&セイバーｖｓ他サーヴァントとなるはずだったのですが、戦闘描写の難しさに断念。次話へと先延ばしにすることにしました。

結果、赤主従を追加してしまい、難易度が上がった気がしなくもしませんが・・・

凛の回想に出てきた女性徒たちの身体情報は、ｗｉｋｉを参考にさせていただきました。ｗｉｋｉフル活用中です。キャラマテ持ってないので。欲しいなぁ、キャラマテ（笑）。

ではでは、また次話で。

５／１８　一部修正、改訂しました。

第十二話　見習い神父と騎兵

応戦・・・・・・・不可。嬲り殺されるのがオチ。
令呪・・・・・・・不可。この距離だと、発動前に潰される。
救援・・・・・・・不可。令呪の発動よりも分が悪い。
説得・・・・・・・不可。こちらは右腕を貫かれている。
逃走・・・・・・・半々。手札の出し惜しみをせずに全力全開で逃げるなら、あるいは可。

「まいったね、どうも」

魔力・・・・・・・大幅に減少。無理は禁物。
体力・・・・・・・最大値の半分程度。
右腕・・・・・・・負傷。鉄杭が突き刺さっている。一昨日の傷もまだ完治はしていない。
その他・・・・・・・無事。通常通りに動かせる。

「ふぅ・・・・・・・ちょっと待っていてくれる？」

現状の最優先事項を確認。
鉄杭に左手をかけ、歯を食いしばる。短く息を吐きカウント、スリー、ツー、ワン。

「ふっ！」

強化した左手で引っこ抜く。嫌な音を立てて血が、肉が飛び散るが、ようやく右手が自由になった。

「・・・・・・・驚きました」

まったく表情をかえずにサーヴァントは言う。

「まさか、そんな手荒なことをするとは」

「いや、出会い頭に鉄杭を投げつけてくる奴よりは常識的じゃないか？」

上着を脱ぎ、傷口に巻きつける。霊体干渉はできるが、肉体の回復術は持ってない。後があれば、今日も工房で寝ることにしよう。それか、凛に治してもらうか。

「で、もう一度訊くぜ。こんな良い夜に何の用だ？サーヴァント」

表面上は変えない。いつもと変わらぬ風を装って話しかける。

「・・・・・・この時期に魔術師。それで十分でしょう」

そう言って、じゃらりと鎖を鳴らすサーヴァント。

ああ、なるほど。そういうことか。

「素敵な勘違いをしているようだが、俺は監督役だ」

こほん。軽く咳払いをして、サーヴァントを見据える。

「この学校にずいぶんと悪趣味な結界が張ってあると報告を受けてね。様子を見に来たところだ。・・・・・・お前の仕業か、これは？」

セイバー、アーチャー、バーサーカーは確認。アサシンはハサンと決まっている。とすれば、残りはランサー、ライダー、キャスター

か。

「・・・・・・さぁ？どうでしょうね」

得物は鉄杭。そして、あの際どい服装。

ランサーの可能性は低い。

「じゃあ、この結界を張ったのが誰だかは知っているか？」

あの眼帯、強力な魔力殺しが働いている。十中八九、これは魔眼持ちか。

「いえ、知りません」

ライダーかキャスターか。

そのどちらでも対応できるよう、逃走の手順を思い浮かべる。それも、安全とは言えないような際どいのを。

一つ一つを頭の中でシミュレート。死ななければ大丈夫。博打は大いに結構。

「物は相談なんだが、協力してくれることは？」

「あり得ません」

サーヴァントは給水塔の上。だが、扉に辿り着く前に串刺しにされる。

「残念。じゃあ、俺をこの場から逃がしては？」

「それも出来ない相談です」

フェンスに寄りかかる。位置的に、そのままグラウンドか。

「なるほど・・・・・・よく分かったよ。ライダー」
「っ！」

目に見えて動揺するサーヴァント。どうやら、鎌かけ正解か。場に、わずかな綻びが生じる。絶対的なチャンス。
瞬時に、体を強化。後方に、水平に跳ぶ。

「待っ！」

慌てるサーヴァント。だが、もう遅い。
弾丸と化した俺の体を、たかが転落防止用程度のフェンスが支えられるはずがない。
ふわり、と。一瞬の無重力の後、下へと体が引っ張られる。

「む」

少し力が強すぎたか。校舎が少し遠い。思っていた以上に後方へ体が流れていく。
瞬時に手順を変える。考えるのに時間はかけない。一瞬一瞬で判断する。

「ふっ、と」

くるりと一回転。体、とりわけ足を強化し、着地時の衝撃に身を備える。

「っ、つっ！」

衝撃が右腕の傷に響く。

叫びだしたくなるのをこらえて、すぐさま校舎へと疾走。何の障害物も無いグラウンドにいては的もいいところだ。

じゃら・・・・・・

鎖の音が、すぐ真上からした。
悪寒と直感に身を任せ、勢いそのままに左前へと跳ぶ。
体を掠め、鉄杭が地面に突き刺さった。

「ちっ！」

そう簡単に逃げ切れるとは思っていないが、せめて校舎内へ入るくらいの余裕は欲しかった。
跳んだ勢いそのままに左手で側転。直感に従い、投影した黒鍵で頭上を凪払う。

「くっ！」

何かに当たった。だが、認識する余裕は無い。
強化した両足で、ひと跳びで校舎の中へ。窓ガラスなんて気にしない。
着地と同時に身をかがめ、獣のように地面すれすれを低空疾走。頭上を何かが掠める。

「よっ、と！」

開ける時間がもったいないのでドアは粉砕。直しとかないと一成が嘆くだろうか。そんな場違いな思考が頭をよぎる。

「はっ！」

左足を軸にくるりと回転。投影した黒鍵を投げる。
が、余裕で避けられ、あまつさえ距離を詰められてしまう。

「ちぃっ！」

強化は最大。出し惜しみは無い。
サーヴァントに合わせ、こちらも右足を振りぬく。

「ほう・・・・・・」

我ながら無謀ともいえる、英霊との肉弾戦。だが、真正面からの攻防ではない。
受け流し、軌道をずらし、いなし、避ける。攻撃はしない。防御に徹する。
全体像を視る。体勢、呼吸、力の入れ具合から、次に来る攻撃を予測。経験を加味し、一手二手先を読みながら、出来うる限り最低限の動きで対応する。

「少し、強くしますよ」

言葉と共に、一瞬のタメから蹴りがくる。今までのとは大違いの一撃。避けることは不可。先ほどまで両手両足だけだった強化を、体全体にかける。

「ぐっ！」

衝撃、滑る体。反射的に体が動いたが、鈍痛が蹴られたところを中心に広がる。

「まだ、動けますね」

勢いそのままに距離をとるが、すぐに詰められてしまう。
黒鍵の投影は不可。先ほどと同じく、接近戦に主体の攻撃を耐える。
苛烈さを増していく攻撃。流石は英霊。受け流しきれず、ずらせず、いなしきれず、避けきれず、体に着弾していく。ボロボロの体が、さらに傷を増やす。
視ているのでは追いつかない。予測と反射で、なんとか保たせる。

「それ」

直後、視界がぶれた。
色彩が、明暗が、ピントが、なにもかもがごちゃまぜになる。

「かはっ！」

背中に衝撃。脳が揺れる。
何が起こったかを理解する前に、体が浮遊。再び、背中に衝撃が走る。

「――――――――」

何かを言っている。それは分かる。
が、よく聞こえない。視覚と聴覚、それに平衡感覚が異常をきたしている。
火照った体が急激に冷める。ハイからローへ。認識していなかった疲れが、痛みが、無茶をした反動が、一気に体を襲う。

「――――――――」

顎を蹴りぬかれたか。体全体が、まるで痺れているかのよう。
どうにか頭を起こすが、それが精いっぱい。

「――――――――」

再び、頭を打ちつけられる。どうやら俺は踏みつけられているらしい。

「ぐっ・・・・・・・」

左手で足を掴むが、すぐに振り払われる。
武器を投影しようにも、正確なイメージが出来ない。

「――――――――」

体が、浮く。
相変わらず何もかもがはっきりしないが、それくらいは分かった。

「――――――――」

ちくり、と。首筋に痛みが走る。
じゅるじゅると、何かを吸う音。
感覚を失っていく体。
遠のきつつある意識。

「ぁ・・・・・・・」

反射的に右足を、わずかばかり残っている魔力を総動員して強化し、
垂直に振り上げる。

「――――――――！」

何かに当たった。それは分かった。
だが、それで終わりだった。

「――――――――！」

支えを失い崩れ落ちた体に、容赦なく衝撃が走る。
もう痛みなんて感じない。体力も魔力も切れた俺は、等身大の人形となんら変わらない。
親父に散々仕込まれたおかげで、未だに気を失わないでいられる。
が、それだけだ。現状を打破する何かなど、思いつきもしない。
きっと今の俺は、一昨日のバーサーカーの時よりも酷いだろう。もしかしたら、右腕は千切れ飛んでいるのかもしれない。
そんなことを考えていたら、ついに衝撃を感じなくなった。体が最終防衛ラインを起動させたか。何か、暖かいものに包まれている気までする。

だから――――

「我がマスターへの不届き。よもや、五体満足で死ねると思うな」

――――そんな声が聞こえたのは、きっと幻聴なのだろう。

第十二話　見習い神父と騎兵（後書き）

十二話目です。士郎、フルボッコにされるの巻。

お相手はライダー。

ランサーでもよかったのですが、別口で出てもらうことにしました。

勘のいい方なら分かると思います（笑）。

プロットの段階ではもっと酷い目に遭う予定でしたが、それだと原作の士郎なみに嬲られてしまうため、何度か書きなおし。ここの士郎は、原作のよりは強いのです。言峰だし。

さて、次話ですが。士郎組と凛組、どちらを次回の主軸に据えるかはまだ決めていません。同時進行して、早くに書き終わった方が十三話目になると思います。

適当ではありません！悩んだ末の苦肉の策です！

ではでは、また次話で。

5／7　誤字修正、一部改訂しました。

第十三話　拳と剣

屋上にて、言峰士郎が騎兵のサーヴァントと対峙していた頃。
そのすぐ下の階で、遠坂凛とアーチャーも一組の主従と対峙していた。

「アーチャー、サーヴァントは任せたわ。サクッと片しなさい」
「了解だ、マスター」

両手に双剣を構え、一歩踏み出す弓兵。

「やる気は十分、ってか」
「では、セオリー通りに事を進めるとしましょう、ランサー」

真紅の槍を構え、同じく一歩踏み出す槍兵。

「・・・・・・・・・・」

高まる空気。しばしの睨みあい。
それは、

ガシャァァン！！！

どこからか聞こえた甲高い音によって破られた。

「っらぁ！」

先に仕掛けたのはランサー。手に持つ槍で三連撃。正確に、額、喉、心臓の急所に向けて突きを繰り出す。

対して、その三連撃をいなし、流し、そらして対応するアーチャー。その顔に、苦悶の色は見えない。

「ま、これぐらいは防いでもらわなきゃな」

先ほどの構えよりも身を屈め、槍の先端をアーチャーに向ける。

「それじゃ、少し上げるぜ」

言うやいなや、再び突きが繰り出される。ただし、スピードは段違い。額、喉、心臓の三か所だけでなく、目、肺、脊髄にも穂先が向かう。

だがしかし、その六連撃ですら余裕をもってアーチャーは対応する。手に構えた双剣を器用に扱い、最小限の動きでいなす。その顔は、やはり涼しいまま。

「そらっ！」

ランサーのギアが上がる。一撃一撃のスピードが、威力が、重みが増す。

だがやはり、アーチャーの堅守を崩すには至らない。双剣で、全ての突きを防がれる。

「やるじゃねぇか」

だが、かといってランサーの闘志が萎えることはない。獰猛な笑みを浮かべ、その目に険呑な光りを灯す。

「さて・・・・・・そろそろ本気でいくぜ」

膨れ上がる殺意。重圧を増す空気。射抜くような視線。
それらを一身にその身に受け、それでいてアーチャーの顔に変化は無い。
否、やれやれとでも言いたげに息を吐いただけだった。

■

「すごい・・・・・・」

槍兵と弓兵の攻防を見て、思わず凛は呟いた。
目にも止まらぬ速さで目まぐるしく変わる立ち位置。
聖杯戦争に向けて研鑽を続けた十年間、否、以後の人生を全て懸けたとしても、凛ではその頂に辿りつくことは不可能。
それほどまでに、目の前の二人は『戦う』という一点を極めていた。

「余所見とは余裕ですね」

腹部に衝撃。現状へ意識を引き戻される。
逆らわずに側転。出来うる限り衝撃を逃がす。

「目が覚めましたか？」
「・・・・・・ええ、おかげさまで」

表面上は何も変わらず。髪をかきあげ二本の足でしっかり立ち、むしろ余裕であることを見せつける。遠坂家家訓、常に優雅たれ。

「さて。それでは、目が覚めたところで二三訊きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか、ミス・トオサカ」

「奇遇ね。私も質問したいことがあるわ、ランサーのマスターさん」

鋼同士のぶつかり合う音をＢＧＭに、二人は対峙する。

「では、私から。この学校に張ってある結界は、貴女方が仕掛けた物でしょうか？」

「まさか。こんな悪趣味な趣向は持ち合わせていないわ。むしろ、貴女方ではなくて？」

「フッ、御冗談を」

小馬鹿にしたような笑い。

「では、新都で行われている吸血事件や、魂喰らいについては？」

「そんな下卑た真似をするとでも？」

「ええ」

露骨すぎる挑発。怒りで判断力を低下させるのが狙いか。

だが残念。凛には、常日頃から彼女を怒らせるのが仕様な幼馴染と、毎日のように舌戦を繰り返している。この程度の挑発には慣れっこだ。

「失礼ね。遠坂がセカンドオーナーであることを知っての狼藉、ということでいいかしら？」

「純粋な疑問をぶつけたまでですよ。それに、見知らぬ魔術師の言

うことを頭から信じることなどできません」
「あら。それじゃあ質問の意味がないじゃない」

体力、魔力、体調、手数。全力には程遠い現状で、何が最適かを模索する。
多少の無茶は厭わない。勝つ可能性が高い方法を選ぶ。

「ふふっ、それもそうですね」
「時間の無駄だったわね。・・・・・・それで、他に質問は」
「ああ、あと一つだけ」

重心を、わずかに前へ。懐にある宝石数をカウント。現魔力量の把握。刻印を起動。魔術回路を開く。
狙うは一つ。全力全開短期決着。

「令呪を破棄して、降りるつもりは？今なら、腕の良い心霊医術師を紹介しますよ」
「そっくりそのまま返すわ。もっとも、心霊医術師に関しては『性格に難あり』というオプションつきだけど」
「奇遇ですね。私の知る心霊医術師も、少々危なっかしいところがあります」

コホン。軽く咳払いをして佇まいをかえる。
体を半身に。幼馴染と手合わせする時と同じ構え。

「では、改めて自己紹介を。バゼット・フラガ・マクレミッツです」
そう言って、凛と同じく体を半身にし、ファイティングポーズをとるバゼット。

「あら、自分の名前を明かすなんて、変なところで礼儀正しいのね」
「別段、知られて困る名前ではありませんから」
「よく言うわ。歴代最強といわれる執行者じゃない」
「おや、知っていられたとは」

互いの距離は、およそ三メートル。一歩踏み込むだけで拳は届く。

「それじゃあ」
「ええ」

両者の足に力がこもる。

「「斃れなさい！」」

同じ言葉を発し、瞬時に距離を詰める。
狙うことは同じ。近接距離における肉弾戦。
シュートを主体とするバゼット。
中国拳法を主体とする凛。

「ふっ！」

ワン・ツー。視認不可な高速ジャブ。そしてストレート。
凛はそれを、両腕を眼前に交差し強化をかけて防ぐ。ミシミシと嫌な音がし、体が後ろへと流れる。軽く舌打ち。流石に歴代最強の名は伊達ではない。
ヒュン。風を切る音とともに、凛の眼前を何かが通り過ぎる。ちりちりと、何かが焦げる臭い。たまらず、後方へと逃れる。

「・・・・・・やってくれるじゃない」

苦々しげにつぶやく凛と、対照的に涼しい顔のバゼット。
嘗められている。その現状に、内心で凛は舌打ちした。

「さて。それでは、せいぜい耐えてくださいね」

言うやいなや、一瞬で距離をつめてラッシュ。凛の体を、これでもかと打ちすえる。

「ふっ！」

アッパー一発。体が空中に浮かぶ。
そこへ、

「フィニッシュ！」

ハイキック。生身の人間が出すとは思えない一撃に、アメリカンコミックよろしく水平に飛んでいく凛の体。ドアを破り、室内の机や椅子を巻き込んで、ようやく勢いが止まる。

「ふぅ・・・・・・立てますか？」

問いはしたものの、もう立ちあがることは出来ないだろうという確信が、バゼットにはあった。
距離を詰めてからのラッシュに、止めのハイキック。会心ともいえるほど、綺麗に決まった一連のコンボ。だがしかし、

「痛ったぁー・・・・・・・」

教室から聞こえてきた凛の声に、バゼットの目が見開く。

「やってくれたじゃない・・・・・・高くつくわよ」
転がりまわったせいか、普段の彼女からは想像もできないほど薄汚れ、傷ついた体。
けれど、その目に宿る闘志が消えることは無い。鋭い眼光でバゼットを一瞥し、体の調子を確かめる。よし、まだいける。

「・・・・・・驚きました。まさか、まだ立てるとは」
「お生憎様。何の準備もせずに戦いに臨むとでも？」
おなかと背中にルビーを五つ。十トンの衝撃にも耐えられるとは、本人の弁。

「さて・・・・・・それじゃあ、続けましょうか」
ニヤリと。不敵な笑みを浮かべて構える凛。
呼応し、構え直すバゼット。
視線が交差し、一撃を放とうと両者の体が動く。

「ふっ！」
「しっ！」

優勢なのは、やはりバゼット。ルーンで硬化した手足は、バゼット自身の研鑽も相まり、銃器並みの威力を誇る。
それを凛は、円運動でなんとか対応する。守りなど彼女の性には合わないが、肉弾戦でバゼットに対して優位に立つのは現状困難。とすれば、わずかな隙を見極め反撃に転じるしか方法は無い。
バゼットが攻め、凛は守る。幾号もの打ちあいを経て、一旦距離を取り、また打ちあう。

（拙いわね・・・・・・）

隙を見極めようにも、手数の多さに反撃に転じられない。
この接近戦、どちらが有利であるかは明白。経験、年季、錬度、地力、体力。足りないものはいくらでもある。

「シッ！」

バゼットのアッパーが、凛のガードを吹き飛ばす。

「まずっ！」

ガラ空きの顔面に迫る右ストレート。
避けきれないと判断し、顔面を最大限に強化。前方に、踏み込む。

「っ！」

驚いたのはバゼット。後方へ逃れるのならまだしも、前方に踏み込まれるのは完全に予測範囲外。だが拳は止まらない、止めるつもりはない。何をしようとも振りぬく。

「なっ！」

だが、拳は途中で止まる。凛の額を振りぬけない。
一撃で終わらすべく十分な威力を乗せた。だが、最大限の威力を発揮する前に潰されてしまった。

「しまっ！」

呆然としていたのは一瞬のこと。だがそれは、戦場において致命的

過ぎる一瞬。
当然、それを逃す凛ではない。バゼットの腹部に手を当て、内臓一発。

「はぁっ！」

衝撃が突き抜ける。掌底に魔力の放出、さらには宝石も加えた豪華な一撃。
吹っ飛びはしない。だが、全身の力が抜ける。

「ていやっ！」

すかさず、連環腿。バゼットの意識が一瞬吹き飛ぶ。
超接近。ゼロ距離から、なけなしの魔力を込めた一撃を放つ。

「はあっ！」

裡門頂肘。人体の破壊に優れる肘での打突。
鋭い一撃が、バゼットを教室の外まで吹き飛ばす。

「はっ、はっ・・・・・・・」

体力、魔力とも総スカン。
額からは血を流し、両膝は疲労で笑い、腕は痛みで上がらず、吐く息は荒い。
それでも倒れない。まだ倒れない。

「・・・・・・効きました」

舌打ちしたくなるのをこらえる。

所詮は淡い願望。これで決着がつくのは、期待するだけ無駄というもの。

「・・・・・・・・・」

無言で構える。もはや家訓のことなど頭にない。最後まで足掻く。
対するバゼットも無言。表情には出していないが、先ほどの連撃で大分体力を奪われている。長期戦は不可。次の一撃で決める。
距離にして、約五メートルといったところ。
じりじりと、両者の間が狭まっていき、

突如、階下から轟音が響いた。

■

セイバーが異変に気付いたのは、士郎を捜して学校へと向かっていた時だった。
いくら待っても帰って来ず、いくら呼び掛けても応答なし。
業を煮やし、すぐそばで震えていたギルガメッシュから学校がどこにあるかを聞きだしたセイバーは、全身から黒いオーラを噴出させ

て学校へと向かった。
閉じられていたラインが繋がったのは、ちょうど学校への坂道を登り始めた時のこと。
髪の長い、眼帯をした女。串刺しにされた右腕。じゃらじゃらと煩わしい鎖つきの鉄杭。
突如として頭に流れ込んできた映像。それが、自身のマスターに害を為すものと直感で悟る。
魔力放出。甲冑を編むのではなくスピードに割り振り、その勢いであっという間に学校につく。
「くっ、遅いか！」
校内からは、剣戟の音が響く。
士郎が耐えているのか、それとも別口のサーヴァントが介入したか。ラインを通じ、士郎の現在地を確認。来た時と同じく、魔力放出でロケットダッシュ。割れた窓から校内へ入り、
あの髪の長い女に捕まった士郎を見た。
「っ！」
再び魔力放出。それに気付き、ライダーがこちらを見るがもう遅い。勢い任せに、思いっきり顔を殴る。
「はあっ！」
士郎を掴んでいた手が離れる。が、それだけでは済まさない。
流れる長髪を掴み、再び殴打。女性の細腕と侮ることなかれ。その

身は英霊。さらには、魔力の上乗せした拳だ。

「ぐぅっ！」

吹き飛ぶライダー。
それには目もくれず、崩れ落ちた士郎を抱きかかえる。

「くっ、無事かシロウ！」

士郎からの返答は無い。
体力、魔力共に低下。体は傷だらけ。右腕にいたっては千切れかけている。
それでも、従来頑丈なのか回復力が高いのか、命は無事なよう。
マスターの、一応の無事を確認して安堵するセイバー。
だが、すぐにでも怒りがこみ上げてくる。
もちろん、その一端は士郎自身にもある。だが、もう一人。

「我がマスターへの不届き。よもや、五体満足で死ねると思うな」

漆黒の甲冑を身にまとい、全身から濃霧のような黒い魔力を放出させ、闇に染まった聖剣を携える。その切っ先には、ライダー。

（くっ、拙いことになりましたね）

本人からすれば、ちょっとしたストレス解消代わりにいたぶるのが目的だった。
それがどうだ。思ったより抵抗をされた上に、新手のサーヴァントの参上。しかも、話を聞く限り主従関係だとか。
まぁ、そんなことはどうだっていい。逃げるか、戦うか。

（逃げるが吉、なのでしょうが・・・・・・）

それは不可能。目の前のサーヴァントがそうやすやすと逃がしてくれるとは思えない。

というか、顔面を二度も殴られた上に髪の毛を傷つけられて黙って泣き寝入りできるほど、ライダーは我慢強くない。

（私の髪に傷をつけたのです。しっかりその分は返さなくては）

女性の髪の毛は命と同等。それは、時代や場所が違っていても不変なもの。

特にライダーにとっては、その髪の毛は思い入れ深い。

「来ないのか？では、こちらから行こう」

構えたまま動かないライダーに向かって、セイバーは踏み込む。

一閃、二閃。手に持つ鉄杭でそれを受ける。

（くっ、なんて馬鹿力ですかっ！）

速く、重い一撃。痺れる両腕。

（最悪ですね・・・・・・）

苦々しげに、内心で舌打ちする。

長期戦は不利。かといって、短期決着も不可。

場所も、狭い校舎内ではライダーの能力を存分に発揮できない。

（何か手は・・・・・・）

見渡すが、現状を打破するのに有効そうなものはない。
自身の幸運値の低さが、こんなところでも表れてしまうのか。

「考え事とは余裕だな！」
「っ！」

隙をついて、ライダーの懐に潜る。そのまま首をつかまえ、地面に叩き付ける。

「かはぁっ！」

思わず苦悶の表情を浮かべるライダー。
一瞬の隙の結果に、大きく戦況が傾く。

「吹き飛べっ！」

当然、それだけで済ますセイバーではない。
ライダーを空中に蹴り上げ、聖剣を全力で振り切る。

「っぁ！」

何とか鉄杭で受け止めるが、勢いを殺すことはできず、ゴム鞠のように吹っ飛んでいく。

（拙いですね・・・・・・）

四の五の言っていられる場合ではない。
手に持つ鉄杭を首に刺す。魔力量は心もとないが、一回分くらいなら問題ない。

「なっ！」

驚いたのはセイバーだ。
何せ、対峙していた相手がいきなり首に鉄杭を突き刺したのだから。
だが、そんなセイバーをしり目に、目の前には魔法陣が浮かび上がる。

（・・・・・魔法陣？）

呆気にとられていた思考が、すぐに落ち着きを取り戻す。同時に、それが為そうとすることにも思い当たる。

「シロウ！」

発動前につぶすのは無理。そう悟ったセイバーは、すぐさま士郎の元に駆け寄る。
それを見て、薄くライダーは笑う。もう遅い。小さく告げる。

「吹き飛びなさい」

廊下を、轟音と閃光が包んだ。

第十三話　拳と剣（後書き）

十三話目。たぶん、今まで一番長いです、はい。

十二話のあとがきで、凛組と士郎組のどちらを十三話目にするかは決めていない、と書きましたが、分散させるとややこしくなるだけだと思ったので、一話にまとめてしまいました。

いつも、これくらいの長さをスパッと書ければいいのですが・・・・・・

ではでは、また次話で。

５／１０　誤字脱字修正、一部改訂しました。

第十四話　誓いと本心

始まりの刑罰は五種、生命刑、身体刑、自由刑、名誉刑、財産刑、様々な罪と泥と闇と悪意が回り周り続ける刑罰を与えよ

――――何だ、これは？

『断首、追放、去勢による人権排除』『肉体を呵責し嗜虐する事の溜飲降下』

『名誉栄誉を没収する群体総意による抹殺』『資産財産を凍結する我欲と裁決による嘲笑』

――――待て、一体・・・・・・

死刑懲役禁固拘留罰金科科、私怨による罪、私欲による罪、無意識を被る罪、自意識を謳う罪、内乱、勧誘、詐称、窃盗、強盗、誘拐、自傷、強姦、放火、爆破、傷害

過失致死、集団暴力、業務致死、過信による事故、誤診による事故、隠蔽。

――――あぁ・・・・・・

益を得るために犯す。己を得るために犯す。愛を得るために犯す。得を得るために犯す。自分の為に■す。窃盗罪横領罪詐欺罪隠蔽罪殺人罪器物犯罪犯罪犯罪

――――止めろ

私怨による攻撃攻撃攻撃攻撃汚い汚い汚い汚いおまえは汚い償え償

え償え償え
あらゆる暴力あらゆる罪状あらゆる被害者から償え償え『この世は、人でない人に支配されている』

――――止めろ止めろ止めろ

罪を正すために良心を知れ。罪を正す為に刑罰を知れ。
人の良心は此処にあり、余りにも多く有りふれるが故にその総量に気付かない。
罪を隠すための暴力を知れ。罪を隠すための権力を知れ。
人の悪性は此処にあり、余りにも少なく在り辛いが故にその存在が浮き彫りになる。

――――止めろ・・・・・・

百の良性と一の悪性。バランスをとる為に悪性は強く輝き有象無象の良性と拮抗する為兄弟で凶悪な『悪』として君臨する。始まりの刑罰は五
に■す自分の為に■す
勧誘、詐称、窃盗、強盗、誘拐、自傷、強姦、放火、爆破、傷害汚い汚い汚い汚いお前は汚い償え償え償え償え
あらゆる暴力あらゆる罪状あらゆる被害者から償え償え『死んで』償え！！！！！！

■

夢をみた。ひどく懐かしい夢を。
糞親父からの最初のプレセント。おかげで、■■士郎が死んで、言峰士郎が生まれた。
悪趣味全開フルスロットルフルアクセルな糞親父に、被害を一身に被ることになる不幸な壊れた子ども。某大国も真っ青な、超アットホームな家庭ドラマが繰り広げられましたとさ。ジャンルはアクションかコメディー。時々、サスペンスやホラーやファンタジー。R指定もつくかな、場面によっては。

「起きたか」

そんな馬鹿なことを考えて現実から逃避出来たら、どれだけよかったか。
部屋の隅から聞こえる、綺麗だが無機質な声。
起き上がり、声の方に目を向けると、いつぞやの時と同じ姿のセイバーがいた。

「何があったか覚えてはいるか」

鎧を鳴らしながら、セイバーが側に立つ。
何があったか。そんなことは思い返すまでも無い。鮮明に思い出すことができる。

「覚えているようだな。・・・・・・では、昨日私が言ったことは」

セイバーの雰囲気が、微細ながら変化する。それに応じて、室内の空気が重くなる。
言いたいことは分かる。十中八九、俺の軽率な行動についてだろう。

「ああ、すまない。軽率だっ・・・・！？」

一瞬、何が起きたか分からなかった。
急転する視界、背中に衝撃、締まる首。
げぇ、と。嫌な音がした。

「軽率？殺されかけたのだぞ！」

その細腕のどこにそんな力があるのか、セイバーは片腕で俺を持ちあげている。
振りほどくことも、抜け出ることもできない。万力のような力で締め上げられる。

「幸いにして間に合ったから良かったものの、令呪すら使わんとはどういう料簡だっ！」

射殺さんとばかりに睨みつけられる。
感覚が麻痺しつつあるのがせめてもの救いか。気に当てられて、いつ意識を失ってもおかしくない。

「貴方が何を思い、何を考え、何を目的として行動しているかは知らない。
だが、今の体たらくで聖杯戦争を勝ち抜けると思っているのならば、思いあがりも甚だしい！」

ふわり、と。一瞬の浮遊感のあと、背中に衝撃。
目を開けると。剣の切っ先が眉間に向けられていた。

「答えろ」

静かな、冷たい声色。

「貴方はいったい、何がしたいのだ」

殺意も敵意も害意も見られない。ただ、俺を見透かそうとするような金色の双眸。

『士郎。お前は空っぽだ』

糞親父に、何度も言われてきた言葉が蘇る。
十年前の大火災。生き残った代償は、空っぽの器。
この身に宿るモノは、何一つとしてない。只の生き残りの抜け殻。

――――ヤメロ

基軸、指針、観念、意義、意味、主義、主張。
抜け落ち、消え去った体は生ける屍。
呼吸、食事、運動。反復、反射、繰り返すだけの空虚な日々。

――――ヤメロ

見捨てた人がいる。
振り払った人がいる。
逃げだした人がいる。
目を背けた人がいる。
諦めた人がいる。
拒絶した人がいる。

――――警告、警告。コレ以上ハ危険

怨嗟怨嗟、蝕む呪い。
生きるために■した。自分の為に■した。生きたくて■した。
見たくなくて■した。聞きたくなくて■した。感じたくなくて■した。考えたくなくて■した。知りたくなくて■した。認めたくなくて■した。■したくなくて■した。
逃避、閉鎖。都合のいい解釈に身を任せる。■しい世界を、■しい世界を。

――――――――■■■■■■■■

残ったのは何だ？■されたのは■だ？
■き、閉■、開■、■め、一体■には何が■った？
■した■は何だ？■し■のは■■？
■初の炎。■まりの記■。
見■て、■り払い、■げだし、■を背け、■め、■■した。
黒コゲの■タイ。崩れたシ■イ。バラバラのシタ■。
■ネ
■ネ

シネ■ネ■ネ
■ネ■ネ■ネ■ネシ■
シネ■ネシネシ■シネシ■■ネ■ネ■ネシネシネシ■シネ
シネ■ネシネシ■シネシネ■ネシ■シネシネシネシネシ■シ■シネ
シネシネシ■■ネシネシネシネシ■
シネシ■シネシネ■■■ネシ■シネシネシネ■ネシネシネシ■シ■
シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシ■シネ
シネシネシネシネシネシネシネシネシ■シネシ■シネシネシネシネ
■ネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ■ネシネシネシネシネ
シネシネシネシ■シネシネシネシネシネ■ネシネシ■シネシネシネ
シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシ■
シ■シ■シネシ■シネシネシネシ■シネシネシネシネシ■■■■■
■ネシネシネ■ネシネシネシネシネシネシネシ■
■ネシネ■ネシ■シネシネシネシネシネ
シネシネシネシネ■ネシネシネ■ネシネシネシ■シネシネ■ネ■ネ
シネシネシネシネシ■シネ■ネシネ■ネシ■シネシネシネシネシネ
シネシネシネシネシネシ■シネシネシ■シネシネシネシネシネシネ
シ■シネシネシ■シネシネシネ■ネシネ■ネシネシネ■ネシネシネ
■■■ネシネ■ネシネシネシネシ■シネシ■シネシネシネシネシ■
シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ■ネ
シネシネ■ネシネシネシネ■ネシネシネシ■シネシネシネシネシネ
シ■シネシネシシネシネシネシネシネシ■シネ■ネシネシネシネシ
ネシネシネ■ネシネシネシネシネシネシネ■■シネシネシネ■ネシ
ネシネシネシ■■ネシネ■ネシ■ネシ■シネシネシネシ■シネシネ
■■■■■■■シネ■ネシネ■ネシ■シネシネシネシネシネ■ネシ
ネ■ネシ■シネシネシ■シネシネシネシネシネシネシネシネシ■シ
ネシネ■■シネシネシネシネシネ■ネシネシネシネシ■シネシネシ
ネシネネ■ネシネシネシネシネシネシネ■ネシネシネシ■シネシ■
シネシ■シネシネシネシ■シネ■ネシネシネ■ネシネシネシネシネ
シネシ■シ■シネシネシ■

シネ■ネシネシネシ■シネシ■シネシネ■ネシネシネシネシネ■ネ
シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ■シネ
シネシネシネシ■シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ■ネ――――――
――――――

ギチギチ
ギチギチ
ギチギチ
ギチギチ
ギチギチギチ

「・・・・・・・・・さてな」

頭痛。嘔吐感。揺れる視界。

「俺は、自分でも何がしたいのか分からねぇよ」

こみ上げてくる何かを抑える。

「聖杯にかける望みなんかありゃしない」

激情に任せそうになるのをこらえる。

「マスターたる証しは有していても、気概や心構えは持ち合わせちゃいない」

内部で渦巻くモノを鎮める。

「思いも、考えも、目的も、その場しのぎだ。正直、どうでもいい」

吐き捨てそうになるのを、どうにかなだめる。

「悪いな、こんなマスターでさ」

自嘲気味に、最後の言葉を紡ぐ。
もはや、どうでもよかった。
愛想を尽かされるのなら仕方ない。
主として見られなくなるのも仕方ない。
どうせ、たった二週間程度の急造コンビ。繋ぎあわせるのは、純粋な利益追求。
依り代と武器。互いを深く知る必要性など、これっぽっちもありゃしない。

「・・・・・・侮られたものだな」

だが返ってきた言葉は、予想外のモノだった。

「望みが無い？気概や心構えが無い？思いも考えも目的も無い？
・・・・・・それがどうした」

石造りの室内に、剣が突き立てられる。

「召喚時に誓ったはずだ！我が剣を捧げると！」

高らかと、室内にセイバーの声が響く。

「ああ、シロウ。ここまで怒りを覚えたことは久しい。
・・・・・・まさか、悩み一つに簡単に愛想を尽かすような、そんな忠誠心の欠片も無い輩と同等に見られていたとはな」
「違っ・・・・・・」

「違う？ならば、我が主を名乗る以上、他人の、ましてや従者の顔色など窺うな！自身の選択に、後悔するような素振りなど見せるな！」

「・・・・・・・・・・」

「迷う必要などない。ただ一言、命令すればよいのだ。我が剣は、何があろうとも貴方と共にある」

「あ・・・・・・・」

ストン、と。

何かが、落ちた。

「答えが無いというのなら、今からでも見つければよい。貴方の迷いも、恐怖も、拒絶も、行く道を遮ろうとするのなら、全てを切り払ってやろう」

『士郎は私の所有物なの！勝手に死にかけてんじゃないわよ！馬鹿っ！』

『兄さまは兄さまです。自身の心配なんかよりも、私のことを心配してください』

『危なっかしいですね。私もいるのですから、一人で戦おうとなんてしないでください』

セイバーの言葉に、昔のことを思い出す。事あるごとに無茶をし、迷い、また無茶をしては皆に言われた言葉を。

情けないことだが、どうも俺という存在はこうやって色んな人に面倒や迷惑をかけていかないと生きていけないらしい。

「誓おう。我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある」

差し出された右手。

迷うことは無い。恐れることも無い。
すでにその答えは決まっている。

「・・・・・・ああ。ならばこの命運、汝が剣に預けよう」

握った右手は、鎧越しだというのに、ずいぶんと暖かだった。

第十四話　誓いと本心（後書き）

十四話目。おおよそ一週間ぶりの投稿です。

プロットの流れそのままなのですが、どうにも士郎の歪みを上手く表現出来ずに何度も書き直し。気がつけば、一週間近く経っていることに（汗）。

前話よりも文章量が短い？うぅ・・・そこは突っ込まないでくだせぇ、前話がおかしいだけなのです。はい。

次は、凛組主体になる予定です。来週までに書き終わるのが目標。そこ、情けないとか言わない！

ではでは、また次話で。

５／２５　加筆修正しました。

第十五話　記憶と相違

夢を、みた。
ひどく、寂しい夢を。

■

「む、起きたか」

赤銅色の髪の毛。覇気のない眼。けだるそうな表情。
目が覚めたら、なぜか眼前に腐れ馴染みがいた。

「ナイスタイミング。ちょうど治療が終わったところだ」
「いや、ちょっと待って」

とんとんとん。人差し指で額を叩く。何かがおかしい。うん。

「大丈夫か？えらく珍妙な顔だぞ」
「いや、何かが引っかかってて・・・・・・って、誰が珍妙よ」
「今のお前だ」

わぷっ。クッションを投げつけられた。顔面直撃、地味に痛い。
「無茶しすぎだ。とりあえず今日は絶対安静。いいから寝とけ」
むぅ、確かにここ数日は色々とあったけど・・・・・・って、あれ？
「あー・・・・・・士郎？何であんたがここに？」
「赤いのに呼ばれた」
・・・・・・・・・・はい？
「絶不調なくせに無茶するから、魔術回路が幾分傷んでいた。色々とヤバかったんだぞ。世話をかけさすな、心配させるな」
「？」
「・・・・・・寝起きのお前は、本当に鈍いな」
「えーと？」
「・・・・・・昨日のことは覚えているか？」
昨日？昨日って・・・・・・
「・・・・・・その様子だと覚えていないみたいだな」
「う・・・・・・ごめん」
「はぁ・・・・・・」
あきれつつも、士郎は昨日の出来事を話してくれる。
曰く、ランサー組と戦ったと。
曰く、令呪を用いて戦略的撤退を敢行したと。
曰く、ボロボロだったと。
曰く、半日以上も眠っていたと。

「あー・・・・・・思い出したわ」

うん、思い出した。認めたくない事柄が些か多いけど。

「寝ている間に治療は済ませたが、疲れが抜けたわけじゃない。今日一日と言わず、明日一日も休んだほうがいい」

「そんなに酷かったんだ・・・・・・」

「最初に言っただろう。魔術回路が傷んでいた、って。無茶し過ぎだ、馬鹿」

やれやれ、と。大きくため息をつかれる。

「学校の結界は置いといて、体調の回復に努めることだな。もっとも、今日一日は満足に動くことはできないだろうが」

言われて身を起こそうとするが、激痛で振出しに戻る。なるほど。

「肉体的な痛みは緩和できないんだっけ」

「俺の専門は心霊医術と言っているだろうが。宝石でも飲み込め」

「宝石飲み込んでも魔力が回復するだけよ」

そもそも、そんな高級品を非常事態でもないのに使用できません。

「というか、士郎。その右腕は？」

今更だけど、士郎は右腕に包帯を巻いている。昨日はそんなものなかった。

「ああ。ちょっと怪我した」

ちょっと、ねぇ・・・・・・

「あんまり無茶すんじゃないわよ」

「今のお前が言うか。それ」

うっ、何も言い返せない・・・・・・

「ま、後の面倒は赤いのにでも看てもらえ。俺は帰るぞ」

「あら、もう少しくらいゆっくりしていけば？」

「忘れたか？今の俺の肩書は監督役だ」

あー、そういえばそうだったわね。

「馬鹿どもが暴れまわったせいで、後処理に忙しいんだよ。くそっ、あと一年親父が生き永らえてくれていればなぁ・・・・・・」

そう言う士郎の顔には、疲労感が色濃く見える。

存外、監督役というのも大変のよう。心の中で合掌。

「ま、そういうわけで帰るわ。絶対安静な。お大事に」

「あ、ちょっ、待って！」

手先を動かすだけでも痛みが走るが、今は無視。悲鳴を上げる体を、無理矢理に起こす。

「無茶すんな、寝とけ」

「うっさい、見送りくらいさせなさい」

当主が客人を見送らないなんて、そんな馬鹿な話はありえませんっての。

「別にいいってのに・・・・・・」
「人の好意は無碍に扱うものじゃないわよ」
「はいはい」

なんとか頑張って立ち上がる。うわっ、えらい筋肉痛だわ、これ。

「・・・・・生まれたての小鹿か。足がプルプルいってるぞ」
「うっさい」

それどころじゃないのよ、今。

「ったく・・・・・・ほれ」
「ん？きゃっ！」

ぐるりと視界が回る。
壁が天井に。重力が後ろに。
端的に言ってしまえば、抱きかかえられているのだ。

「とりあえずリビングへ行くぞ。後は赤いのに任せる」
「・・・・・・ええ」

抱えられたまま、リビングへ。色々と納得がいかないことはあるが、
そこは大人しく飲み込むことにする。
・・・・・・というか、

「えーと、何があったのかしら？」
「知るか」

リビングの扉を開くと、何故かアーチャーが落ち込んでいた。それ

も、両ひざ両手を地面につける形で。
・・・・・・はい？

■

「あー・・・・・・つまり要約すると、口に合わなかったから罵倒したと」
「ふん、かのように不味い食事を出されたのは初めてだ。ただ肉を焼いただけのほうが幾分かマシだな」
「ちょっ、これのどこが不味いのよ！味覚おかしいんじゃないの？」
「馬鹿を言え。わｔ「ああ、こいつ味覚があやふやだから」っ！」
「味覚障害ってこと？」
「そう、それに近い。と、エレイシア、ちょっと黙っててくれないか？」
「・・・・・・とりあえず立って。アーチャー」
なにやらぶつぶつと呟きつつも、言葉に反応して何とか起き上がるアーチャー。うん、貴方は何も悪くないわ。だから元気を出しなさい。
「連れが迷惑かけた。すまん」

連れのシスターの頭を無理やり下げさせる士郎。あ、脛蹴られた。
「あー、とりあえずその子は？」
目下、一番気になることを訊いてみる。シスターはシスターでもカレンじゃないみたいだし・・・・・・・
「ウチの新人見習いシスターで悪魔憑きだ」
脛をさすりつつ教えてくれる。
あー、なるほど。新人見習いシスターで悪魔憑きかー・・・・・・・
「・・・・・・今、聞き捨てならない言葉があった気がするのだけど？」
主に悪魔憑きとか。悪魔憑きとか。悪魔憑きとか。それが新人見習いシスターとか。
「大丈夫だ。専用の装飾品を身に着けているからな。
そもそも、毒を持って毒を制す方法は珍しくもなんともない」
うーむ、そういうものなの？
「まぁ、極秘事項ではあるがな。安心しろ。暴走しても対処は可能だ」
くすんだ金色の髪と瞳。陶磁器のような、白すぎる肌。小柄な体格。人というよりは、人形みたいなイメージを受ける女の子だ。
「名前はエレイシア。立場としては、俺の補佐役だ」

「補佐役？カレンは？」
「いや、あいつは避難させている」
「初耳よ。このシスコン」
最近見ないと思ったら、なるほど、避難させていたわけね。
「・・・・・・妹の身を案じるのは、兄として当然だと思うが？」
「間違っているとは言っていないわよ」
そう、間違ってはいないわ。上ならば、下の身を案じるのは当然のことだもの。
「・・・・・・まぁ、いい。自己紹介終了。ってことで帰るぞ。すまなかったな、アーチャー」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・返事くらい返しなさい」
「っ！・・・・・・・すまない、考え事をしていた」
「おいおい、大丈夫かよ」
あきれた表情の士郎。
うん、ちょっと私も心配に思ったり。
■

時刻は午前二時を回った。
マスターの就寝を確かめ、屋根の上に上がる。
目的は警備。視力を強化すれば、四方数キロは見渡せる。

「・・・・・・エレイシア、か」

警戒はしつつも、数時間前に訪れた二人のことを考える。
コトミネシロウは、あの少女を監督役補佐と言った。悪魔憑きのシスターでもあると。

「・・・・・・解せんな」

昔、ある出会いがあった。
おそらくは、一秒すらなかった光景。
されど。
その姿ならば、たとえ地獄に落ちようとも、鮮明に思い返すことができるだろう。

「未練がましいな、オレも・・・・・・」

望みは叶わない。とすれば、彼女に逢うことも無い。
似たような人物たちとの邂逅は、この身をずいぶんと揺さぶってくれる。
運のいい自分など、想像するのも難しい。が、ここまでぬか喜びをさせる辺り、世界はオレに恨みでもあるのだろうか。

「まったく。走狗のように使い回し、挙句にこの仕打ちとはな」

遠く、新都に建つ教会を見据える。
つい先日は、混乱のあまり気にも留めていなかったが、コトミネといえば一人しかあるまい。

『・・・・・じゃあな。色々言いたいことはあるけど、アンタのことは忘れない』

ああ、忘れるわけがない。貴様のことは、何があろうと忘れはしない。

「・・・・・さぁ、どう動くか？平行世界のオレ」

意味のない殺生は苦手だが、そうかどうかはオレが決めることだぞ？

第十五話　記憶と相違（後書き）

十五話目。バゼットさんにボコられた凛のその後。

友人から、凛組の扱いがギャグ扱いという指摘を受けました。曰く、もっとかっこよく書いてほしいと。

大丈夫です。後々かっこよく立ち回る予定です。はい。

次話投稿目標も、一週間以内で。できれば、せっかく週末前に終わったので、日曜日くらいを目処に書き上げたいですが・・・・・・いけるか？

ではでは。また次話で。

５／１９　誤字脱字修正を行いました。

第十六話　依頼と条件

コピーとって、お茶汲んで。
いつもと同じコンビニ弁当、家に戻って一人で食べる。
雑多な日々に忙殺されて、気付けば本音を話せる相手なんていない。
たまに帰れば両親からお小言を、かつての友人たちは幸せな日々を。
ただ呼吸するだけの袋、大きな大きな肉の袋。
変り映えのしない毎日。一年三百六十五日八千七百六十時間五十二万五千六百分三千百五十三万六千秒毎日毎時毎分毎秒寝ても覚めてもチクタク

ごりゅごりゅ、ぐちゃぐちゃ、ぎちぎち、じゅりゅじゅりゅ、じゃくじゃく、びちびち

・・・・・・ああ、早く覚めないかな。

■

お天気お姉さん曰く、今日はずいぶんと冷えるそうな。
何でもここ一番の寒さになるらしく、ずいぶんなテンションの高さで、誇らしげにアナウンスしていた。
なるほど。言われてみれば、確かに今日は寒い。室内だというのに吐く息は白く染まるし、目覚めも寒さで起こされた。
だというのに、カソックを羽織って礼拝堂に出ると、ゆらゆらと景色がぼやけて見える。具体的には、一番前の長椅子に座っている顔馴染みのところとか。

「げっ」

別段何も悪いことをしたわけではないのにこんな声が出てしまうのは御愛嬌。何しに来やがったか人間凶器め。

「人の顔を見て、そこまで露骨に顔を顰めるのはどうかと思いますよ」

「無茶言うな」

眉間を揉み、目をこすり、頬を叩く。

うん、何も変わらない。

「あー・・・・・・ずいぶんと早い脱落だな。いったいどうした？」

「いえ、脱落したわけではありません」

「はぁ？じゃあ何故ここに？」

「おや、相棒の顔を見に来た、ではいけませんか？」

「帰れ」

ヒマ人につきあっている時間は無いのです。朝はすることが多いのです。

ってことで、Uターンして住居スペースへ戻る。礼拝堂の見回りは後にして、先に朝食を用意するか。いつもトーストとサラダだけだから、たまにはもう一品追加するのも悪くは無い。

「待ちなさい」

がしっと左肩を掴まれる。ミシミシと音が鳴っているのは気のせいか。いや、気のせいであってほしい。

「うん、分かった。分かったから手を離してくれ。痛い」

壊される前に懇願。如何に慣れているとはいえ、冷たく硬い床の上

で寝るのはもう勘弁。俺とて人間、暖かくて柔らかいベッドで寝たいのだ。

「で、脱落じゃなけりゃ一体全体何の用さ、バゼット」

面倒事の予感しかしないが、痛めつけられるよりはマシか。
神よ、一日の始まりが素晴らしいものでありたいというのは、私には過ぎた望みなのでしょうか？

「報告が一つ」
「報告？」
「はい」

咳払い一つ。
弛緩した空気が、少し締まる。

「つい数時間前に一般人を襲っていた魔術師と交戦、逃げられました」

何のとりとめのない情報。わざわざ報告するまでも無い、こちらの世界ではよくある話。
ただ一つ、不可解な点を挙げるとするのならば、

「逃げられた？お前がか？」
「ええ。大量の蟲を隠れ蓑に逃げられました」

大量の蟲。
その言葉に引っかかりを覚えるが、とりあえず今は置いておく。

「で、本題は？逃げられたことを自慢するわけじゃないだろ」

「はい。交戦した際に、魔術師が名乗った名前が気になりまして」
「名前？」
「間桐、臓硯と」

間桐臓硯。
引っかかっていたモノがストンと落ちる。
なるほど。あの妖怪蟲爺ならバゼットからも逃げられるか。

「襲われた一般人は死亡。後処理の必要もなく、綺麗さっぱりと」
「・・・・・・喰らわれたのか」
「蟲を使役して」

眉間を揉む。朝っぱらから、ずいぶんな報告だ。
最近の行方不明者の元凶は妖怪爺。バゼットが嘘をつくとは思えないし、それは確定事項でいいだろう。
問題は、その対処方法。
親父曰く、アレは最早妖怪。下手な手段では、逆に文字通り喰われてしまうのがオチ。
余計な被害が増える前にどうにかしたいが、如何せん手が足りないのが現状。

「報告は以上です。間桐臓硯を如何するかは、士郎にお任せします」
「じゃあ処理してきて」
「了解です」

・・・・・・あれ？今、何とおっしゃいましたか？

「何をそんな驚いているのですか？おかしなことでも？」
「え、あの、その、こうもあっさり了解されるとは思わなくて」
「失礼ですね。冗談で発言したのですか？」

「いや、本気半分願望半分」
「ならばいいではないですか」
む、確かにその通り・・・・・・なのか？
「本当に討伐してくれるのなら助かるが・・・・・・勝率は？」
「予想される罠、迎撃態勢、魔術師の本拠地であるという危険性。全てを考慮し、成功率は高く見積もって四割ほどかと」
「四割か・・・・・・」
いくら衰退したとはいえ、魔術師の本拠地に攻め込むのだ。むしろ高い方か。
「・・・・・・大丈夫か？」
「おや、心配してくれるのですか。珍しい」
「珍しいって、お前な・・・・・・」
「ふふふ、冗談ですよ」
「む・・・・・・」
「御安心を。無理だと思ったら引きます。その辺りは貴方より心得ていますよ」
確かに、その辺りの経験値は俺よりバゼットの方が上。俺からどうこう言う必要はない。
だが、それとこれとは別。心配なモノは心配なのだ。
「余計な心配はせずに、監督業務に集中してください。忙しいのでしょう？」
魂喰らい。学校の結界。戦闘の後処理。情報操作。
バゼットの言うとおり、為すべきことはたくさんある。

「それでは、朗報をお待ちください」

そう言って、バゼットは踵を返す。
凛然とした立ち振る舞い。余計な心配は野暮だと、そう思えるような後ろ姿。
だけど。それでも。

「・・・・・・バゼット！」
「なんでしょうか？」
「・・・・・・無理だと思ったら、絶対に引いてくれ」

ぱちくり。今度こそ、本当に驚いたような顔になる。

「これは依頼だ。結果云々より、生還を第一優先事項としてくれ」
「・・・・・・依頼と言うのなら、実益が伴わなければいけない気がしますが」
「ぅ・・・・・・」
「まぁ、いいでしょう。それが依頼条件だというのなら、断る謂われはありません」

そう言って、にこやかに微笑まれる。まるで、聞き分けのない子どもをあやすように。
いや、まるで、じゃない。事実その通りだ。
顔が火照る。羞恥心で俺の顔は真っ赤になっているに違いない。自覚したら、余計に恥ずかしくなってきた。穴があったら入りたいという諺の意味を、身を持って思い知る。

「ふふっ、それでは。・・・・・・・ああ、そうそう。依頼だというのなら、成功した暁には食事でも御馳走してもらいましょうか」

「・・・・・・いいのか、そんなんで」
「ええ、構いません。楽しみにしていますよ」

■

教会の外に出ると、すでに陽は山間からその姿を覗かせていた。
魔術師の夜は終わり、いつもの朝が来る。早い者なら、もうすでに活動を始めているだろう。

「ランサー」

聖杯戦争を勝ち残る、今現在のパートナーの名前を呼ぶ。

「今回の作戦ですが、陽が照っているうちに間桐邸を襲撃、壊滅させます」

御三家に関しては、聖杯戦争が始まる以前に調べてある。当然、その本拠地も抑えてあり、いつでも襲撃をかけることが可能だ。

『それがマスターの意向なら、口を挟もうとは思わないが・・・・・・いいのか？』
「何がです？」

『そんな安請け合いをしてだよ』

安請け合いというのは、先ほどの士郎の『依頼』。
いくら調べがついているとはいえ、五百年の歴史をもつ魔術師の工房に攻め込むなど、傍から見れば自殺行為もいいところだ。

「問題は無いでしょう」

だが、そんな問いかけをバゼットは一蹴する。

「私とランサーが組んでいるのですよ。間桐の工房如き、恐れるに足りません」

一切の澱みなく言い切るバゼット。
その表情に、恐怖や焦燥の色は見えない。自らの勝利を確信してやまない、清々しいまでの笑みがあった。

「こりゃあ、今更ながらずいぶんと豪胆なマスターなことで」

霊体化を解き、実体を表すランサー。
その顔には、バゼットに負けないくらい清々しい笑みが浮かんでいる。

「回りくどいのは苦手ですから。敵ならば、討つ。何も問題は無いでしょう？」
「ははっ、違いねぇ」

双方が双方の意志を確認。迷いは無い。恐れも無い。
遠く、深山町の洋館が立ち並ぶエリアの中腹を見定める。

「さ、では行きましょうか、ランサー」

おまけ

「それで、ランサー。作戦名はどうしますか？」
「作戦名？必要か、それ」
「ええ、必要です。これが有ると無しでは、大きく士気に関わります」
「そういうものか？」
「ええ」
「さて、ねぇ・・・・・・思い浮かばねぇな」
「ふむ。では、参考までに。・・・・・・『一匹残らずぶちのめす』とか、どうです？」
「お、いいな、それ。単純明快で分かりやすい」
「でしょう」
「じゃあ、そうだな・・・・・・」

しばし、作戦名に興ずる槍主従。
それにしてもこの二人、ノリノリである。

第十六話　依頼と条件（後書き）

十六話目。バゼットさん、士郎の依頼を受けるの巻。

この十六話目は、もともと六話目辺りで使用する予定の話でした。
主要人物がバゼットさんになったため、大部分は改変しましたが。
それでも、少々面影的なものは残っています。

ラストのおまけに関しては、僕の妄想が爆発した結果です。ＮＧシーンとでも受け取ってください。

次の目標も、一週間以内。
ではでは、また次話で。

第十七話　蟲と果実

「・・・・・・マキリが衰退したというのは、どうやら本当のことのようですね」

間桐邸に張られた結界。その脆弱さに多少驚きつつも、おかげで難なくバゼットは邸内に侵入することができた。

「作戦は話し合った通りです。では」

ストレート一発。ドアを粉砕。

ためらいのない一撃に、ランサーは愉快そうに笑う。

「いいねぇ、宣戦布告ってか」

「まぁ、似たようなものです」

本当は、ただ単に小細工を弄するのが面倒なだけだったが、それをわざわざ口に出すほど吝かではない。

回りくどいのは苦手。単純明快、猪突猛進に一撃必殺。得意技は破壊、崩壊、粉砕、クラッシュ。組む毎に毎度後始末に走らされる、とある見習い神父からの評価である。

「遠慮なく暴れまわりましょうか」

マキリに関係のある人物たちの調査は済んでいる。この時間帯ならば、邸内にいるのはターゲットでもある間桐臓硯のみのはず。

「ふん、厭な臭いが漂ってきやがる」

嫌悪感を隠そうともせずにランサーは吐き捨てる。
それに合わせるようにして、バゼットは邸内を見渡す。
ランサーの言う通り、この家はずいぶんと人を気持ち悪くさせる。
同じ結界でも、張る人物によってはこうも違ってくるのか。身に纏わりつく不快感にバゼットは小さくため息をついた。

「まずは一階から見て回ることにします。くれぐれも油断しないように」
「おいおい、誰にモノ言ってると思ってんだ？」

肩をすくめ、くすりと笑う。
衰退したとはいえ、今二人がいるのは五百年の歴史を持つ魔術師の本拠地。だというのに、その顔に恐れや迷い、緊張の色は見えない。

「リビングから始めましょうか」

直進し、広間へ。一目にも高価だとわかる調度品が並ぶが、邪魔なので気にせず破壊。怪しいと思えるところは解析していく。

「・・・・・・なし」

少なくとも、この部屋に異常はない。
粗方荒らしてそう結論付け、ランサーのほうへ向きなおる。

「おや？」

が、予想に反してランサーはその場にいない。
正確には、室内ではなく廊下にいた。

「どうしたのですか？」

ランサーは上階を見ている。
その顔に、先ほどまでの余裕の色は見えない。

「・・・・・・・・」

わずかに振動する空気。
常人なら感知不可能なわずかな異変も、バゼットならば感知可能。
ついでは、それが意味しようとすることも。
無言で、手袋をはめなおす。

「行きましょう」

短く告げる。先頭はランサー。
自分らの存在など、当の間に気づかれている。
とすれば、こちらの小細工など必要ない。
ターゲットでなくとも、邪魔なら叩き潰す。それだけ。

「・・・・・・っ」

二階に上がると、先ほどまでのよりも強烈な不快感が身を包む。

「臭いは・・・・・・奥からだな」

無言でうなずき、歩を進める。
しばらくは、廊下を行ったり来たり。
だがやがて、一角で立ち止まる。

「ここですね」

ストレート一発。壁にヒビが入る。
もう一発。今度は粉々に砕け飛ぶ。

「・・・ランサー」
「ああ」

現れた通路からは、今までとは比にならない不快感が漂ってくる。
先ほどと同じく、ランサーが先頭でバゼットは後衛。
一段一段、警戒しつつ降りる。
形容しがたい、厭な臭いが鼻を衝く。

ざわざわ
ざわざわ
ざわざわ
ざわざわ

何かが蠢く音。
今更確認するまでもない。
何せ、彼女たちは半日前に対峙したばかりなのだから。

「ランサー」
「あいよ」

蠢くソレを。
這い寄るソレを。
飛びかかってくるソレを。

「a」

炎が飲み込む。

ランサーの口から紡がれた、聞きとり難い呪文。
原初の１８のルーン。その一つ。
陰気で湿った室内にも関わらず燃え盛る炎。
蟲ごときにかける慈悲など、一片たりともあろうはずがない。

「・・・・・この屋敷ごと、燃やし尽くしてあげましょう」
「了解だ」

すべてを飲み込まんと燃え盛る炎。
ターゲットの討伐はまだではあるが、もはやここにいても無意味。
そう思い、踵を返したバゼットの視界に、蟲以外の何かが映る。

「こいつは・・・・・・」

どうやら、ランサーも気が付いたらしい。
見た目は、士郎と同じくらいの少女。
死んでいないのは、わずかに上下する胸をみればわかる。

「っ！」

逡巡は一瞬。
害はないと判断し、抱えて脱出。
炎は勢いをとどめることなく燃え盛る。

一時間後。消防隊員の到着前に、間桐邸は燃え落ちた。

■

「・・・・・・・・・ここは？」

少女は、己の現状に困惑する。
彼女の目に映るのは、清潔感と無機質感を感じる、真っ白い天井。
まかり間違っても、彼女が最後に見ていた光景と同一ではない。

「目が覚めたか」

声のほうを向くと、カソック姿の赤銅色の髪をした少年がいた。

「具合は？」

言われて、確認する。
が、実際には意味のない行為。
心肺停止が当たり前の■■を受けていた彼女にとって、気絶ごとき大した問題ではない。
むしろ問題なのは、いまの現状である。

「・・・・・・ここは？」

今にも消え入りそうな、そんな聞きとり難い小さな声で、再度少女は問う。

「市内の病院だ」

そう言って、近くにあった椅子に腰を下ろす。

「他に訊きたいことは？」

見舞い品であろう林檎の皮を剥く。
するすると、無駄のない剥き方。
途切れることなく皮がとぐろを巻くのを見ながら、少女は気絶する前のことを思い返していた。

「ほれ」

剥き終え、八等分。
ずいぶんと器用だな、と少女は思った。

「さて。目覚めてすぐで悪いが、君には二つの選択肢しかない。教会に保護されるか、冬木市から出ていくか。好きな方を選ぶといい」
「・・・・・・いきなりですね」
「仕方あるまい」

やれやれと、些か大仰に肩をすくめてため息をつく。

「時間は有限でね。出来れば、今この場で決めてもらいたい」

しゃりしゃり。剥いた林檎を一口。
ちょっと待て、それは見舞い品ではないのか。

「・・・・・・・・・・・・」

しゃりしゃり

「・・・・・・・・・・・・」

しゃりしゃり

しゃりしゃり

「・・・・・・・・・・・・」

しゃりしゃり

「・・・・・・・・・・・・というか、実質一択ですよね。その選択肢」

しばし悩み、少年が五個目の欠片に手を伸ばしたところで、ようやく少女は口を開く。

「外部に縁故が無ければね」

気にした様子も無く、五個目を口に。

「・・・・・・じゃあ、やっぱり一択じゃないですか」

ぼそりと呟く。

が、少年に気にした様子はない。

六個目をほおばる。

「それじゃあ・・・・・・お世話になります。言峰先輩」

しゃりしゃり、ごっくん。

「監督役の名にかけて。間桐桜嬢」

第十七話　蟲と果実（後書き）

十七話目。間桐桜、登場。

登場させることは決まっていたのですが、どうにも接点が作り辛くて・・・・・・

最初は、臓硯の命令で教会へ保護という形で潜入。という流れのつもりだったのですが、どうにもしっくりこなくて後回しに。

予定では、六話目か七話目辺りで登場する予定でした。

ランサーの唱えた呪文ですが、ケルト文字表記ができなかったため、普通のアルファベットです。ご容赦を・・・・・・

次話目標も、一週間以内。

ではでは、また次話で。

第十八話　問と応

保護を受けることを選択して、わずか数時間。
間桐桜は、困惑していた。

「・・・・・・・・・これは？」

「修道服だが」

さらりと。何でもないように士郎は告げた。
綺麗に折りたたまれたソレを広げると、なるほど確かに修道服である。採寸も、見た感じではピッタリか。

「先ほど説明した通り、間桐邸は燃え落ちたんでな。今の君は、文字通り着の身着のままだ。
服の一着や二着、無いと困るだろ？」

確かにその通りだ。
桜は納得した。

「一応、学校にも連絡はしておいた。間桐嬢のことは伏せておいたが」

なんで？
その疑問に、士郎は実に簡潔に答える。

「慎二が面倒だから」

ああ、なるほど。
実に的確な理由だ、と桜は思った。

■

『間桐邸が焼け落ちたぁ！？』

耳元で発せられる大声。念のために受話器から耳を離しといて良かった。鼓膜が破れるのは勘弁。

『ちょちょちょどいうことよ！！！』

どういうことも何も、そのままの通りなのだがな。
予測できる面倒事を目の前に、小さくため息をついた。

「今から説明する。ただ質問は一切受け付けない。いいな」

無駄だとは思うが、最初に一応釘をさしておく。
さて、どこから話したものか・・・・・・

「下請けの者から連絡が来てな。本日正午過ぎに出火、ものの一時間ほどで焼け落ちたらしい」

『一時間で！？・・・・・・なるほど』

どうやら落ち着きを取り戻したらしい。電話越しにぶつぶつと何か聞こえるのは、魔術師として思考に耽っている証拠か。

「まぁ、十中八九聖杯戦争がらみだな」

『白昼堂々と行動に移すとはね・・・・・・』

電話越しにため息。いや、呆れかえっていると言った方が正しいか。まぁ、確かに白昼堂々と行動を起こす魔術師は珍しいだろう。俺も、バゼットから報告を受けた時は驚いた。

早い方がいいと思いまして？いや、確かにそうだけどさぁ・・・・・・

『それで・・・・・・被害者は？』

「さてな。遺体が見つかったとの報告は受けていない」

『そう・・・・・・』

蟲爺はいなかった。間桐桜はこの場で保護中。慎二のことは報告に無かったんで、多分生存。一般人に関しては、バゼットがそんな凡ミスをするはずがないので大丈夫。

「後処理は終了。綺麗さっぱり焼け落ちてくれたのが、せめてもの救いだな」

流石に屋敷一つを全焼させるとは思っていなかったが、後処理という点では結果オーライ。余計な手間いらずだ。

「というわけで、セカンドオーナーへの報告は以上だ。じゃあな」

『ちょ、ちょっと待って！』

予想通りというか何と言うか・・・・・・はぁ・・・・・・

「質問は受け付けないと最初に言ったが？」
『一つだけよ！ケチケチしない！』
常時金欠病の守銭奴が何を言うか。
とはいえ断ると面倒なので、一つだけという言葉を信じてやることにする。

「一つだけな。それで？」
『・・・・・本当に、誰も死んでいない？』
「最初に言っただろ。遺体は見つかっていない、と」
『そ、それはそうなんだけど・・・・・』

妙にはっきりしない言動。
何かが引っかかるが、それに思考を割いていられるほど、時間に余裕があるわけではない。

「悪いが、こっちも他にやらなきゃいけないことがあるんでな。切るぞ」
『え、あ、うん・・・・・』

一応の了承を得てから切る。
首を回して、軽く一伸び。

「あ、あの・・・・・」

背後からの声。
振りかえると、間桐桜がいた。

「い、今電話していた人って・・・・・その・・・・・」

もじもじ、おどおど。
続きの言葉が出てこない。
「・・・・・遠坂凛、冬木市のセカンドオーナーだ。間桐家ならば知っていることだろう」
仕方ないので先に言っておいてやる。待っていたら、多分数十分くらいかかる。
「さすがに間桐邸のことは報告しないと拙いんでな。・・・・・・ああ、そうそう間桐嬢のことは何も言っていない。質問攻めにあうことは、おそらくはない」
矛先は、向かっても慎二か俺だ。
もっとも、あいつが間桐邸をそこまで気にかけるとは思わないが。
「そう・・・ですか・・・・・・」
安心したような、残念なような。そんな声色。
「はいはい、そんなことより保護中の注意事項を説明するぞー」
パンパンと手を叩き、どうにも微妙になった雰囲気を変える。
説明しとかないと色々と拙いものがあるですよ、この教会。

■

リビングの扉を開けると、何故かポテチ片手にくつろいでいるサーヴァントがいた。

「む、どうしたか。シロウ」

視線に気付き、首だけ動かすセイバー。

色々と突っ込みたいところはあるのだが、とりあえずスルーする。

「零時過ぎに、柳洞寺へ向かう。ターゲットはキャスターだ」

簡潔に、内容を伝える。

「・・・・・・ふむ、ついに仕掛けるか」

「さすがに、このまま放っておくのは拙いんでな」

新都の魂喰らいは、キャスターの仕業。

一級霊地の柳洞寺に拠点を構え、日夜せっせと魔力をため込んでいるのは分かっている。

「余計な手間がかかる前に潰す。いいな」

「断る理由がなかろう」

フッと。皮肉気な笑み。

攻め込むことを意識してか、微妙にセイバーの体から魔力が漏れ出

る。
だらけっぷり全開な恰好ではあるが、やる気はあるらしい。

「ところで、シロウ」
「何だ？」
「ポテトチップスはこれで終わりか？」
「・・・・・・・・・・」

■

「先輩」
「お、ちょうどいいところに来たな、間桐嬢。ほら、選べ」
呼びに行こうとしたら、いいタイミングで間桐嬢が来てくれた。
さっそく、手元にあったチラシを渡す。
「・・・・・・これは？」
「夕食」
今日の夕食はピザ。もちろん、デリバリー。料理する余裕などありません。

「くっ、シロウ！三枚だけとは酷いぞっ！」

先ほどから唸りつつ、中々三枚目を決められていないセイバーさん。教会の資金は、基本お布施や寄金で成り立っているので、余計な無茶は出来ないのです。

「ほれ、間桐嬢もさっさと選べ。時間は有限だ」
「あ、はい・・・・・・では、マルガリータで」
「サイズは？」
「Mで」
「了解」

チェックをつけ、クーポン券の内容を確認。ふむ・・・・・・

「エレイシア、もう一枚追加していいぞ」
「なに！本当か！では、これとこれだっ！」

どうやら、二択までは絞っていたらしい。すんなりと決まった。

「うーっし、じゃあ頼むぞー」
「うむ」
「はい・・・・・・あ、先輩、これ」

渡されたのは、一枚の伝票。
なんとなく嫌な予感がするのは気のせいか。

「あー・・・・・・悪い、代わりに注文しといてくれ」

メモ帳を間桐嬢に渡し、急いで裏口へ。

「はいはいはーい、お待たせいたしましたー」
業者から荷物を受け取る。細長く、妙に重たい。
おそらくは、前に頼んでおいた一品だろう。
「ったく、他に方法はあるだろうに・・・・・・」
一応、いくつかの術式が内蔵されている辺り、神秘の秘匿を最低限守るつもりはあるよう。宅配業者を利用する時点で、あくまでも最低限のみだが。
「先輩、それは？」
「魔術礼装だ。特注のな」
予定では聖杯戦争前に届くはずだったが、遅れたところをみるに、余計なオプションをいくつも追加したに違いない。正直、開けるのが怖い。
「魔術礼装？でも、先輩は教会の人じゃあ・・・・・・」
「そうでもあるし、そうでもない」
「？」
「正式登録されてないんだ、俺」
親父が教会への報告を怠っていたため、俺の教会内での立場は微妙なところがある。
あくまでも、『言峰綺礼の代理』というのが正しい。
「まぁ、何事も使えるに越したことは無いだろ？」
特に俺の場合、能力が一方向へと限定されているため、使える手数

は何であれ多い方がいい。

「それじゃ、ちょっくら引きこもってくる」

荷物を持って、地下の工房へ。

さてさて。今回の品は、一体全体どんなものやら・・・・・・

■

同時刻。

冬木駅前。

「二週間ぶりですね」

「ええ。お元気でしたか？」

「ぼちぼち、といったところね。それで、場所はどこですか？」

「僕が所有しているマンションで。教会にも近いですよ」

「そう、それはよかった。兄さまが知ったら、絶対に反対するでしょうから」

「・・・・・・僕も、本当は反対なんですけどね」

「私は秘密裏に兄さまの手伝いをするために来たのです。

大丈夫、危険ごとに自ら首を突っ込むつもりはありません」
「・・・・・・まったく説得性がないですけどね・・・・・・はぁ・・・・・・」
「ため息をつくと幸せが逃げるわよ、ギル」
「・・・・・・誰のせいだと思っているんですか、カレン」

第十八話　問と応（後書き）

十八話目。内容はまったく進んでいません。説明回。

スランプなのかどうかは分かりませんが、どうにも上手く書けなくて困っています。以前ほどすらすらとは進まない・・・・・・文を書くって、想像以上に難しいモノなんだな、と。改めて思い知らされています。

もしかしたら、気晴らし代わりにまた短編を書くかもしれません。その時は、是非一読していってください。

次話投稿目標も一週間以内。
ではでは、また次話で。

第十九話　見習い神父と蟲翁

暗く、月明かりすら雲に覆われた夜。
間桐桜は、身動ぎ一つせずに窓の外を眺める。
その視界に映るは、何の変哲もない夜の一風景。
だが、飽きもせずに桜は眺め続ける。
一時間経とうとも、二時間経とうとも。
風景は変わらない。何も変わらない。

「あ・・・・・・」

呟きが漏れる。
視線の先には、一組の人影。
暗闇に慣れた彼女の眼には、それが誰であるかの判別など容易。

「何故・・・・・・」

それは、愚問。
呟いてから、改めて桜は思い返す。
そういうものなのだと。
これは、そういうものなのだと。

「・・・・・・・・」

思い返すは、数刻前の晩御飯。
久々の、暖かな食事。
薄れた、過ぎ去りし団欒。
かつて、■■家で当たり前のように享受していた日々。
彼らがどこへ行くのかは知らない。

それは、間桐桜の知ったことではない。
だがそれでも。

「・・・・・・・・・」

言葉は声と成らない。
だが、口は言葉を象った。

■

午前一時を回った深山町。その柳洞寺の参道が手前。

「・・・・・・やってくれる」

中に入っていないにも関わらず、あふれ出る魔力を感知できる。
もしかしたら、行動は遅かったのかもしれない。士郎の頭にそんな考えがよぎるが、すぐに破却。くだらない思考に絡めとられている場合ではない。

「いけるか？」
「無論」

交わすは短い応答。だが、それで疎通は十分。
あふれる魔力をブースト。
両足に強化と、刻んだルーンを起動。
二つの黒い弾丸が、長い参道を全速力で駆け抜ける。

「あいや、待たれよ」

言葉と同時に、剣戟。鈍い、鋼同士がぶつかり合う音。
神速とも言えるその閃きを、何の危なげなくセイバーは受け止める。

「ほう・・・・・・」

自らの剣戟を受け止めたことによる驚きか。門番の顔が、愉快そうに笑みを象る。

「アサシンがサーヴァント、佐々木小次郎」
「・・・・・・・・・」

クラスはおろか、真名すら曝け出したアサシンに対し、セイバーは無言で剣を構える。
その姿はカモフラージュ用の修道服ではなく、闇より黒き漆黒の騎士姿。
冷たい双眸が、バイザー越しにアサシンを射る。

「死合に余計な口はなし、か・・・・・・ふっ、確かにその通りよのう」

だが、そんな威圧など受け流し、どこまでも飄々とした調子のアサシン。
構え方も、セイバーが王道ならば、アサシンは邪道。脱力したよう

な、一見すれば隙だらけとでも見てとれる構え方だ。

「それでは・・・・・・いざ尋常に、死合おうか」

その言葉を皮切りに、両者の剣戟が音を奏でる。
セイバーの剣を『力』とするのなら、アサシンの剣は『技』。
歴史上あり得るはずのなかった、東西最高峰の剣士同士の戦いが、
幕を開けた。

■

（アサシン、ね・・・・・・）

苦々しげにアサシンを見やり、臍を噛む。
自分といい、蟲爺といい、今回はイレギュラーが多すぎではないか。
報告書類の改竄と、これからの情報操作という面倒事に、士郎は頭
を抱えてのたうち回りたい衝動に駆られる。

「後腐れなく、ここで潰せりゃあ楽だが・・・・・・」

まぁ、無理だろうな。セイバーには聞こえぬよう、後半の部分は内
心で呟く。

目の前で行われている剣戟は、二人の技量をそのままに顕している。楽には勝てない。むしろ、純粋な剣の腕前ならば、アサシンの方が上だ。

（さてさて、どうするか・・・・・・）

出発前の作戦では、セイバーの対魔力を盾に力押しでとっとと決めるつもりだった。だが、こうも腕の立つ門番がいてはそれもままならない。

キャスターの恐ろしさは、クラスが指し示す通り、その魔術の腕前。如何にセイバーの対魔力がBといえど、ため込んだ魔力を一斉放出されればひとたまりも無い。

「・・・・・・・・・ふぅ」

思考をクリアに。現状の正しい認識。最善の手を模索。

ルーンを刻み込んだ手袋を着ける。柄に魔力を通して黒鍵を具現。

身体を強化。

地面を踏みしめる。生じた力を腕へ。体はカタパルト。一直線に投げ穿つ。

鉄甲作用。純粋な体術のみの投擲術。

決闘の流儀や、騎士の誇り。そんなのよりも、目的遂行の方が重要。

ためらいも無くアサシンに向かって一直線に投擲された黒鍵は、だがしかし、僅かに体を後方へと引かれるだけで、当たることなく綺麗に避けられた。

「些か無粋ではないか、其の者」

意識はセイバーに、だが口調は士郎を捉える。

「仮にも死合。余計な手出しは遠慮を願いたい」

「同感だな。騎士として、一騎討ちを受けた。いくらマスターといえど、余計な手出しは無用だ」

両者からの宣告。そして切り結び。

火花が飛び散り、鈍い音が響く。一進一退の攻防は、華麗な剣舞に。見定めるは、己が目の前の剣士。不敵な笑みが両者の顔に浮かぶ。

「・・・・・はいはい、俺が悪ぅございましたよ」

一方、完全に蚊帳の外扱いとなった士郎は、やれやれと言いたげに首を振り、その場に腰を下ろす。

作戦は伝えた。不承不承ながらもセイバーは了承した。突撃前にも確認した。

問題があったとすれば、目の前の侍一人。騎士道精神もいうのか、決闘の流儀というのか。セイバーがソレに触発されてしまったのは、もはやしょうがないこと。

だから、待つ。貴重な令呪を、此度如きに易々とは使えない。

（ま、なるたけ今回で潰しときたかっただけだしな）

今のところ、魂喰らいによる死傷者は出ていない。

酷なことを言えば、これは今すぐにでも討たなければならない事項ではないのだ。むしろ、未だ潜伏中である間桐臓硯や、学校に仕掛けられたままの結界の方が危険度は高い。

今回キャスターを優先したのは、後々の面倒さと、潜伏場所の特定ができたからに過ぎない。

（さて、どう出ることやら）

アサシンはセイバーに任せる。ならば、士郎がすることはキャスターへの警戒。
遠見で現状がバレているのは確実。自身を中心に最低規模の、しかし細やかな結界を張り、来るべき時を待つ。

（・・・・・・む）

風に乗り、僅かな異臭が鼻を衝く。
湿気を含み、身に纏わりつくような不快感を乗せた腐臭。
それが意味することに、士郎は大きくため息をついた。

■

「で、何の用だ。妖怪糞蟲爺」
「カカカッ、年配者への配慮がなってないのう」
「人間にはするさ」

不快感を一切隠そうとはせず、士郎は目の前の老人に悪態をつく。
苦々しげな表情は、これからの面倒事に対する懸念か。敵意はおろか、殺意すら隠そうとせずにぶつける。

「おお、怖い怖い。老体には堪えるのぉ」
「ほざけ、とっとと死ね」
士郎からすれば、こんな世間話をするために来たのではない。それに、例えどんな状況であろうとも、目の前の蟲とは未来永劫友好的な関係を築きはしない。それくらいなら死んだ方がマシとまで思っている。
「で、何の用だ？用が無いならさっさと死ね。今ならサービスで一片残らず殺してやる」
「これこれ、そう先を急くこともなかろうが」
「５００年も生きている蟲が何をほざく。死ね」
取り付く島も無いとはこのことか。いちいち死ねと連呼するあたり、毛嫌いというよりは嫌悪しているのが見てとれる。
だが、間桐臓硯に気分を害した様子は見受けられず、むしろ楽しそうに笑うばかりであった。
「カカカッ、よもや言峰の子倅がマスターとして参戦しとるとはのぅ」
「はっ、お山の引きこもりの駆除に手伝ってもらっているだけだ。俺のじゃねぇよ」
「言葉も言いようよ」
ニタリ。その笑みに、士郎の視線が一層鋭くなる。
「見たところではセイバー、かのう。羨ましい限りよ、最優を引き当てるとは」
「ほざけ」
「そう、つれな――――――」

言葉は最期まで続かない。
士郎の振るった黒鍵が、臓硯の首を切断する。
ボトリと音をたてて落ちた首は、しかし愉快そうに笑う。

「カカカッ！力に訴えるとは、主も短気よのう」
「黙って駆除されろ。あと本体はどこだ」

火葬式典の呪刻を施してある黒鍵で、首と胴体を焼き払う。逃げようとする蟲共も、踏みつぶし、切り払い、串ざす。
だが声は止むことなく、士郎の耳朶を打つ。

「嫌われたものよのう、儂も」
「アンタを好きになる奴なんざ、この世に存在しねぇよ」
「辛辣じゃの。儂はこれでも主の事を好いておるぞ？」

その一言に、士郎は体をブルリと震わす。

「ほう・・・・・御老体はよっぽどこの場で死にたいと言うか」
「カカカッ、これは手厳しい」
「風葬式典でカラッカラに乾燥さてやろうか？」
「カカカッ、カカカカカッ！！」

カカカッ。木々に反響し、増幅されて辺りに反響する。
耳障りしかしないその声に、士郎はうっとうしそうに顔を歪めると、目の前の木に黒鍵を突き刺した。
本体が見つからないのならば、いっそのことこの山ごと焼き払おうか？そんな物騒な考えが脳裏に浮かぶ。

「・・・・・そうそう、最後に一つ言っておかねばのう」

「死ね」
「そう邪険に扱うものでなかろうて、カカカッ！！」
さんざん笑ったところで、ふとその雰囲気が変わる。
例えるのなら、獲物を前に品定めをするような、そんな感覚。
「孫のことを、桜のことを頼んだぞ。あやつは戦うことが嫌いでのう」
「ほざけ」
「カッ、カカカッ、カカカカカッ！！！」
最後の最後まで愉快そうな笑い声。
気配が去った後も、耳の奥に笑い声が響き残り、身に纏わりついた不快感も消えない。
舌打ち一つ盛大に鳴らし、懐から煙草を取り出す。体の外側だけでなく、内側までその腐臭に侵されたような感覚。吐いて全てを戻したかったが、煙草で我慢することにする。
火をつけ、吸い、吐く。流れるような手慣れた動作。
境内から轟音が響き渡ったのは、その直後のことだった。

第十九話　見習い神父と蟲翁（後書き）

十九話目。上手く纏められなかったので、残りは次話持ちこし。

前話で届いた魔術礼装のお披露目とか、概念武装の所在とか、色々と考えてはいたのですが、全部詰め込んだらやたらとカオスな話に。昼寝後、慌てて改正。徹夜、よくない。眠い時は寝ましょう。

この後の予定は、徹夜続きのノリで投稿してしまった番外編の修正。一時のテンションに流され、ロクな修正をくわえていないまま投稿してしまいました・・・・・・orz

次話の投稿目標も一週間以内。

ではでは、また次話で。

第二十話　泥と蛇（前書き）

前二十話は、自分の知識不足で矛盾点の多い話となってしまいました。
というわけで、二十話改訂版です。

・・・・・・今度は大丈夫・・・・・・・・・・・かな？

第二十話　泥と蛇

明日の喜びは、明日の自分のもの。
明日の怒りは、明日の自分のもの。
明日の哀しみは、明日の自分のもの。
明日の楽しみは、明日の自分のもの。

明日の祈りは、明日の自分のもの。
明日の悩みは、明日の自分のもの。
明日の労苦は、明日の自分のもの。
明日の心配は、明日の自分のもの。

明日の愛は、明日の自分のもの。
明日の罪は、明日の自分のもの。
明日の穢れは、明日の自分のもの。
明日の裁きは、明日の自分のもの。

明日の道は、明日の自分のもの。
明日の真理は、明日の自分のもの。
明日の戒めは、明日の自分のもの。
明日の命は、明日の自分のもの。

明日の自分は、明日の自分のもの。

さぁ、今を生きよう。

■

「なんだってのよ・・・・・・もうっ！！」

雄叫び。振るわれる暴風。圧倒的な力。
目に映るものすべてを破壊せんと振るわれる斧剣を、しかしアサシンは器用に流し、あまつさえ反撃に転じる。
無骨な巨大な斧剣と長さ五尺余りの長刀が奏でる、力の一撃と技の連撃。
一見すれば互角なその勝負だが、水晶玉から遠見をしているキャスターには、その戦いを観戦している余裕はない。

「なんで・・・・・・なんでアイツがここにいるのよ！！」

視線の先には、鉛色の巨人。
忌々しげに歪む彼女の表情からは、嫌悪と恐怖が見てとれる。

「どうにかしないと・・・・・・どうにかしないと・・・・・・」

キャスターのクラスは、最弱と揶揄されるほど不利なクラス。聖杯に嫌われているのではないか、と邪推するほどに恵まれていない。
誰だかは知らないが、こんなシステムを考案した大馬鹿者には、お

礼にありったけの魔術をぶち込もう。いつかに復讐を誓い、表へ出る。

「ええい！なんて忌々しい筋肉ダルマッ！！」

空中浮遊、よく相手を狙える定位置へ。羽を広げるように魔術式を展開。作戦内容は、拠点防衛と敵の迎撃。砲撃準備完了。言霊一つで、いつでも発射可能。もちろん砲撃なんて生易しいものでは無い。レールキャノンの呼称の方が向いている。チャージする時間は必要ないが。

「吹き飛びなさい！！！」

必滅を約束するような、Ａランク相当の魔砲が放たれる。それも複数発。

狙いは、山門で小競り合いをしていた三体全員。手加減などしない。三体纏めて無に帰す。

「■■■■■――――――！！！」

「ふっ！！」

だが、そんなキャスターの願望は、あっさりと切り捨てられる。

咆哮一つ。その巨体を広げ、可能な限りの魔砲を防ぐバーサーカー。魔力を放出し、同じく出来うる限りの魔砲を防ぐセイバー。

余波が周りを破壊するも、彼らの背後に被害はない。

「っ！ええい！！」

もう一度。タイムラグ無しでの連続砲撃。

だが同じように、いや、今度はバーサーカー一体に止められてしま

う。

「無駄よ。バーサーカーに、同じ攻撃なんて効かないんだから」

幾分か楽しそうな、イリヤスフィールの宣告。

絶望感に染まりそうになるのを、何とかギリギリのところで耐える。

引くわけにはいかない。一つの想いが、キャスターを奮い立たせる。

ここで引くわけには、絶対にいかない。

（時間が・・・・・・時間があればッ！！）

数瞬で良い。僅かにでも意識が別のところへ向けば、次の手を打てる。この状況を打破できる。

無駄と宣告されながらも、思考時間確保の為に魔砲を撃ち続ける。

バーサーカーには効かないようだが、後ろに隠れているマスターには効く。セイバーは、魔力放出で対抗しないと防ぎきれない。アサシンは我関せず。

（というか・・・・・・なにをやっているのよ、あの役立たずは！！）

姿の見えない門番。魔砲で吹き飛んだわけではないのは、令呪がまだ生きていることで確認。ラインも開いている。

『アサシン！何をやっているのよアナタは！！』

『隠れておる』

『ええい、そういうことを訊いているんじゃないわよ！！！仕事は！？門番としての仕事は！！？』

『興が乗らぬ』

『そういう問題じゃないでしょう！！』

『・・・・・・そうわめくな。耳が痛い』

心底迷惑そうな言葉。
もっとも、足止めついでに殺されかけた身分からすれば、傍観を決め込んでいる時点でむしろ感謝して欲しいくらいである。

『手を休めれば、瞬く間に戦況は傾くか・・・・・・いやはや、じり貧とはこのことか？』
『・・・・・・詳しい説明をどうも。そんなことより、早く私を助けなさい』
『断る。召喚の際にも言ったが、女の命令で戦うのは性に合わん。女狐ならば尚更よ』
『・・・・・・じゃあ、召喚の時と同じようにするべきかしら？』
『せいぜい抵抗はさせてもらうがな』
『そう・・・・・・なら』

「アサシン！『この状況を打破しなさい』！！」

キャスターの腕が淡く光る。それが意味すること、それすなわち。

「え？」

その場にいる全員の意識がキャスターから逸れる。
待ち望んだ瞬間。
呪文を唱え、空間転移。

後のことなど、知ったことではない。

■

「おーおー、派手にやっておられることで」

放たれる魔砲。己が身体で受け止める益荒男。魔力放出で対抗する黒騎士。
神話の再現と創造。見るもの全てを魅了するような、そんな人智を遥かに超えたその争いを、しかし士郎は見届けることをしない。

「――――set」

観戦していた木のてっ辺から地上へ。猫のようにしなやかに地上へと着地。もちろん身体強化は忘れていない。
懐から自身の髪の色と同じ赤銅色のロザリオを取り出し、祈るように胸に押し付ける。その姿は、見習いとはいえ流石は聖職者だと頷けるもの。

「――――gloria」

その言葉は誰のモノか。その言葉は誰の為のモノか。
雲の切れ間から僅かに覗く月明かり。その下、いっそ神秘的ともいえる佇まい。吹く風がカソックを揺らす。

「――――――――gloria」

もう一度。静かに言葉を紡いでから、懐にロザリオを戻す。
讃えの詞。主への賛辞。栄光あれ。

Gloria, in excelsis Deo.

■

「・・・・・・始まったか」

静かすぎる部屋の中。胸騒ぎか、虫の知らせか。葛木宗一郎は感じる違和感に疑念を覚えつつ起き上がる。

「キャス・・・・・・」

声を掛けようと隣を見れば、いるはずの相手がいない。
いるはずの相手がいない。たったそれだけの違いから、疑念は確信へ。一切の澱みなく行動を開始する。

まずは寝巻から普段着へ。いつものスーツ姿へと身を変えつつ、教えられた念話でキャスターとコンタクトを取ろうとする。だが、反応は無い。魔術的なことについては一切合財無知であるがゆえに原因は分からない。ゆえに、すっぱりと念話でのコンタクトは諦める。必要最低限の物のみを手にし、キャスターを捜しに部屋を出る。かけた時間は一分にも満たない。
二年も過ごせば、いくら広大な敷地内であろうとも間取りは頭に入っている。勘という不確定要素に従い、おおよそ今現在キャスターのいそうなところを見て回る。

「あとは正門のみか・・・・・・」

ある程度アタリをつけていたところは見て回った。とすれば、残りは回り回って自室か、残された正門以外にない。
自室に戻るのは一番最後。何も無ければよいが、胸騒ぎがそれを否定する。足早に、正門へ。

「・・・・・・・・・・」

ピタリと。その場で足を止める。
目を閉じ、開く。拳をほどき、再び固く結ぶ。鼓動が、若干その心拍数を上げる。

「・・・・・・何用だ」

振り返りはしない。する必要が無い。する手間が惜しい。
余計な思考は隅に置く。思考はクリア。背後にいるであろう人物に意識を割き――――
――――直感に任せ、体を庭へと投げ出した。

僅かに遅れて、先ほどまで宗一郎がいた場所を何かが通り過ぎる。が、それを視認する間はない。回避のみに専念した回避。完全に後手。勢いそのままに左手で地面に触れ、器用に一回転して背後へと身体を振り向ける。

――――すでに襲撃者は行動に移している。

体勢はまだ整っていない。十分に勢いを乗せた蹴りが、宗一郎を襲う。それを身をよじって回避。無茶な回避行動に身体が軋みを上げる。だが、まともに食らうに比べれば軽微。

――――直後、身体を襲う衝撃。

強烈な何かが宗一郎の体を襲う。耐えることはせず、そのままころがる。腹部に残る重い感触。衝撃は幾分か逃がしたが、ダメージは身体に留まっている。何事も無かったかのように立ち上がるが、あまり状況は良いとは言えない。
しまった。珍しく、宗一郎は己の愚行を悔やむ。

「・・・・・・一筋縄ではいかないか」

つぶやき、襲撃者は前へ。
迎え撃つように、宗一郎も構える。

「っ！」

先の攻撃は宗一郎のもの。奇妙に撓る左が、襲撃者の前進を阻む。まずは牽制。足を止めた間に、バックステップで距離をとる。彼我の距離は、おおよそ五メートル。離れすぎず近すぎず。無理に攻勢

に出る必要はない。まずは鈍痛からの回復を優先する。

「――――ｌｉｆｔ　ｕｐ　ｔｈｙ　ｖｏｉｃｅ」

だが、その間を襲撃者が与えるわけがない。
距離を詰められ、牽制。再び距離をとる。

「ｐｒａｉｓｅ　ｈｉｍ　ｗｉｔｈ　ｓｉｎｇｉｎｇ」

三度目。先ほどまでと同じく正面から。
攻めにはまだ出ない。守り主体の牽制の左。

――――弾かれて、当身。

ただの当身とは思えない衝撃。わずかに泳ぐ体。露呈する隙。

――――見逃すはずがない。

再び密着、鳩尾へ肘。威力が乗る前に右で穿つが、会心とは程遠い一撃。
苦悶に声を漏らすが、それは相手も同じ。好機とみなし、守勢から攻勢へ。

「ｐｒａｙ，　ｔｒｕｓｔ，　ｂｅｌｉｅｖｅ　ａｎｄ　ｂｅ　ｏｆ　ｃｈｅａｒ」

撓る左、穿つ右。所見では絶対的に見破られるはずのない魔拳を、しかし襲撃者は捌く。

「ｌｅａｄ　ｍｅ，　ｌｅａｄ　ｍｅ，　ｌｅａｄ　ｍｅ」

一合、二合、五合、十合・・・・・・

必殺の意は悉く捌かれ、いなされ、弾かれ。必殺の意を悉く捌き、いなし、弾く。

「Ｆｅａｒ　ｔｈｏｕ　ｎｏｔ，　ｆｏｒ　Ｉ　ａｍ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅｅ．
Ｂｅ　ｎｏｔ　ｄｉｓｍａｙｅｄ，　ｆｏｒ　Ｉ　ａｍ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅｅ」

拳同士が穿ちあい、互いの右手が宙を泳ぐ。

「――――ｂｅ　ｎｏｔ　ａｆｒａｉｄ」

体勢を整えなおしたのは両者同時。踏込も両者同時。放たれたのも両者同時。

――――ただ一つ、違う点を挙げるとするならば。

「――――――――Ｌｏｒｄ　ｉｓ　ｗｉｔｈ　ｔｈｅｅ」

数瞬前の光景の再現。打ち合い、音を立てて宙を泳ぐ右拳。

――――それが最後の攻防。

■

「・・・・・・ギリギリか」

宗一郎が倒れ伏し動かなくなったのを確認すると、士郎はようやく安堵の息を吐いた。

同時に、音を立てて割れた認識阻害の魔具。役目を果たしたと言わんばかりのタイミングに、士郎は顔を顰める。まだ完全には終わったわけではないのに。

「すいませんね、本当に」

別に宗一郎がマスターであるという確信があったわけではない。だが、状況証拠は揃っていた。

もし無関係だったというのなら、自分の運の無さを怨んでくれ。もしくは、こんな迷惑極まりない大祭典を企画した阿呆どもを。

「・・・・・・Ａｍｅｎ」

陳腐な言葉。思わず呟いてしまったことを、薄く笑って自嘲する。少なくとも、平然と禁忌を犯している自分が言う言葉ではない。

「――――ｓｅｔ」

懐から黒鍵を取り出す。火葬式典の呪刻が刻まれているモノ。

くだらない余韻に浸るにはまだ早い。迅速に証拠の隠滅を――――

「――――なにをしているの」

構え、振り上げた状態で、指一本として動かなくなった体。
詰んだか。あまりのタイミングの悪さに、もはやため息すら出ない。

「・・・・・・見ての通りだよ、こんちくしょう」

第二十話　泥と蛇（後書き）

・主な変更点は、キャスターの山門から空間転移後全部。

・作中の士郎の呪文は、讃美歌や聖歌から繋ぎあわせで造った造語です。変なところがあれば、ご指摘お願いします。

・葛木対士郎で士郎が優勢なのは、士郎が蛇の使い手と戦闘経験があるのと、キャスターの強化がなかったから。改訂後は本文中に説明が入っていなかったため、この場で補足を。

第二十一話　真意と目的

「一応お礼は言うわ・・・・・・ありがとう」
「礼にはおよばん。急ぐがよい」
「言われなくたって。じゃあね、まだ死んじゃ駄目よ」
「言っておれ。ここで屍を晒すつもりなど、毛頭もない」
「ふん。・・・・・・行くよ、バーサーカー」

「まったく・・・・・・これだから女狐は好かん」
「災難だな、道化」
「辛辣な言いぐさだが、否定はできぬ」
「ふん・・・・・・構えろ。介錯くらいはしてやろう」
「是は是は・・・・・・では、付き合ってもらおうか」

■

――――ひどく、気分が悪い

こんな時は酒に限る。嗜む趣向は無いが、ちびちびと杯を傾けるの

も――――たまには悪くない。密かなストレス解消法。滅多なことではしない。
教会の倉庫に蓄えられてある高級酒に想いを馳せ、士郎は気だるげにため息をつく。

――――ラブロマンスは苦手だ

物語だからこそ映える設定。現実のソレは只の自己陶酔の塊。
今ここで首を刎ねれば、何を感じさせる間もなく逝かせることができるだろう。空間固定さえなければ、一太刀の下に終わらせられるのに。
黒鍵を振り上げたまま、指一本として動かすことのできない今の状況が憎々しい。

――――さて、どうするか

これほどの高位の術。士郎に対抗する術など、あるはずがない。
士郎が未だ生きていられるのは、キャスターの注意が向いていないからこそ。少しでも向いていたら、あの魔砲で消し炭にされている。
打つ手なし。少なくとも、士郎自らの力のみで打開することは不可能。

――――ま、無ければ余所からもってくるだけだが

確かに動けない、が、それだけ。血は流れているし、呼吸もできる。
心臓だってちゃんと動いている。魔術回路だって働く。
意識を戻せば、未だ呆然自失としたキャスター。敵を前に無防備な姿を晒しているのは計略か、それとも素なのか。どちらにせよ、今しか機会は無い。
とすれば、即断即決。令呪に意識を集中し――――

「■■■■■――――――！！！」

咆哮が、大地を揺るがす。
視線をずらせば、闇夜に浮かぶ巨体と武骨な斧剣。

――――――拙い

振り被るその体勢。それが意味することを余すことなく正しく理解すると、士郎は咄嗟に全身に強化をかける。

「やっちゃえ、バーサーカー！！」

無邪気で残酷な宣告。放たれる音速の斧剣。
それは寸分違わず狙い通りの的へと向かい。

大音量を持って着弾した。

■

――――驚きました

人気のない、寂れた農村。

――――全滅かと思いきや、まだ一人生き残っていたとは

暴走した実験。露呈した神秘。予想を遥かに超越した結果。

――――詳しい話を聞きたいところですが・・・・・後にします

未だ蠢く、かつて生きていたモノ。

――――先にこちらの用件を終わらせましょう

何の感慨も見せず、未だ動くソレらを的確に仕留めていく、法衣姿の女性。

――――とりあえず・・・・・動かないでいてくださいね

黒鍵を振るい、投擲するたびに倒れ積み重なるソレ。

――――生きていたければ

それは月の綺麗な、ある夜の出来事。

■

「・・・・・・・・生きているのか」

霞みかかった視界。感覚の薄れた体。今にも手放してしまいそうな意識。

夢か現か。何もかもが不明瞭ではあるが、自分が生きているということ、それだけは確信できた。

「これも特訓のおかげかな・・・・・・」

今思えば、それはどれだけ稀有なことだったのか。

教えられたことは、ただ一つ。投擲された黒鍵が身を貫いても、振るわれた刃が四肢を斬り離そうとも、銃器が身を蹂躙しようとも。ただ、生き延びる。求められたのは、『対抗』ではなく『回避』と『逃走』。

死に瀕するまで続き、治療が終われば再び同じことの繰り返し。休む暇はおろか、睡眠や食事の時間も与えられない。文字通り、死の直前まで追い詰めての特訓。

「・・・・・・ほんと、よく生きていたよ」

思い返して、身を震わす。『考えるな、感じろ』を地で行く特訓方

法は、確かに士郎を大きく成長させた。数多の任務に綺礼の代理（勿論、無許可）として行かされても、大概は無傷で生還できた。今もこうやって生きていられる。
・・・・・・代わりに、拭うことのできない何かを内面に刻まれた気もしなくはないが。

「ぐ、ぅぅ・・・・・・」

思考がわき道に逸れている間に、痛みを感じるくらいには回復したらしい。僅かに動かしただけで、全身が激痛を訴える。実に恐ろしき特訓の成果。
すぐ側の木に身を預け、乱れた呼吸を落ち着かせる。まずは現状把握。行動指針はそれから。

「同調（トレース）、開始（オン）」

人体損傷率、１５％
蓄積ダメージ率、４０％
蓄積疲労率、６０％
魔術回路損傷率、２０％
魔術回路疲弊率、４０％
総魔力残量、２０％

脳裏に表示された情報に、密かに安堵の息をつく。思っていたよりも軽傷。特訓時に比べれば、この程度どうでもない。
ふと。特訓時と現状を比べてしまっていることに気付き、士郎は苦笑する。こんな失態、師匠に知られたら特訓の名目で半殺しの憂き目にあうこと確実だ。
冗談混じりの想像であったが、気を引き締めるには十分。動ける程度には回復した両足で立ち上がり、稼働限界を確かめる。

「林の中まで飛ばされたのは、不幸中の幸い、ってとこか」

呟き、ストレッチ。すでに呼吸は落ち着いている。現状の確認も終了。円蔵山の林の中まで飛ばされたのは、士郎にとっては幸運以外の何物でもない。

すぐ側の大木に足をかけ、一気に頂点まで駆けあがる。体の節々はまだ痛むが、この程度は問題ない。上手くバランスをとり、視力を強化。柳洞寺境内へ視線を向ける。

「・・・・・・おいおい、マジですか」

若干顔を引き攣らせて、無意識のうちに言葉を零す。

視線の先には、白い少女。

「――――」

パクパクと。見せつけるように大きく開閉する口。

それが意味すること、それすなわち。理解できない士郎ではない。

「・・・・・・・くそったれ」

視線はそのままに。顔も引き攣らせたまま。

両足に強化をかけたまま、士郎は後方へと跳ぶ。

「・・・・・・・・・了解だよ、くそったれ」

聞こえるはずの無い呟き。

視線の先の少女は、満足そうに頷いた。

■

先ほどまで相対していた剣士は消えた。
勝負は預ける、とだけ残して、その場を去った。
残ったのは、侍、いや、百姓が一人。

「さて、我が身は何時まで保つか・・・・・・」

崩壊した山門を見やり、瓦礫の一つに腰を下ろす。
ひと時前の喧騒はどこへやら。月は雲に隠れ、風は止み、鳥の鳴き声すら聞こえない無音。

「夜明けと共に、か・・・・・・」

依り代は破壊された。魔力供給は閉じられている。内包する魔力も残り僅か。
固有のスキルを使用したところで、山間から覗く陽を見るのが精いっぱいだろう。それでも、一百姓の最期としてはずいぶんと綺麗なものだ。

「して、何の用よ、客人」

閉じた目は開かず。気配だけで察し、声をかける。

「や、問うまでも無い、か」

ク、と。自ら問いておきながら、その陳腐さに思わず忍び笑いが漏れる。

ここに来た時点で、その真意がどうであれ目的は一つ。ソレが分かっていながらの問答など、愚問以外の何事でもない。

「生憎、ここにはしがない門番しかおらぬ。それでもよいというのなら、相手仕るが？」

立ち上がり、抜刀。闇夜にも映える愛刀。

どうせ消えゆくこの命。最期を華やかに散らしたところで何の問題は無い。

「さぁ、如何するか？」

■

「・・・・・・簡単、こんなの何度だってやってきた事なんだから・・・・・・・
失敗なんてしない、失敗なんてしない、失敗なんてしない・・・・・・！
こんな簡単な治療、手こずった事なんて一度も無い・・・・・・・！」
「ひ・・・・・・ぁ、ああ、あ――――
や、やだ、助けて、誰か、お願い、お願いぃいい・・・・・・・！
たすけて、たすけてよぅ・・・・・・！
こんなのうそよ、いままで、いままで失敗した事なんて、ただの一度もなかったのに・・・・・・！！！！」
「いや――――――死なな、いで。・・・・・・死なないで、
死なないで、死なないで宗一郎・・・・・・・・・・・・！！！！」

「カカカッ、お困りのようじゃの」

「っ！・・・・・・誰よ！何よ！何なのよ！！」
「流石は英霊、かの。幾許も残されてないというのに、大した威圧よ」
「・・・答えなさい、くだらない問答をしている暇はないの」
「カカカッ、助力を請うておったから来たのじゃがな」
「じょ、助力・・・・・・・・・？
ぁ・・・・・・助けられるの？宗一郎を助けられるの！？」
「其れは主次第じゃ」
「――――――っ！！お願いっ！助けて！何でもするから！！」

「・・・・・・其の言葉、偽りはないの？」

第二十一話　真意と目的（後書き）

・変更点は、剣対暗から暗の独白までの間。

・キャスターとの対峙が大幅短縮。というわけで、二十一話目で柳洞寺攻防戦は一区切り。

・四話でちょこっとだけ書いた、師事した二人のうちの一人について。名前を上げなくても、誰だかは分かりますよね（笑）？

・いや、本編には出てきません。あくまでも回想シーンのみのご登場となります。

・ちなみに、戦闘スタイルが似通っているという設定なのですが・・・・・あれー？近接からの肉弾戦しかしていないような。

第二十二話　休息と約束

茹で上がった卵の殻を剥き、ボウルの中へ。潰してマヨネーズとともに混ぜ、塩コショウで軽く味付けしたら、ミミを切り取ったパンにはさむ。タマゴサンドの出来上がり。同じような要領で、ツナサンドも作る。茹で時間も含め、所要時間は十五分ほど。
切り取ったパンのミミは、砂糖にまぶしてフライパンで炒める。つなぎの軽食。ちなみにこれ、セイバーのお気に入りだったりする。
所要時間は三分ほど。

「ふは、ぁ～・・・・」

あくび一つ、傾く視界。
トびそうになる意識をつなぎ止め、どうにか体勢を立て直す。
正直、まだ体の節々が痛み、お世辞にも体力が回復しているとは言えない。
だが、それとこれとは別。泣き言は、すなわちひとしく断罪。これくらいの労力で回避できるなら安いもの。

「大丈夫ですか？酷い顔色ですよ」
「・・・・・・・・・・まぁ、自業自得だからな」
「？」

『さて、シロウ。何か釈明することはあるか』

剣の切っ先を床に突き刺し、大魔王のごとく眼前に君臨する我がサーヴァント。語調こそ平淡だったが、噴き出る魔力が如実に彼女の感情を顕してくれていました。
其処から先は、折檻という名の調教と八つ当たり。さしもの俺も、

狭い室内でサーヴァントから逃げることは出来ませんでした。今こうやって五体満足で動けているのが奇跡的なんですよこんちくしょう。

「ふぅ・・・・・・ん、出来た。持って行ってくれ」
「あ、はい。了解です」

数十分前までの折檻を回想しながらも、体は勝手に日々の労働をこなす。染み付いた行動規範は、如何に疲労と痛みでボロボロであろうとも、体が動く限りは実践できるよう。
出来上がった朝食を間桐嬢に渡して俺は裏庭へ。先に洗濯物、それから掃除。食事はその後。
働き手が俺しかいない以上、サボるわけにはいかないのです。間桐嬢が手伝ってくれるおかげで、だいぶ楽にはなったが。

『大丈夫です。間桐邸で使っていたのと同じ型ですから』

言峰家の洗濯機を見ての第一声。二年前の機種とはいえ、なんとも頼もしいお言葉。不覚にも涙しそうになったのは秘密。腐れ馴染みだったらこうはいかない。
いや、むしろあいつなら、混乱した挙句にガンドぶっ放してボコボコの穴だらけにするくらいのことはしてくれる。

「聖杯戦争が終わったら、最新の洗濯機でも送ってやろうかな」

誕生日プレゼント代わりに。
習うより慣れよ、なのですよ。

■

「何か弁明があるのなら、遺言代わりに聞いてあげるけど？」
「よし、とりあえず落ち着け」
光る魔術刻印。向けられた人差し指。光の無い瞳。
出会い頭早々にデッドエンド。首根っこ掴まれて屋上まで連行。気分はドナドナ。
「しらばっくれる気？逃げられるとでも？へぇ？」
象られた笑みから、一転して無表情に。セイバーに続いて貴女もですか。背中をつたうは冷たい汗。背後に具現化している修羅。
「あのー・・・・・・・遠坂さん？」
「・・・・・・・・・（にっこり）」
象られた笑みの怖いこと怖いこと。叫び声をあげなかった自分を大いに褒めてやりたい。
原因不明の癇癪に、逆切れと八つ当たりは遠坂凛の十八番。被害を受けるのは専ら俺こと言峰士郎。それは、初めて出会ったときからの不変の理。
現状の打開と救いを求めて赤いのを見やるが、目が合う前に顔をそらされる。マジですかい？

「ええと・・・大真面目に理由が分からないのですが・・・・・・」
「へぇ・・・・・・」

ピシリ、と。確かに何かがひび割れる音がした。
具体的には、張ってあるはずの結界とか築数十年の校舎とか。

「士郎は、分からないんだ？ふぅん」
「士郎は、思い当たらないんだ？ふぅん」
「士郎は、私に言わせるんだ？ふぅん」

怒涛の三連コンボ。背後の修羅は阿修羅へ変貌。
打開と救いと一抹の希望を込めた視線を赤いのに送るが、いい笑顔でサムズアップ。あれか、なるようになれと？なるようにしかならないと？

「まだ、分から、ない、の？」

光の消えた瞳。静かな、それでいて重量感をもった言葉。ゆらぐ景色。淡く光る周囲。

「・・・慈悲は？」
「・・・・・・・・・（にっこり）」

どうやら、気づかないうちに地雷を踏んでいたらしいです。確約された嬉しくない未来。どう足掻こうとも逃れられないよう。

「・・・・・・・凛」

ならば。せめて。

「知ってるか？牛乳を飲んでも日本人には意味ないんだぜ。欧米人とは違って、体内に栄養分を吸収するための機能が備わってないからな。つまるところ、無駄な・・・・・・」

「・・・・・・・・・（ぶちっ）」

ぴぎゃー。

■

「じゃあ、柳洞寺の面々については特に問題なしと」

「・・・・・・理解が早くて助かります」

荒縄でぐるぐる。で、逆さ吊り。手首に食い込んだのが擦れてとても痛いです。

「さっさと答えればよかったのよ。煙に巻こうとするからそうなる

の」
「いやー、思い当たる節が多すぎて・・・・・・イエ、ナンデモアリマセン」
ギロリと一睨み。泣く子が黙るどころか引き攣け起こしますぜ、それ。
「・・・あー、先に言っておくが、答えられるのはここまでな。坊主どもの安否は気にするな、以上」
「それだけ聞ければ上等よ」
ニンマリ。悪魔の笑顔。がくがくぶるぶる。
今のこの顔のミス・パーフェクトを見たら、ファンクラブの人間はどんな反応をするだろうか。
「懸念対象がなければ気兼ねする必要性はないからね。後始末の方、頼むわ」
「わぁ、流石は派手に、優雅に、豪快にの遠坂の姐御。普通の感性の人間だったら絶対にそんな発言はできませんぜ、ひゅーひゅー」
「・・・・・・アーチャー」
ぐるんぐるん、まわる視界。
だが残念。この程度、かつての特訓に比べればぬるま湯も同然。
「Angels we have heard on high
Sweetly singing o'er the plains,
And the mountains in reply
Echoing their joyous strains~」
「・・・・・・アーチャー、止め」

ぱきっ、ぺきっ、ごきんごきん。

「そんなにクリスマスが恋しいのなら、せいぜい夢見ていなさい。・・・・・・改良版、喰らうがいいわ」

ぎゃひー。

■

「ぐぅ、痛ぇ・・・・・・」

トオサカスペシャル・其之六。フルパワーでガンドを掃射し、たたらを踏んだところで内臓一発。そこから地面に押し倒して、マウントポジションからフルボッコ。最後に再び全力全開フルパワーでガンドを顔面に叩き込む。

一連の動作に、怒りにまかせてはいけない。最後まで笑顔で実行。

解析終了。タネは、割れた。

「いや、解析する意味がないけどな」

どうせ次は其之七に改良、グレードアップしている。対策をたてるだけ徒労に終わる可能性が高い。
が、まぁ、似たような技なら対処もできるし、あながち無駄な行為じゃない。其之六も、前半部分は其之五と変わりなかったし。

「お待たせいたしました」

運ばれてくるコーヒー。漂う芳醇な香り。
コーヒーに詳しいわけではないが、いつも飲んでいる安物とは大きく違うことはわかる。

「さて・・・・・・」

眼鏡をかけ、聖書を黙読。専らな時間の過ごし方。
約束の時間までは、まだ一時間ほどの余裕がある。ギリギリまで後処理の指示、学校の結界に労力を割くほうが合理的だろうが、たまにはゆっくりのんびりと過ごしたい。昨夜、あんなことがあったばかりだし。
・・・・・・胃が痛むのは気のせいだ、そうに違いない。

「・・・・・・早く春にならないかな」

窓から見える街路樹は、いまだ蕾も見れない丸裸。いくら冬木市の冬が温暖とはいえ、蕾が膨らむにはまだ早いらしい。
現実逃避？こらこら、感傷に浸っているだけデスヨー。

カランコロン――――・・・

来客を知らせるベル。小走りで向かう店員。
確認するまでもない。わざわざ視線を向けなくとも、溢れでるオーラだけで誰かの判別は可能。

「お待たせいたしました、コトミネシロウ様」

身に着けているのは、いつもの白いマフラーに紫色のコート。
流れるような銀色の髪の毛に、女性が羨むような雪のような白い肌。
そして赤い瞳。
ため息はつかない。休憩は終わり。さぁ、今日はもう何も起こらないことを祈ろう。

「約九時間ぶりで。アインツベルン殿」

第二十二話　休息と約束（後書き）

・狂主従による絶叫アトラクションがなくなり、代わりにセイバーの折檻。

・他、いくつか細々と。前二話に比べると、一目で分かるほど大きな変更点は無し。

・内容こそ変わりましたが、流れは変わっていません。

・好感度メーターがあるとしたら、セイバーから士郎への好感度は下降気味です。・・・・・・あれ、デレの予定は？

第二十三話　停滞と再動

衛宮切嗣。
衛宮家末裔。父親の名前は衛宮矩賢。
性格は冷徹で合理的。数多くの戦場を渡り歩いている、フリーランスの魔術師。有名な『魔術師殺し』。
目的達成の為ならありとあらゆる手を尽くし、魔術師でありながら近代兵器の使用も厭わない。名家の出ながらにして、異端。
衛宮矩賢が封印指定を受けていた為、幼時は南米のアリマゴ島にて過ごす。だが、実験事故によって衛宮矩賢は死亡。以後は、フリーランスの魔術師であるナタリア・カミンスキーと共に行動していたよう。
現在から数えて十八年前に一時消息不明となるが、第四次聖杯戦争にて姿を確認。アインツベルンのマスターとして参戦。セイバーのクラスを召喚し、最後まで勝ち残る。
だが、起動した聖杯を使うことなく破壊。その後の消息は、十年経った現在でも不明。
危険度はＡ－。過去数度に渡る対立結果からも、敵になればこそ味方になることはない。

聖堂教会ブラックリスト、『衛宮切嗣』の項より抜粋。

■

コーヒーが運ばれてくる。
運んでくるのは、大学生くらいの女性店員。おそらくはアルバイトだろう。眼鏡をかけた、知的美人の言葉が似合いそうな女性だ。

「ごゆっくりどうぞ」

マニュアル化されたであろう言葉。笑顔を忘れず、お辞儀も忘れず。
去りゆく歩みも一定の速度を保ったまま。
すごいな、と。そんな一連の行動を見て、士郎は素直に感服した。
本当にすごいな、と。

「さて、シロウ。説明のほどを願うが？」

すぐ隣から遠慮なしに放出される黒いオーラ。願うのは表面上。口ごたえは、すなわち断罪。
おかしいな、死亡フラグは回避できたはずなのに。どうしてこうなった？どこで選択肢を間違えた？何をいつどこでどのようにどうして間違えた？ただでさえ酷い気分が、より一層陰鬱さを増す。

「二度は言わないぞ」

殺気混じりの催促。現実逃避すらさせはしない。

心の中で盛大にため息。泣きたくなるのをこらえて、意識を現実へ。ゲヘナにて亡者どもと酒を酌み交わしながら高笑いをしている父親の顔が脳裏に浮かんだ辺り、もしかしたら今日が自分の命日なのかもしれない。そんなくだらない考えが、士郎の気分を一層減退させる。

「・・・・・・どこからの説明を御所望で？」

「全てだ」

嘘偽りが通じると思うなよ。命が惜しければとっとと吐け。

無表情ではあるが、漏れ出るオーラは隠しようがない。一言に込められたその想いを正しく理解し、否、理解させられ、士郎の顔が目に見えて引き攣る。

ちらりと。救いの意を込めた眼差しをイリヤスフィールに向けるが、我関せずといった様子で紅茶を口にしている。流石は貴族。何時でも何処でも如何なる時でも優雅な振る舞い。震えて見えるのはきっと気のせい。

「シ　ロ　ウ」

こつこつこつ。テーブルを指先で三回叩く。

静まり返った店内。誰も発さない、誰も動かない。外の喧騒すら届かない。完全に断絶した空間。

「・・・・・・怨むぜ、こんちくしょう」

呟きは虚空へ。一時間足らずで破却された願い。届かなかった祈り。頭を抱えても事態は好転しない。黙っていても悪化するだけ。正直に話しても折檻は免れない。

八方ふさがり、四面楚歌。おかしいな、こんなはずじゃなかったの

に。脆くも崩れ去ってしまったこれからの予定。主よ、私は何かしたのでしょうか？幻視の中で顔を背けられたのは、きっと気のせい。

こつこつこつ

間桐臓硯を滅して。魔主従と対峙して。自分のサーヴァントに折檻を受けて。弓主従に私刑を受けて。自分のサーヴァントに殺気を突きつけられて。

言峰士郎の一日は、まだ半分を過ぎたばかり。

■

「――――てことだ。理解できるか理解できるな理解したな理解しただろう理解しろ」

「戯け」

一言の下に士郎を叩き伏せると、セイバーはイリヤスフィールの方へ向き直る。

射殺さんばかりの険呑な視線。思わず泣きそうになる、が、そこは貴族アインツベルン。内心の怯えを露ほども見せず、しっかりと目を見据えて対峙。貴族の名は伊達ではない。
来るなら来い。確固たる意志を目に宿し、相手の言葉を待つ。やけではない。諦めでもない。いっつ、くりーく。

「ハンバーガーはないのか」
「へ？」

が、発せられたのは予想の遥か斜め上を行く言葉。脳内を浸食する疑問の羅列。ワンモアプリーズ。私、上手く聞き取れなかったわ。

「二度は言わんぞ。ハンバーガーはないのか」

聞き間違いではない。耳の機能が故障したわけではない。だからこそ理解できない。
目の前の相手は食事を要求している。サーヴァントのくせに。え？

「あー、残念ながらお前の期待するハンバーガーはこの店に存在しないぞ」
「無ければ作れ」
「何をのたまうか」

士郎、復活。流石に幼少期から内面の濃すぎる人物たちに育てられてきただけあって、そこらへんの対応と回復速度は目を見張るものがある。どうでもいいとか思ってはいけない。

「金ならやる。勝手に買ってこい」
「ほう・・・・・・金銭如きで買収されるとでも？」
「俺の話を聞いていたか？この店にはお前の望むハンバーガーはな

いの。食いたきゃ駅前まで行って買ってこい。ほれ」
「・・・・・・・・・」
ひらひらひら。目の前で揺れる五千円札。
セイバーの顔が葛藤に歪む。あと一押し。
「ちょっとばかし重要な話をしたい。ほんの少し外に出ていてくれないか？何か問題があれば令呪を使うから」
「分かった、ならば仕方ない。五分ほど席をはずそう」
即断即決即答即行無問題。五千円札を受け取り、悠々と外へ。その堂々たる振る舞いは英霊の名に恥じない凛然たるもの。店外へ出ると同時に、魔力をブーストして駆けたのは何かの見間違い。
「申し訳ないが、制限時間はあと五分。他に何か訊きたいことは？」
何事も無かったかのように事を進める士郎。この手は慣れっこ。すでに自分のペースは取り戻してある。
「・・・・・・いいの、アレ」
「何が？」
ああ、そういうこと。一言で納得した辺り、何気にイリヤスフィールも順応性が高い。
決して目を背けたわけではないので。
悪しからず。

■

「監督役で七人目かぁ。びっくりしちゃったわ」
「・・・・・・そんなわけない、と言いたいが」
「無駄よ。結構な魔力殺しを身につけているみたいだけど、私の目はごまかせないわ」
「何時までも隠し通せるとは思っていなかったが・・・・・・まぁ、こんなものか」
「ふん、シロウの見通しが甘かっただけだろう」
「お前が乱入しなきゃ、もう少し隠し通せていたさ。
・・・・・・むしろ、何故に今日あの店に来た？」
「サクラがな、良い店があると勧めてくれた」
「把握」

諸悪の根源を確認。みなまで言う必要はない。可愛い顔して随分な事をしでかしてくれるじゃないか。帰ったらどうしてくれようか。士郎の身から噴き出る黒いオーラ。場所を喫茶店から人気のない公園へと移り変えたので、一切の遠慮無しに放出。たーげっと、ろっくおん。やってくれるぜこんちくしょう。

「いつかは気付かれるモノだ。少なくとも、あの女狐にはバレていただろう」

「キャスターはどうでもいいんだよ。もう消えただろうしな」
「残念だけどまだ消えていないわ」
くるりと一回転。すぐ側のベンチに腰を下ろす。
「消えたら分かるもの」
意味ありげな視線と笑み、そして言動。
セイバーは分からないようだが、士郎は正しく理解する。
「・・・・・・ああ、そういうものだったな」
「ええ、そういうものよ」
面倒事はまだ終わっていない。その事実だけで十分気が滅入る。
くすくすくす。そんな士郎を見てイリヤスフィールは笑う。
「問題無かろう。来るのならば叩きつぶす。それだけだ」
「キャスターの魔術で足止めされていたようだが？」
「・・・・・・・イリヤスフィール。断罪の時間だ」
「ええ！！？なんで私！？」
「いやいや、四騎入り乱れての大乱闘は中々壮観だったぞ」
「・・・・・・・趣味が悪いぞ、マスター」
ヒュン。風切音を鳴らして、不意打ちの一撃。だが、あらかじめ予測していたかのように、士郎はその一撃を受け止める。懐に入れておいた武装で受け止める。
ぎりぎりぎり。拮抗する力。セイバーの体勢が悪い。力を十分に込められない。だが、気を抜けば斬り捨てられる。士郎の背中を冷たい汗が伝う。
けたけたけた。そんな二人を見て、我慢できずに腹を抱えて笑い始

めるイリヤスフィール。ツボにはまったのか、なかなか顔を上げられない。必死に笑いを押し殺そうとしては、失敗して吹き出すのを繰り返す。

「あはは、仲いいのね、二人とも」

「これを過度なスキンシップ程度として捉えられる貴女を尊敬します」

軽口を叩いて返すが、すでに右腕の力は限界。押し切られる前に後方へ大きく跳躍。魔力をブーストした神速の一撃は空を斬る。一瞬でも遅れていれば、胴体が上下二つに泣き別れしていた。非難めいた視線を送るが、本人はどこ吹く風。

「・・・・・・うん、決めた。二人とも、一番最後に殺してあげるね」

そんな二人のやり取りを見て、幾分か嬉しそうにありがたくない宣言がなされる。

対し、士郎は心底嫌そうに、セイバーは不敵な笑みを浮かべて。二人の反応は対照的。

「勘弁してくれ、俺の心労を増やさないでくれ」

「最後と言わず、今すぐこの場でどうだ。時刻も手頃だ」

都合のいい解釈をすれば、両者賛同しているとも取れなくはない言葉。

どう解釈したかは不明だが、満足そうにイリヤスフィールは頷く。

「今日はもう帰るね。私が殺すまで死んじゃダメだよ！バイバイ！」

満面の笑みと物騒極まりないお言葉。
くるりと。そのまま身を翻して走り去ろうとし――――

――――その場に膝をついた。

「・・・・・・バーサーカー？」

第二十三話　停滞と再動（後書き）

・前話同様、大きな変更点はなし。こっそり改訂。

・ごめんなさい、次話についてはプロット以外まったくの手つかずです。

・レポートと改訂に全力を注いだ二週間でした。

・夏休み入りました！更新速度が少しは上がるかな？

・次話投稿は一週間以内でお願いします。

P．S．　すーぱー☆あふぇくしょんが、頭の中でリフレイン。実に恐ろしき中毒性。

第二十四話　猶予と限界

例えば、ニュースで世界の恵まれない子どもたちの実情とやらを見て。

例えば、ボランティアで向かった被災地の実情を目の当たりにして。

例えば、近所の家で子どもが虐待されているのを知って。

例えば、偶然事故現場に居合わせてしまって。

例えば、雨に打たれている子猫を見て。

例えば、大切なモノを失くした少女を見て。

人の形を象ったナニカは、何を思えるのか。

■

酒が飲みたい。それも浴びるように。
一時の快楽に溺れて何もかもが不明瞭な蕩けた世界に全てを委ねさせてしまえば――――それはどれだけ楽なことなのだろうか。高級酒の必要はない。粗悪な安物で良い。目覚めがどれだけ最悪であっても一時的に全てを忘れられればそれでいい。むしろ酒でなくとも酔いつぶれればエタノールであってもかまわない。堕落が罪であるというのならば、それはいつかどこかで贖おう。覚えていれば。相も変わらず生気のない目を前へと向ける。その先には、少女が一人。

――――倒壊した家屋。生きながらに燃やされる人々。木霊する怨嗟の叫び。

脳裏にフラッシュバックした映像に僅かに顔を顰めると、士郎は弱弱しく息を吐いた。久々の光景、それも白昼夢とは。振り払うように空を見上げる。満天の星空。あの赤く濁った空ではない。腐れ馴染みの顔が脳裏に浮かんだ。ざわめいた内面が、不思議と落ち着きを取り戻す。今度は、安堵の色の混じった息が出た。

「大丈夫か、シロウ」

主の、微量な変化。傍目では気がつきにくいが、そこはラインを伴った主従関係。目ざとく感じ取り言葉をかける。

――――どくん

心臓が、跳ねる。驚きに、ではない。士郎自身も把握できない不自然な跳ね方。

特技と言うよりは特性の一つであるポーカーフェイスと、どうしようもなく無難な言葉でその場を濁す。心臓の鼓動は何時も通り。不自然な跳ね方はさっきの一度きり。だが、吐いた息はまだ若干震えていた。

「・・・・・念のため周りを哨戒してきてくれ。五分ほどでいい」

不自然な態度。だが、特に何も言わずにセイバーは従う。込められていた意味を正しく理解してセイバーは従う。

離れていく気配を感じながら、士郎は心の中で感謝した。漏れた息は、やっぱりまだ震えている。今は少し、余裕が欲しい。

「・・・・・・はは っ」

漏れた自嘲。今の自分をみたら、あの腐れ馴染みはなんて罵倒するだろうか。十年来の相棒。何もかもを失くした言峰士郎を構成させる、かけがえのない存在。脳裏に浮かんだその姿に、知らず知らずのうちにくすりと笑みを漏らす。

「・・・・・・所詮、無い物ねだりだがな」

震えも動悸も、完全にとはいかないが収まって来てはいる。

顔を上げ、視線を戻し、ため息一つ。

崩壊した城。散乱する瓦礫。生々しい爪痕。立ち尽くす少女。

ここで無様に震えている余裕は、今の言峰士郎にない。

「・・・・・・ああ、ったく」

落ち着かせる余裕が無いのならば、上書きして塗りつぶしてしまえ。

ガリガリと頭を掻いて、一歩を踏み出す。幸いにも目の前には責務

や仕事という名の厄介事。得体の知れないナニカを黙らせるには御
誂え向きのシチュエーション。たまには状況に流されてみるのもい
いのかもしれない。流されてしまったせいでこうなった、等という
本末転倒な考えは速やかに破却滅却焼却棄却。

「・・・・・・さて、アインツベルン殿」

めぐみあふるる神のみまえに
求めよさらば与えらるべし
たとい天土崩れ去るとも
主のみことばはたえて変わらじ

「貴女には、二つの選択肢がある」

■

『今日は遅くなる。適当に出前取っとくからそれ食え。以上』

電話越し。反論許さぬ一方的な言葉。疑問が言葉として形を為す頃
には、受話器越しに聞こえる音は只の無機質な機械音と成り果てて

いた。

「・・・・・・はぁ」

零れたのは間抜けな息漏れ。意志を介さぬ勝手な取り決め。
己の胸に巣くう理解しがたい違和感に首をかしげつつ、間桐桜は修道服に身を変える。場所が変われば状況も変わる。冬木教会の訓示、働かざる者食うべからず。といっても、桜に出来ることは礼拝堂を見回るか懺悔室に籠るかのどちらかだが。

「――――――――」

音が出ないように扉を開けると、ちょうど誰かが己の罪を告白しているところだった。
別に反応する必要性はない。懺悔室でありながら告白室。冬木教会の主が学生であることは周知の事実であり、とすれば平日にまともな運営が為されていないのもまた周知の事実。平日にこの懺悔室に来る人は、ただ己の罪を吐きだしたいだけであり、返る言葉を望んでいるわけではない。
音が出ないように、静かに備え付けの椅子に座る。気配遮断はお手の物。相手は気付いた様子もなく告白を続ける。目を閉じ、意識を狭め、思考を闇へ。ただその場にいる人形と化する。

――――それでよい

しゃがれた声が脳内に蘇る。好悪の感情すら沸かない。動揺も戸惑いも拒絶も何も無い。泣きわめくことも叫ぶこともなく受け入れた己が運命。
そう、運命だったのだ。抗えず、覆せず、避けれず。■■桜が生まれてきたときから、純然たる未来として決定されていた事項。嘆く

ことも、怨むことも、卑下することすらない。なぜなら、それは――

――――パタン

扉を閉める音。間桐桜は目を開けると、小さく息を吐いた。時計を見れば逢魔ヶ刻。ステンドグラス越しの陽の光は大分弱まっている。もう後幾許もしないうちに空は黒く染まるだろう。六十年周期の大祭典の活性化。

ふぅ、と。小さく息を吐くと、懐からロザリオを取り出す。銀色のロザリオ。法衣と一緒に渡されたロザリオ。

間桐桜と言峰士郎は、それほど親しいわけがない。当たり前と言えば当たり前だ、彼らには何の接点もない。活動範囲に相互の日常が入り組むことはほぼ皆無だ。唯一、あえて在るとするのならば彼らの周りの存在という理由が挙げられるが、それでも日常的にとはいかない。

だが知っている。間桐桜は言峰士郎を知っている。それは、自身の家がマキリ、だからというわけではない。

ただ純然に、言峰士郎という存在を、間桐桜は知っている。

興味、と言い換えてもいい。少なくとも、それは知識として括れるモノではない。彼女が知覚し認識する、数少ない存在の一人。

きつく、固く、逃さぬようにロザリオを握りしめる。力を込め過ぎて、手が白くなるくらいに強く。本人が意図しないままに、ただ強く。敬虔な信者が神に祈るように。一心不乱に、救いを求めるように――――

――――ぐぅ、と。お腹が鳴った。

■

遠坂凛は困惑していた。
それは、常に優雅たれが信条の彼女にしてはとても珍しいことで、今この場に腐れ馴染みがいたら、冗談抜きに大真面目な顔をして心配するであろうこと。多分、無理矢理に休ませようとするほどに。

「・・・・・・拙いわね」

ガリガリと。些か乱暴に頭を掻くと、凛は自身の右拳を左掌に打ち付けた。確認するように、若干強めにもう一度。小気味の良い音が夜闇に響く。

「やられたわ」

言葉にするまでもない。目すれば分かる。目の前の現実。
忌々しげに顔を歪めると、もう一度凛は言葉を吐いた。やられた、と。

「遠坂凛を狙う。その一点においては完璧な戦術だな」

口元に手を当て、さも感心するように言葉を紡ぐ従者。それを横目で見やり、凛は強化した足で地面を踏み抜く。砕け、飛び散り、穿たれた穴。行為も、結果も、如実に彼女の心情を顕していた。

「・・・・・・どう？」

「頃合いだな。当初の見立て以上だ」

そう。短く呟くと、凛は左手で頭を掻く。最悪の気分だ。実に最悪の気分だ。砕けるほどに強く、奥歯を噛み締める。

「術式の上に種類の違う複数の術式が重ねられている。あまり良い類のモノではないな」

己の従者の冷静な声。目を閉じ、熱くなった頭をリセット。思考をクリアに。常に優雅たれ、遠坂凛。

「・・・・・・つまりは、協力者がいる、ってことかしら」

「この術式を見る限りでは」

再び思案する従者を見て、もう一度凛は頭を掻いた。何があったかは知らないが、何故か予想以上に力を強めている結界。それも、見立てよりもずっと強く。

「・・・・・・ここで考えていても無意味よ、アーチャー」

吐き捨てる。ここで自分たちに出来ることは無い。癪だが、それを認める、認めざるを得ない。

ギリリと、奥歯が鳴った。

■

「・・・・・・ホント、相変わらず辛気臭いところね」

眼前に聳え立つ冬木市唯一の建造物。見やり、苦々しげに顔を歪めて、凛は大きく息を吐いた。

「行くわよ、アーチャー」

正面の扉を開ける。ぎぃ、と。耳障りな音を立てるが、気にせず中へ。僅かな明かりに照らされる礼拝堂。慣れた歩みで一直線に居住スペースへ。

――――もはや、四の五の言っていられる状況ではない

それが、遠坂凛の下した結論。覆しようもない事実。背くことのできない現実。

これが自分の父親だったなら、もっと上手く立ち回れていただろうか？もしくは、あの腐れ馴染みの養父だったら？ランサーのマスタ

ーだったら？他の魔術師だったら？
そこまで考えて、凛は薄く笑う。自分らしくない。まったくもって自分らしくない。あまりにも『遠坂凛』からかけはなれた今の自分。腐れ馴染みが見たら何と言うだろうか。
パシン、と。頬を叩いて切り替える。可能な限り強く叩いたせいで、大分頬が痛い。まぁ、目覚まし代わりだ。大きく息を吐いて、一歩前へ。

「入るわよ」

一応声をかけてからドアノブを捻る。何時も通り鍵はかかっていない。遠慮することなく中へ。二人の間にプライバシーなどという言葉は存在していない。
すん、と。鼻を鳴らすと嗅ぎ慣れた臭い。また何かのジャンクフードだろうか。腐れ馴染みの健康面が少し心配になる。同居人がいないと、アレはどこまでも無頓着になってしまう。

「・・・・・・はぁ」

世話のかかる腐れ馴染みの事を思い返し、何故かため息が出る。こんな状況でため息が出る自分に対してであり、また原因を作っている張本人に対しても。自然と、不安定に波打っていた内面が収まった事に対しては感謝してもいいのかもしれないが、アレに感謝など滅多なことではしたくない。顔に手を当て面白おかしく器用に七変化させて、凛はもう一度ため息をついた。

「・・・・・・らしくないわね」

自分は弱い。思い、考えている以上に弱い。非常時に腐れ馴染みの事を思い返して平静を保とうとするくらいに――――遠坂凛は弱い。

十年間、何をするにも一緒だった腐れ馴染み。半身と言ってもいい。大切なモノを無くした自分を補佐していた片割れ。欠けていた者同士の結合。兄であり、弟であり、家族であり、幼馴染であり、友であり、相棒であり――――

「・・・・・・ホント、らしくないわね」

被りを振って打ち消す。くすりと漏れた無自覚の笑み。あれだけ荒れ果てていた内面はもう落ち着いている。遠坂凛に戻っている。

「よし」

気合い一発、掌を打ちあわせる。不敵な笑みを浮かべて前へ。

「士郎、急用よ。手を貸しなさい！」

第二十四話　猶予と限界（後書き）

・二十四話目。プロット通りに進められたのは最初だけ。あれ、一話丸々士郎とイリヤだけのはずだったのに？

・書き終わったはいいけど、タイトルが思い浮かばなくて悩んでいました。真面目に考えているのですよ、これでも！

・次話投稿目標は二週間以内。ちょっと野暮用込みの為。別に続きが白紙で困っているわけじゃないんだからねっ！！ちゃんとプロットは考えてあるよ！！

・ではでは、また次話で。

第二十五話　白と黒

半分の月。瞬く星。遮るもののない夜空。そよぐ風。遠い光。
散らばる瓦礫。絶えた息遣い。唸る怨嗟。産み付けられた呪い。覆う闇。
慟哭、怨嗟、切望、哀願、悔恨、罵倒、憎悪、嘆願、後悔、憤怒、無念、絶望。
死傷者五百、倒壊した家屋は百三十四棟。
冬木市の大災害から早一か月。未だ生々しい爪痕が残るその中心地。
立ち尽くす少年と少女。

――――ねぇ

月が地上を煌々と照らしていた。寒風が容赦なく吹き付けていた。
舞い上がった汚れが辺りを舞った。
意を決したように、漸く少女は口を開いた。凛とした声だった。おおよそ、この場では似つかわしくない声だった。

――――ねぇ

もう一度。だが、今度の声は震えていた。か細くて、今にも消え入りそうな声だった。先ほどの凛とした響きは何処にも見受けられなかった。
そんな声が、幾度となく少年の脳裏で反芻された。

――――ねぇ

不思議だった。こんな自分に構おうとする少女が、少年には不思議でならなかった。彼の新しい父親となった人物の言葉が正しいのな

ら、少女は、それこそ少年などに構っている時間など無いはずだった。
何故少女は自分などに構おうとしているのか。いくら考えても答えはわからなかったが、ならば分からないままでいようと、少年は思考するのを止めた。そもそも、少年自身何故こんなところに来ているのか明確な理由が分からないままなのだ。ならば、それ以上の疑問について思考しても答えが出ないのは何より明らかだった。

――――……

気がつけば、声は消えていた。月は緩やかに下降を始めていた。寒風が容赦なく体に吹き付けた。
何かが、体に絡まった。冷えた体に、冷えた心に。それは確かな暖かみをもって触れた。

――――ねぇ

もう一度、声が聞こえた。相も変わらず震えて、今にも消えそうなくらいか細い声だった。
ぎゅっと。体を抱きしめられた。逃さぬように、精一杯の力を込めて抱きしめられた。

――――帰ろう、しろうくん……

終わりと、始まり。

■

「で、何か言い残すことは？」
「流石遠坂さん、疲労困憊で帰ってきたところにドロップキックをかます人間はやっぱり言う事が違うねぇ。涙が出てくらぁ」
「あら。むしろドロップキック一発で済ました事に感謝して欲しいくらいなんだけど？」
「うわー、そこで当然のように自分の行動の正当化を要求しやがりますかー。てか展開が唐突過ぎて何が何だか分からないまんまなのですが。詳細求む」
「察せ」
「何その無茶ぶり」

ぎゃーぎゃー、わーわー。
アインツベルンの森での問答から約三時間。特に大きな問題なく無事に帰還した士郎を出迎えたのは、腐れ馴染みによる見惚れるような会心のドロップキックだった。

「ええい、とりあえず一発殴らせなさい！！」
「うおぅ！？」

光る拳。伝達する力。唸るような風切音。最短距離を真っ直ぐに。

真っ直ぐに。
培われた経験。閃きと勘。最小限に無駄なく。命令よりも早く左へ。
左へ。
空を切る拳。
焦げた前髪。

「危ねぇ、殺す気か！！」
「避けるな！！　喰らえ！！」
「殺る気満々！？」

ぎゃーぎゃー、わーわー。
ぶん、ひょい、ぶん、ひょい、ぶんぶん、ひょいひょい。

「……で、私はどこに行けばいいのかしら？」

少し離れたその後ろ。玄関口で騒ぎ始めた二人をしり目に、置いてけぼりのイリヤスフィールは小さく溜息をついた。
実に疲労の色の濃い溜息だった。諸々の意味を含んだ重い溜息でもあった。

「……説明しないシロウが悪いんだからね」

逡巡は一瞬。不都合は全てシロウのせいに。
一言。消え入りそうなくらい小さな声でそう呟き、教会内部に足を踏み入れる。入るついでに扉を閉めてやろうかとも考えたが、そんな面倒な労力はしたくないので即棄却。この小柄な体躯に教会の重い扉は過ぎた重労働だ。

「……厭な空気」

一歩。踏み入れたばかりでは分かりにくいが、奥に行くごとにその傾向は強まる。
教会とは、もっと清貧な空気に包まれているべきではないのか。全身に纏わりつく厭な空気を振り払うように、足早に奥の半開きの扉へ。光が漏れていることだし、多分そこが居住スペースだろう。違っていたらシロウのせい。

「ええと……こういう時は『お邪魔します』だったかしら？」
郷に入っては郷に従え。扉の前で軽く一礼して、小さな声で『おじゃまします』。
人生初めての他者の家。詰め込んだ知識と身に着けた礼儀作法に誤りはない。多分。

「畏まる必要はない。とっとと入るがいい」
そんなイリヤスフィールのすぐ後ろ。
振り返れば、相も変わらぬセイバーの姿。

「あら、形はどうあれ私は『招かれた客』。礼儀を払うのは当然よ」
「人の目がなくともか」
「礼儀に視線の有無は関係ないの。見てないからといって疎かにしては在り方が廃れるわ」
「ふむ……」
顎に手をやり、さも感心したように頷くセイバー。
その仕草に満足したのか、同じように一つ大きく頷き歩を進め――
――
「……ねぇ」

一歩。セイバーに背を向ける形で、足を止める。

「一つ訊かせて」

先ほどまでの雰囲気はどこへ。
震える語勢。振り絞るような語調。重々しい語感。
遠くなっていく音も。
狭まっていく光も。
その全てに一切を構うことなく。一言一言を噛み締めるように。

「……貴女は『セイバー』なの？」

問いを、一つ。

■

「というわけで説明を要求する」
「だから展開が唐突だっての」

満天の星空の下。月に照らされたベンチ。並んで座る二人。
これだけならば逢瀬や逢引といった言葉が似合うシチュエーションなのだが、言峰士郎と遠坂凛の二人においてはその限りではない。四肢を投げ出しボロボロの状態で座る士郎と不貞腐れ気味に体育座りをしている凛とを見れば一目瞭然である。

「……だから……ええと、その……」

何やら言い澱む腐れ馴染みの姿を見て、士郎はその居住まいを正した。おおよそ彼の記憶にある遠坂凛には滅多にない姿だった。遠坂凛が滅多に出さない姿だった。
過去の経験を鑑みても士郎に出来ることは少ない。士郎は、ただ傍にいればよかった。情緒不安定になった凛の傍にいればよかった。それだけで凛は落ち着いた。
なれば、今もそれでいいのだろう。人の手など滅多なことでは借りようとしない凛だが、こと士郎に関してはその域に止まらない。とはいえ。

「……はりーあっぷ、はーりーあっぷ！　時は金なり時間は有限、とっととちゃっちゃとぅお！？」

ぱんぱんぱん。わざと大きな声を出しながらこれまた無駄に力を入れて士郎は手を叩いた。今日はさっさと暖かいシャワーを浴びて暖かいベッドでぐっすりと眠りたい気分であった。寒空の下はいい加減懲り懲りであった。ついでに、こんな三文芝居のような雰囲気も懲り懲りであった。今の腐れ馴染みを相手に、わざわざ空気を読んで付き合ってやろうという気は起きなかった。
実に不愉快極まりないその仕種に相変わらず凛は頭を抱えたまま、しかし右手は意図するよりも早くに腐れ馴染みの頭を全力で捉え、これまた意図するよりも早くに握りつぶさんばかりに力が込められ

た。砕かんばかりの迫力であった。手加減をしようという気は一切無かった。

「と、とおさかさん！？　あ、頭が、頭が！？」

ぎりぎりぎり、ぎちぎちぎち、あががががが。
いったい自分は何をしているのか。ふと頭をよぎった現実に嘆息しつつも、右手に込めた力が緩まる事は無い。思考と行動とが必ずしも同方向に両立するわけではない事の実例であった。

「ちょっ、タップタップ！」
「うっさい、大人しく喰らってろ！！」
「わ、割れる、割れる！！」

ぎゃーぎゃー、わーわー。
強引に士郎の頭を引き寄せてヘッドロックに移行。タップ音をシカトし、割らんばかりに全力で締め上げる。疑問符だらけの行動であることはあえて黙殺。
実にグダグダな雰囲気であった。が、もしかしたらそれこそが士郎の狙いであったのかもしれない。
唐突に行き着いた仮説に顔を顰めると、より一層きつく締めあげた。
にゃろう、そんな風にアンタには見えたのか。

「ぬぉ、お、おお、おおう！！」

■

最後の力を振り絞った、とでも言うべきか。
緩んだ一瞬の隙を見逃すことなくヘッドロックから抜け出た士郎は、しかしそれ以上の行動に転じることなくそのまま倒れ伏した。顔面から突っ伏した。
限界であった。怒涛の一日を乗り切る為に行使した体は、悲鳴を上げることすら億劫だとでも言いたげに活動を強制停止した。

「……あー、やべっ」

薄れゆく意識の中。ここに来て漸くすっかりと忘れていた諸々の事項を思い出すが、時すでに遅し。
後々に控えている面倒事に顔を顰めつつも、しかして意識は闇の中。現実に戻るのと意識を失うのはほぼ同時。

「いや、こら、起きなさいな」

ぺしぺしぺし。後頭部を掌で叩くが起き上がる気配は無し。それどころか規則正しい呼吸音が聞こえ始める始末。
喉元過ぎれば熱さも忘れる。いったい自分は何をしていたのかと問われれば、黙するより他ない。眉間を揉んだところで何が変わるわけでもないが、このどうしようもない現実を受け入れるには一見無駄としか見えない手順を踏まなければならなかった。
寒風が、身に染みる。

「ったく、もう……」

一頻りの時間をおいて漸く凛も現実へと回帰すると、最後に一度、己の膝の上にて寝息を立てる腐れ馴染みの頭に拳を打ちこんだ。体勢も勢いも不十分な一撃であった。ノック程度の軽い一撃であった。

「……諸々については明日問いただすから」

とりあえずは今日はこれで手打ち。ぱんぱんと手を叩き合わせると、強化魔術を行使して腐れ馴染みの身体を持ちあげる。

細身の割には重いのだ、こいつ。

第二十五話　白と黒（後書き）

・実に約二カ月ぶりの投稿……お久しぶりです。

・当初はイリヤメインに話が進む予定でした。……あれ？

・夏休み中は更新速度が上がる？　もう夏休み終わっちゃったよ！
　もうすぐ学園祭だよ！

・次回更はここまで間を開けることはないと思います。……多分。

・ではでは、また次話で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2855s/

言峰士郎の聖杯戦争

2011年10月16日20時38分発行